

君は旧制一高を知っているか？ 1. 一橋キャンパス編

旧制第一高等学校のキャンパスを歩いてみよう

絵解き 地図と写真で歩く旧制高校

丹野義彦 (東京大学教養学部心理・教育学部会)

* 2020年5月10日 「1-7-4 予備門の学生生活 夏目漱石と正岡子規」を大幅に追加した

旧制第一高等学校の歴史

旧制第一高等学校は、下の図のように、①一橋キャンパス、②向ヶ丘（むこうがおか）キャンパス、③駒場キャンパスと移転した。

①一橋キャンパス

1874年（明治7年）、東京外国語学校から独立して「東京英語学校」が作られたのが最初である。1877年には「東京大学予備門」、1886年（明治19年）には「第一高等中学校」となった。第一高等中学校は、1889年（明治22年）、一橋キャンパスから本郷の向ヶ丘キャンパスへと移転した。

②向ヶ丘キャンパス

第一高等中学校は、1894年（明治27年）、「第一高等学校」と改称した。ここまでは「前史」とされ、ここから「正史」が始まる（下の図で赤く塗った期間）。以後、一高は順調に発展した。

1935年（昭和10年）、一高は、駒場にあった東京帝国大学農学部と「キャンパス交換」（校地転換）をおこなった。交換当時、駒場キャンパスは、1878年に作られた駒場農学校をひきつぐ東京帝国大学農学部であった。農学部は本郷向ヶ丘キャンパスへと移り、のちに東京大学農学部となった。

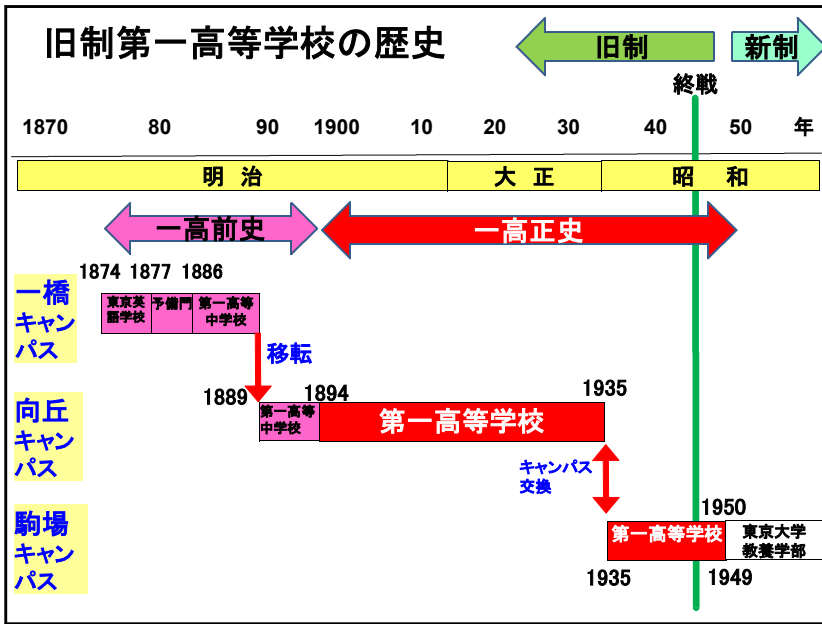
向ヶ丘キャンパスは、今は東京大学農学部となっている。

③駒場キャンパス

こうして一高は駒場キャンパスへと移った。1945年に終戦を迎え、日本の学校制度は「旧制」から「新制」へと大きく変わった。

1949年（昭和24年）には、駒場キャンパスに新制東京大学の教養学部が設置された。この時に、旧制第一高等学校と旧制東京高校が吸収された。こうして旧制一高は1950年3月に閉校した。

駒場キャンパスは、今は東京大学教養学部となっている。



地下鉄・電車で歩く旧制一高のキャンパス

一高の3つのキャンパスは、いずれも地下鉄・電車を利用して、簡単に回ることができる。

①一橋キャンパス

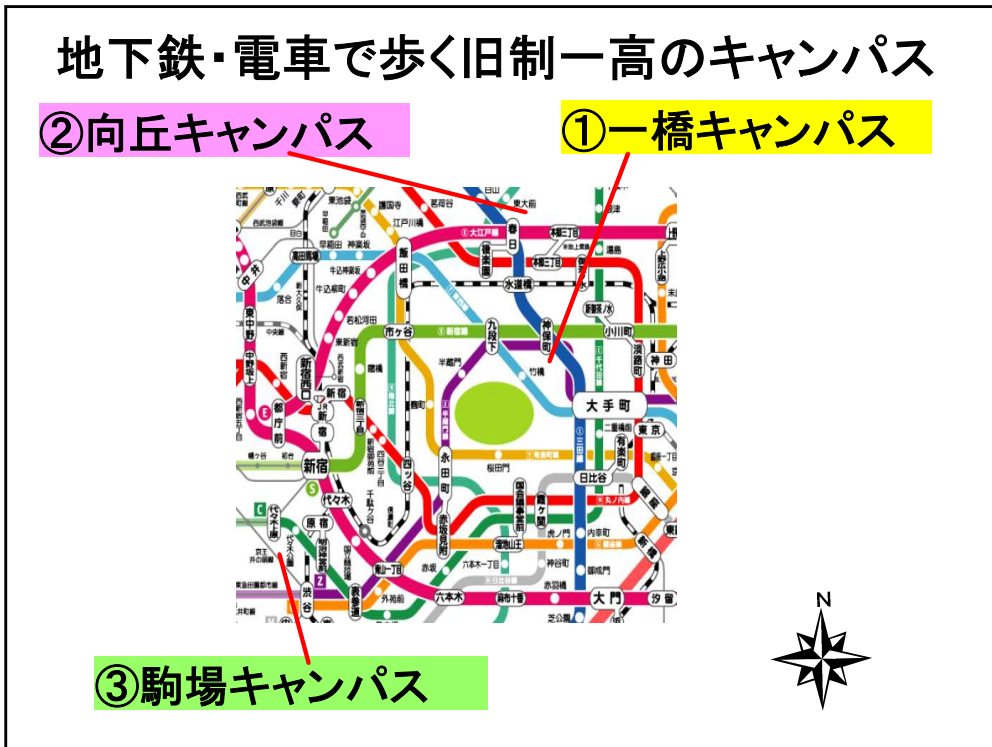
地下鉄の神保町駅が近い。この駅は、都営三田線・都営新宿線・半蔵門線が通る。

②向丘キャンパス

地下鉄丸の内線の本郷三丁目駅、あるいは南北線の東大前駅が近い。

③駒場キャンパス

京王井の頭線の駒場東大前駅からすぐである。



1. 一橋キャンパス時代の一高

<目次>

- 1-1. 一高は洋学系から生まれた 幕末から明治の高等教育機関
- 1-2. 一橋地区の高等教育の歴史
- 1-3. 一橋地区の地図
- 1-4. 開成学校（東京大学）
- 1-5. 東京外国語学校
- 1-6. 東京英語学校
- 1-7. 東京大学予備門
- 1-8. 第一高等中学校
- 1-9. 東京外国語学校（その後）
- 1-10. 東京商業学校（一橋大学）
- 1-11. 学習院

1-1. 一高は洋学系から生まれた 幕末から明治の高等教育機関

第一高等学校の起源は「東京大学予備門」にあり、さかのぼると「東京英語学校」にある。さらにさかのぼると、江戸時代の洋学に起源がある。まずこの流れをおさえておこう。

1-1-1. 江戸時代の3つの系列

東京大学につながる江戸時代の学問は3つの系列がある。①儒学系、②洋学系、③西洋医学系である。

表 江戸時代から明治初年における東京大学の歴史

		江戸時代の幕府機関	幕末の幕府機関	1868年 明治政府に接收	1869年 大学校構想	1871年 大学校廃止	1872年 「学制」 発布	1872年 専門学校構想	1877年 東京大学	1886年 帝国大学
①	儒学系	1797 昌平黌 → 1790 昌平坂学問所	→	→昌平学校	→大学(本校) (国学と漢学)	→閉鎖	—	—	—	—
②	洋学系	1684 幕府天文方 1856 蕃書調所	→ 1862 洋書調所 → 1862 開成所	→開成学校	→大学南校 (西洋の社会・人文諸学)	→南校	→第一大学区第一番中学	→開成学校 →東京開成学校	→法文理工学部 (予備門)	→法科大学 →文科大学 →理科大学
③	西洋医学系	1858 種痘所	→ 1861 西洋医学所 → 1863 医学所	→医学校	→大学東校 (西洋医学)	→東校	→第一大学区医学校	→東京医学校	→医学部	→医科大学

①儒学系

儒学系の始まりは、1797年設立の「昌平黌」（しょうへいこう）である。これは林羅山が上野忍岡におこした私塾に始まる。徳川第5代将軍綱吉によって、幕府の学問所となった。一時勢力を失ったが、1790年寛政異学の禁が出されたのをきっかけに、再び脚光を浴び、昌平坂学問所として、徳川家の旗本・御家人のための学校となった。

②洋学系

1684年に作られた幕府「天文方」に始まり、1856年に蕃書調所が作られた。幕府の洋学研究機関としてはじめは蘭学（オランダ語）の読解を教えていたが、外交上の必要性から英語・フランス語・ドイツ語が始められ、西欧の科学技術を学ぶために化学・器械・物産・数学・西洋印刷術などの研究・教育もするようになった。その後、1862年5月には洋書調所、翌年8月には開成所と名前を変えた。この流れから一高が生まれるのである。

③西洋医学系

1858年に作られた「種痘所」にはじまる。種痘所は、牛痘の接種が目的だったが、のちにオランダ医学の研究・教育機関となり、幕府の直轄となった。1861年西洋医学所と改称された。

「大学校」構想 東京大学の3つのルーツ 大学・大学南校・大学東校

1868年の明治維新では、幕府の3つの施設（昌平坂学問所・開成所・西洋医学所）は明治新政府に接收され、それぞれ昌平学校・開成学校・医学校とされた。

1869年(明治2年)には、政府は「大学校」という総合学園構想をたてた。上の3つをそれぞれ「大学(本校)」、「大学南校」、「大学東校」と改め、それぞれで領域を分担するというものである。つまり、「大学(本校)」は国学と漢学を、「大学南校」が西洋の社会・人文諸学を、「大学東校」が西洋医学を分担した。

大学(本校)に対して、後二者は分局(分校)の扱いであった。南とか東というのは、下の地図に示すように、大学(本校)を中心として、南にあるので「大学南校」、東にあるので「大学東校」と呼んだだけである。

ところが、「大学」(本校)では、国学者と漢学者が激しくケンカしたため、政府は、大学(本校)を閉鎖し、1871年には大学校制度を廃止してしまった。この結果、大学という名前が消えて、「大学南校」はただの「南校」となり、「大学東校」はただの「東校」となった。結局、残ったのは分校のほうで、しかも内容的には洋学系だけとなったのである。つまり、政府は、明治維新の国学復古から、洋学重視へと方針を変えたのである。

専門学校への道

その後、政府の教育方針はコロコロと変わり、学校の名前もコロコロ変わった。1872年(明治4年)に、政府は「学制」を發布した。「学制」とは、日本全国を8つの「大学区」に分けて、学校を作るという政府の方針である。この学区割りで、東京は「第一大学区」に含まれたので、南校は「第一大学区第一番中学」となり、東校は「第一大学区医学校」という長い名前となった。

ところが、翌1873年に、政府は「学制二編」という命令を出して、「学制」とは独立に「専門学校」を作る方針に変えた。このため、南校は、ふたたび「開成学校」に戻り、「東京開成学校」と名前を変えた。一方、東校は、1874年に「東京医学校」という名前に戻った。実は、このあたりから東京大学を作るという構想がたてられていた。

東京大学の成立から帝国大学へ

そして、西南戦争がおこった直後の1877年(明治10年)には、東京開成学校と東京医学校が合併して、「東京大学」が誕生した。これが日本最初の総合大学である。

当時は①法・理・文の3学部、②医学部、③予備門からなるゆるい統合体にすぎなかったが、のちの1885年には三学部と医学部は本郷キャンパスに統合された。予備門だけ一橋キャンパスに取り残されたが、1889年には本郷の北隣の向丘キャンパスに移動して、東大との一体性が保たれた。

そして、1886年(明治19年)には、帝国大学令により、東京大学は「帝国大学」となった。この時に、学部という呼び方をやめて、法科大学・医科大学・工科大学・文科大学・理科大学の5つの「分科大学」という構成になった。

1890年(明治23年)には、駒場の東京農林学校が農科大学として加わり、6つ目の分科大学となった。この農科大学が、一高とキャンパス交換をして本郷に移転するのは、ずっと後の1935年のことである(後述)。

大学・大学南校・大学東校の跡を歩く

東京大学につながった「大学」「大学南校」「大学東校」の3校は、今はどうなっているだろうか。

前述のように、「大学」を中心として、南にあるので「大学南校」、東にあるので「大学東校」と呼ばれた。この3校は1辺が1.5キロメートルほどの三角形をなしている。歩いても回れないことはない。ここでは、地下鉄を利用して、回ってみよう。

①「大学」

「大学」や昌平坂学問所は、今は湯島聖堂として残っている。以前は、現在の東京医科歯科大学のキャンパスまでも含む広大な敷地であった。地下鉄丸の内線のお茶の水駅が近い。

②「大学南校」

「大学南校」とその後の開成学校は、本稿で述べる一高の一橋キャンパスである。地下鉄の神保町駅(都営三田線・都営新宿線・半蔵門線)が近い。

なお、開成学校の起源である「蕃書調所」は、現在の九段下にあった。地下鉄九段下駅の出口付近に蕃書調所跡碑がたっている。上の神保町駅から地下鉄で一駅の距離である。

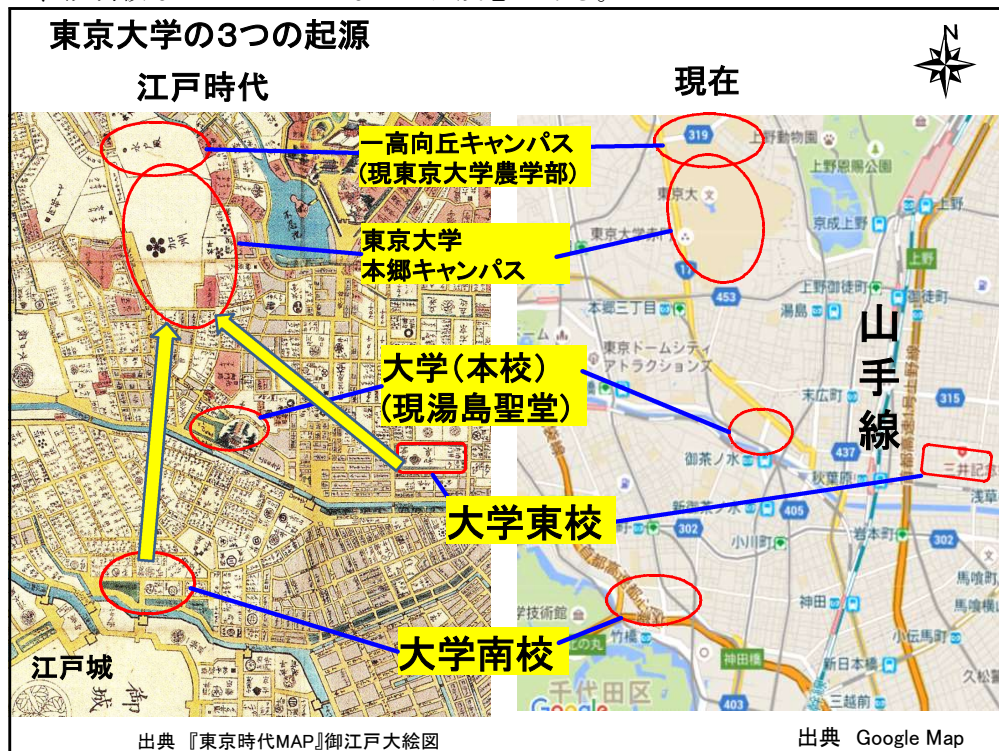
③「大学東校」

種痘所は、現在の岩本町二丁目にあった。地下鉄都営新宿線の岩本町駅から歩いてすぐのところである。1858年にここに種痘所が作られたが、半年ほどで火事で焼けてしまった。今は、この地に「東京大学医学部発祥の地」碑と「江戸最初のお玉ヶ池種痘所跡のあった所」碑がたっている。

その後、伊東玄朴の自宅に臨時の種痘所が作られた。現在は、台東区台東一丁目三十番となっていて、「伊東玄朴居宅跡(種痘所跡)」の説明板が建っている。

種痘所は、この近くに仮小屋が作られ、1859年に新種痘所が再建された。現在は、台東区台東1丁目30番地の南側半分、同28番地の全域に相当する。この場所には説明板などはたっていない。ここがのちの西洋医学所(医学所)となるのである。

さらに、1868年には、医学所の南の藤堂家屋敷に、「病院」が作られた。翌1869年には、医学所が病院に移転し、「医学校兼病院」と称した。これにより、医学所は、付属病院をもつ近代的な医学校の体裁となり、そして「大学東校」→「東校」→「第一大学区医学校」→「東京医学校」と名前を変える。この場所は、現在の神田和泉町の全域である。地下鉄日比谷線秋葉原駅のすぐそばである。今はふつうの住宅街となっているが、その一部は三井記念病院として医学の流れを受け継いでいる。しかし、こうした歴史的な場所なのに、説明板などがたっていないのは残念である。



1-1-2. 開成所から大学南校へ

一高の一橋キャンパスができるもとになったのは「開成所」である。

1862年に「開成所」が一橋に移ってきたのが最初であり、この周辺に、一高の起源となった東京開成学校（のちの東京大学）や東京英語学校（のちの一高）が作られたのである。

開成所の位置を、左側の古地図に示す。右側は現在の地図である。白山通りの西側にある共立女子大学の敷地にあたるのがわかる。場所については後に詳しく述べる。地図には「地誌調所」とあるが、これは昌平坂学問所の三史局のうちのひとつで、全国的地誌を編纂するために資料収集をしていた。

開成所は、のちに、「開成学校」（1868年）→「大学南校」（1869年）→「南校」（1871年）→「第一大学区第一番中学」（1872年）→開成学校（1873年）→東京大学（1877年）とコロコロ名前を変えていく。

開成所(後の大学南校)の位置



幕末1862年頃



出典:「東京時代MAP」光村推古書院

現在



出典:Yahoo地図

1-1-3. 南校の集合写真 1872年(明治5年)頃

南校をバックに撮られた印象的な写真が残っている。

南校の校舎の前で、学生・教職員全員が並んでいる集合写真である。撮影時期は、1872年(明治5年)の初夏と考えられている。

東京大学附属図書館の資料によると、写真には、405名の日本人、18名の外国人教師がうつっている。当時の学生名簿には447名の名前があるので、だいたい全校生が写っていると考えられる。

手前にいるのは少年と呼ぶべき学生であり、後ろにいくにしたがって学生の年齢が高くなる。

少し前までは、「貢進生」といって、各藩からその石高に応じて1～3人の秀才を学生として差し出させる制度があった。学生は、藩から月10両の学費と年50両の書籍代を支給され、寄宿舎に入って学ぶことが義務づけられた。試験に落ちると国に帰されるので必死で勉強させざるを得なかった。彼らは藩の名前を背負ったエリートたちであった。この写真には、学生だった小村寿太郎、鳩山和夫、穂積陳重、古市公威、伊沢修二、杉浦重剛といった人たちもいる。

のちに廃藩置県によって藩がなくなったため、貢進生の制度はなくなったが、学生たちが武家の出身であることにはかわりがなかった。この写真でも、全員がハカマをはいている。しかも、毎日刀を持って通学し、玄関で刀を預けて教室に入ったという。

この写真に写る400名を越える学生の顔は、ひとりひとりが日本の将来を背負う覚悟で必死の表情をして印象的である。下記のサイトにおいて、この写真を拡大して見ることをおすすめしたい。

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2005/tenji/index-a.html>

教頭フルベッキもうつっている

最後列には日本人助教や職員、外国人教師が並んでいる。中央アーケードの右から4人目が教頭フルベッキである。フルベッキ(Guido Verbeck、1830～1898年)はオランダ出身のアメリカの宣教師で、宣教のために来日し、1864年に長崎の洋学所(後述のように、長崎英語伝習所、長崎外国語学校の前身)の英語講師となった。佐賀藩の英学塾「致遠館」の校長もつとめた。ここでフルベッキの教えを受けた大隈重信は、のちに東京専門学校(早稲田大学の前身)を作る時に、致遠館をモデルとした。それだけフルベッキの影響力は大きなものがあった。

フルベッキは、維新後に開成学校に呼ばれ、大学南校では教頭としてこの学校の教育体制を固めた。日本で発音されやすいよう「フルベッキ」とみずから称した。一時帰国したが、再来日し、そのまま日本で暮らし、東京で人生を終えた。

出典:東京大学附属図書館 特別展示会「東大黎明期の学生たち—民約論と進化論のはざままで」

南校の集合写真 1872年(明治5年)頃

教頭
フルベッキ



写真の方向

出典 東京大学総合図書館

1-2. 一橋地区の高等教育の歴史

1-2-1. 一橋は高等教育の発祥の地

東京英語学校は突然生まれたものではなく、開成学校（後の東京大学）や東京外国語学校の交互作用から生まれた。その過程はきわめて複雑である。一高の成立をたどるためには、こうした交互作用をひとつひとつ解きほぐしていく必要がある。

下の図は、その流れを示したものである。上から、東京大学、一高、東京外国語学校、一橋大学の起源を示している。それぞれの過程はあとでゆっくり説明するので、ここでは概略を示しておく。

東京大学

前述のように、著書調所（1856年）がもとになり、1862年に、この地に「開成所」が作られた。前述のように、これが開成学校→大学南校→南校→第一大学区第一番中学→開成学校となる。そして、1873年に、開成学校は、「東京開成学校」と「東京外国語学校」に分れた。前者がのちに東京大学となるのである。

東京外国語学校

当時の開成学校は、外国人教師により外国語で行われたので、学生は外国語の習得が不可欠であった。このために、開成学校から分かれて、1873年に東京外国語学校が作られた。中でも英語が重要だったので、1874年に英語科が独立して東京英語学校ができた。

英語科が独立した後の東京外国語学校は、その後、波乱の歴史をたどる。1887年にはこの中のフランス語科とドイツ語科が東京大学予備門に引き抜かれる。そして残った学科（ロシア語科、漢語科、朝鮮語科）は、高等商業学校に吸収されてしまう。こうして東京外国語学校は1887年に廃止となる。10年のブランクをはさんで、1897年に高等商業学校から、ふたたび「附属外国語学校」が独立し、2年後に東京外国語学校が復活するのである。これが、現在の東京外国語大学へとつながるのである。

一高

1874年に、東京外国語学校から独立して東京英語学校ができた。この東京英語学校こそ、一高のルーツである。東京英語学校は、文部省が管轄する独立した学校であったが、3年後の1877年には、東京大学に吸収され「東京大学予備門」となる。

東京大学は、のちに本郷キャンパスに移り、1886年には帝国大学と名前を変えた。この時に大学予備門が再び独立して「第一高等中学校」となる。第一高等中学校は、1889年に向丘キャンパスへ移動し、1894年に「第一高等学校」となるのである。

一橋大学

一橋大学も一高の親戚筋に当たる。図の一番下の行に示すように、一橋大学のルーツは、1884年に猿樂町に作られた東京商業学校にある。1884年頃から一橋地区に移ってくる。1887年には高等商業学校となり、この時、東京外国語学校を吸収してしまう。もともとは、外国語学校の一部として商業学校ができたのだが、力関係は逆転して、母屋を乗っ取ってしまう形になった。この学校が第2次大戦後に、一橋大学と改称した。

このように東京外国語学校こそは一高、東京外国語大学、一橋大という3つの学校のルーツとなった。当時の明治政府がいかに外国語を重視していたかがわかる。

一橋は日本の高等教育の発祥の地

この図で黄色を塗ったのは、一橋の地にあった学校である。

順を追うと、まず、1862年に「開成所」が一橋に移ってきたのが最初である。この地で、開成学校→大学南校→南校→第一大学区第一番中学となり、そして、1873年に、その向かいの敷地に東京開成学校が新築された。これが東京大学の敷地となる。

大学南校の跡地に、1873年に東京外国語学校が作られた。

そして、1874年に、東京開成学校の北に東京英語学校が作られた。それが東京大学予備門となり、東京大学の敷地に引っ越してくる。東京大学は1884～85年に本郷キャンパスに移った。

キャンパスには東京大学予備門が残り、それが第一高等中学校となる。第一高等中学校1890年には向丘キャンパスに移り、そこで第一高等学校となる。

したがって、1874～1884年の10年間は、この地に、東京大学（東京開成学校）、東京外国語学校、一高（東京英語学校、東京大学予備門）の3つの主要な学校が並んでいた。つまり、この一橋の地は、日本の高等教育の発祥の地であった。

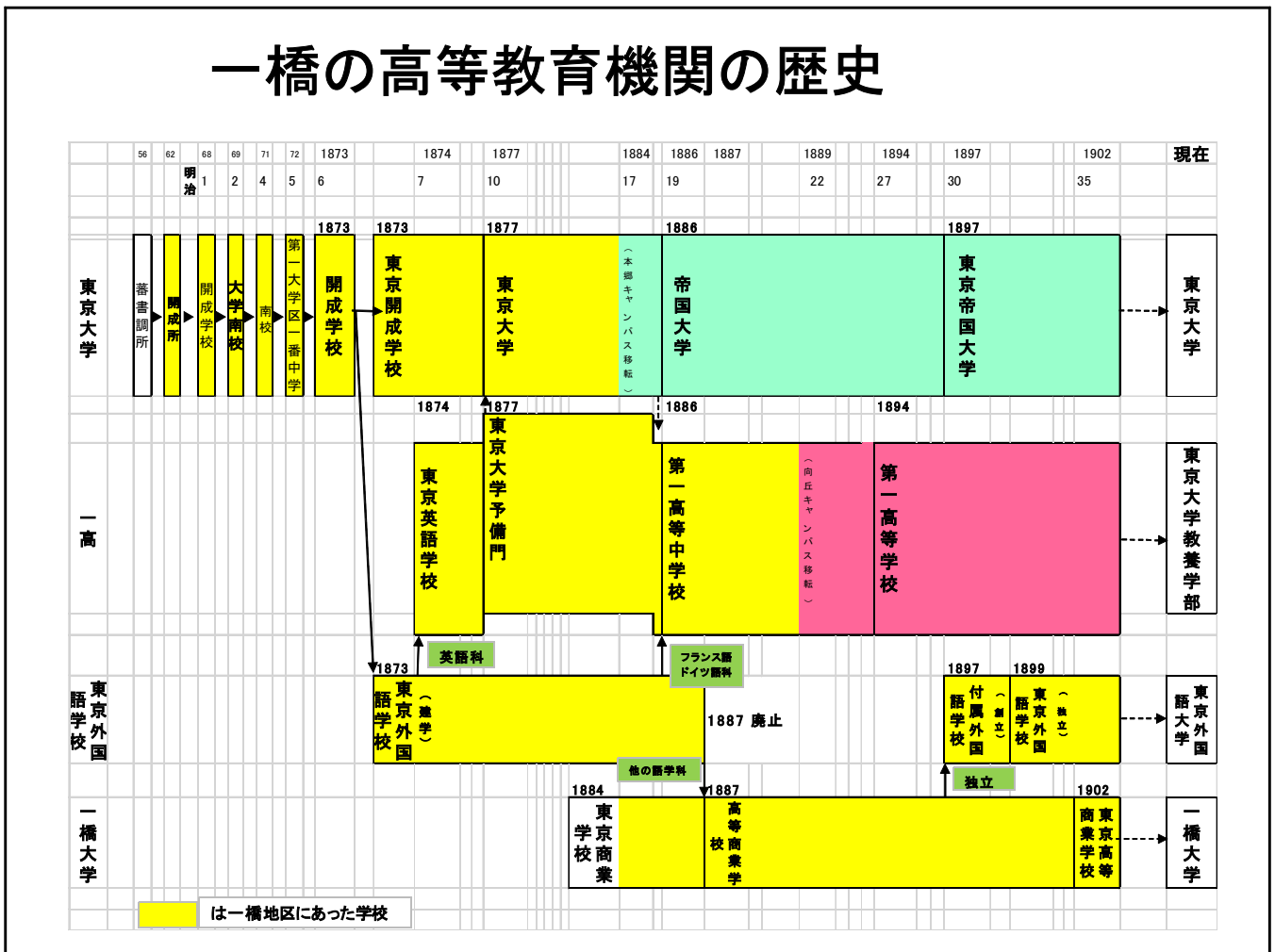
「一橋」の称号は東大から一高をへて一橋大学へ

「一橋」といえば、1985年までは東京大学のことをさしていたが、それが移転した1885年以降は、東京大学予備門・第一高等中学校のことをさすようになった。

しかし、その第一高等中学校も1889年に移転したため、それ以後は、「一橋」の称号は、高等商業高等学

校を指すようになった。この学校が後に一橋大学となるのである。国立市にキャンパスのある一橋大学が、なぜ一橋をなのっているのはこうした経緯からである。

一橋の高等教育機関の歴史



1-2-2. 一高は東大の甥、一橋大学の親戚：大学の家系図をたどる

このようにみえてくると、一高（のちの東大教養学部）は、東京大学や東京外国語大学、一橋大学と親戚関係にあることがわかる。

下の家系図に示すように、開成学校を父に喩えると、東京開成学校（東京大学）と東京外国語学校はその子どもたちである。東京開成学校（東京大学）は兄、東京外国語学校は弟である。

東京外国語学校を父として、東京英語学校が生まれた。したがって、東京英語学校と東京開成学校（東京大学）は、叔父と甥の関係である。つまり、一高にとって東京大学は叔父さん（父の兄）にあたる。

また、東京外国語学校は、のちに商業学校の養子に入った（のちに不幸にして早死にしてしまう）。つまり東京外国語学校と商業学校は義理の兄弟である。だから、東京外国語大学と一橋大学は義理の兄弟と言ってもよい。

さらに、東京大学にとっては、一橋大学（商業学校）は弟の養家先であるから、親戚筋と言ってもよい。

同じことは一高にとっても言える。一高にとって、一橋大学（商業学校）は、父の養家先であるから、一高と一橋大学も親戚と言ってもよい。

今では、東京大学や一高が一橋の地にあったことを知る人は少ないし、まして、東京大学や一高が一橋大学と親戚であることを知る人もほとんどいない。

さて、次に、以上の流れを地図で見よう。

1-3. 一橋地区の地図

1-3-1. 1876年(明治9年) 開成学校・東京英語学校・東京英語学校

下は1876年(明治9年)のこの地区の地図である。

南側には、でこぼこした形のお堀が掘られ、「一ツ橋」という橋がかかっている。皇居のすぐ近くであり、当時の明治政府の重要な施設が並んでいる地域である。堀の南側には陸軍病馬厩と女学校がある。

真ん中に「開成学校」があり、その北側に「東京英語学校」、西側に「東京外国語学校」がある。この3つの学校が本論の主人公である。キャンパスの位置と形を記憶にとどめていただきたい。

東京英語学校は、東西に細長い敷地である。

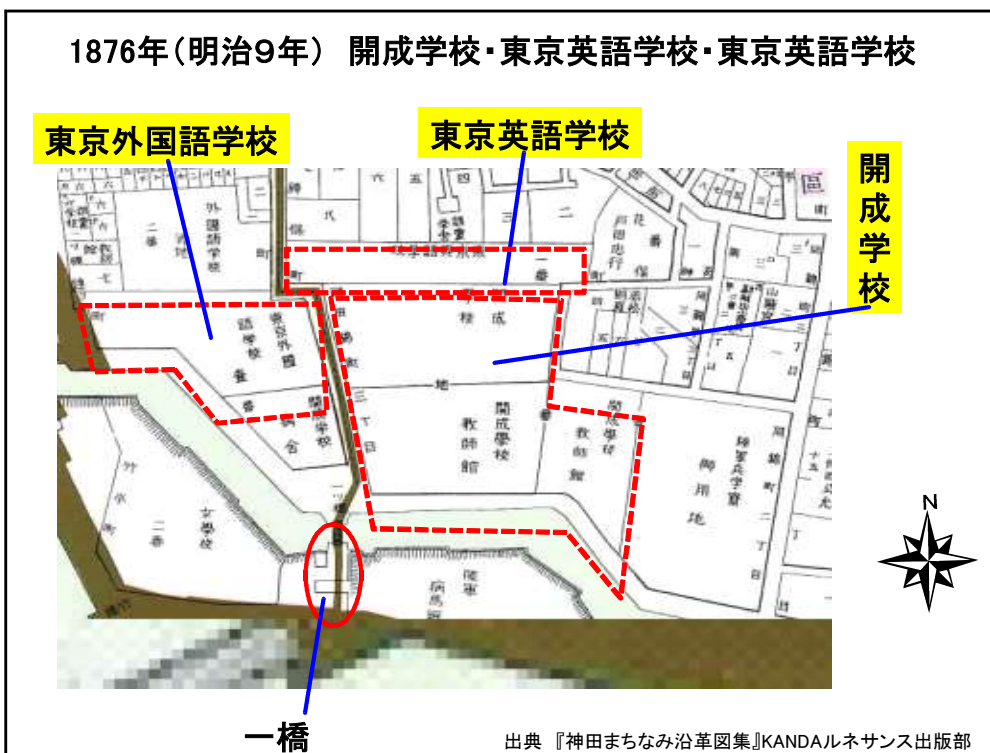
開成学校はかなり広い敷地である。なお、正式には、1876年当時は「東京開成学校」となっているはずである。敷地の南側と東側に「開成学校教師館」がある。これは外国人のための建物のようである。のちに外国人が出て行って、学生の寄宿舎になる。

その東側には「開成学校病舎」という敷地がある。これは開成学校の保健室のようなものらしいが、詳しくはわからない。

開成学校教師館の東には、「陸軍兵学寮御用地」と書かれた敷地があるが、ここはのちに学習院となる。

開成学校の西側は「東京外国語学校」がある。変則的な形のキャンパスである。この場所は、前述の「開成所」があったところである。

その北側には、「東京外国語学校 添地」と書いてある。これは運動場であり、のちに「体操伝習所」となる(後述)。



1-3-2. 1876年と現代の比較 開成学校・東京英語学校・東京英語学校

当時の場所は、今はどのようになっているだろうか。下の地図は、1876年と現在を比べたものである。

今の一橋地区は、大手の出版社などが並ぶ高層ビル街となっている。一橋の地に一高や東大があったのは130年近く前のことなので、今ではその跡は残っていない。とてもここが学校街だったとは思えない。しかし、区割りはほとんど変わっていないことがわかる。今の白山通りに沿って、これらの学校が並んでいたのである。

「一ツ橋」という橋は今も残っている。下の堀は日本橋川である。その上を高速道路が走っているので、川は暗くて、不潔な印象がある。

「東京英語学校」は当時の住所では「表神保町10番地」であった。この場所は、今は神田神保町1丁目と呼ばれ、東京パークタワーと三井ビルという高層ビルがたっている。

「開成学校」だった広い敷地(神田錦町3丁目)は、今も同じく神田錦町3丁目である。広がった敷地は、今は分割されてビル街になっているが、北西の敷地には学生会館がたっている。

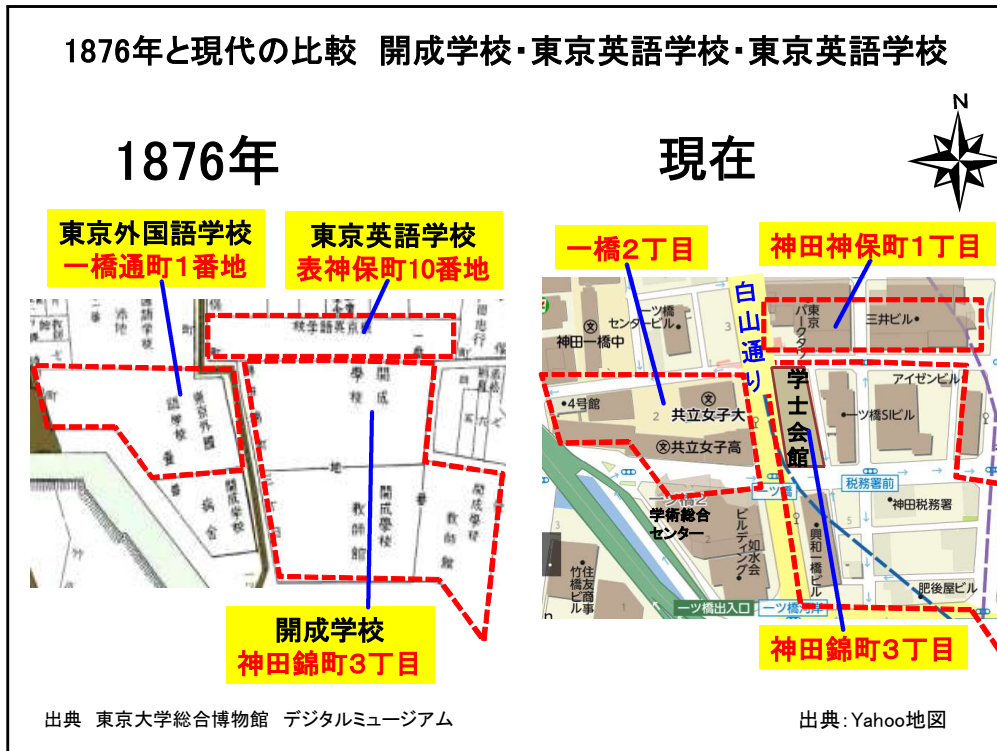
「東京外国語学校」だったところ(一橋通町1番地)は、今は一橋2丁目という住所となり、共立女子大

学になっている。

「東京外国語学校 添地」だったところは、今は一橋センタービルと神田一橋中学校になっている。

「開成学校病舎」だったところには、如水会館と学術総合センターがたっている。

以下では、各跡地をゆっくり歩いてみることにしよう。



1-3-3. 江戸時代(1856年、安政3年)の一橋

この地区は、江戸時代はどのようになっていたのだろうか。この地図は、江戸時代の 1856 年 (安政 3 年) のものである。この地域は、江戸城に接しており、徳川幕府の重鎮の屋敷が並んでいた。

出典：神田錦町に立つ「千代田区町名由来板」

白山通りは川だった

一橋の由来は、「一橋」という橋からきている。地図の南側には、お堀がでこぼこした形で流れており、「一橋」という橋がかかっている。このお堀は「日本橋川」という。

現在の白山通りは、昔は川であり、日本橋川と合流して「ひとつ」になっていた。そこでこの橋が「ひとつばし」と呼ばれるようになったという。この橋に、江戸城の「一橋御門」という門が作られた。

幕末の「一橋派」の中心

一橋御門から江戸城に入ると、すぐ南に、「一橋 刑部卿 慶喜 [徳川]」と書いてある。一橋慶喜すなわち徳川慶喜の屋敷である。一橋家は徳川家御三卿のひとつで、地図には、徳川家の家紋である「葵」(あおい)のマークが描かれている。一橋家は、幕末の政治の中心であった。将軍の跡継ぎをめぐって、一橋慶喜を推す徳川斉昭らの「一橋派」と、徳川慶福を推す井伊直弼らの「南紀派」が争った。これは斉昭の尊皇攘夷派と、井伊の開国派の対立でもあったが、井伊直弼は「安政の大獄」で一橋派を粛清した。その報復で直弼が桜田門外の変で殺されると、一橋派は復活する。一橋慶喜は将軍となるが、政権を新政府に譲って徳川幕府は終わりをつげた。

一橋の西側には「おつきや御春屋」と書かれている。「御春屋」(おつきや)とは、江戸城内で使われる食材や燃料などを集荷管理するところで、精米したり餅をついたりしていた。この場所に、1877 (明治 10 年)には「文部省」が移ってきて、1931 年 (昭和 6 年)までここにあった。

護持院原の空き地

この地図で薄紫になっているエリアは「空き地」である。火事の類焼を防ぐための「火除け地」と呼ばれる。この場所に、第 5 代将軍の徳川綱吉が密教の大寺院「護持院」を作った。これは 1717 年に火事で焼けてしまい、その跡地を空き地とした。これらの空き地は「護持院ケ原」と呼ばれ、将軍の猟場となっていた。一番から四番まであり、この地図では右から「二番明地」、「三番明地」、「四番明地」という文字が見える。二番明地に護持院の伽藍があり、この地図にも「護持院上地」と書いてある。

「護持院ヶ原」は一般にも開放されていたが、寂しく危険な場所だったようで、森鷗外の『護持院原の敵討』はここがラストの舞台だし、映画『切腹』（監督小林正樹）にも、仲代達矢が丹波哲郎と斬り合う（鬘を切り取る）有名なシーンの舞台となっている。

空き地に作られた学校

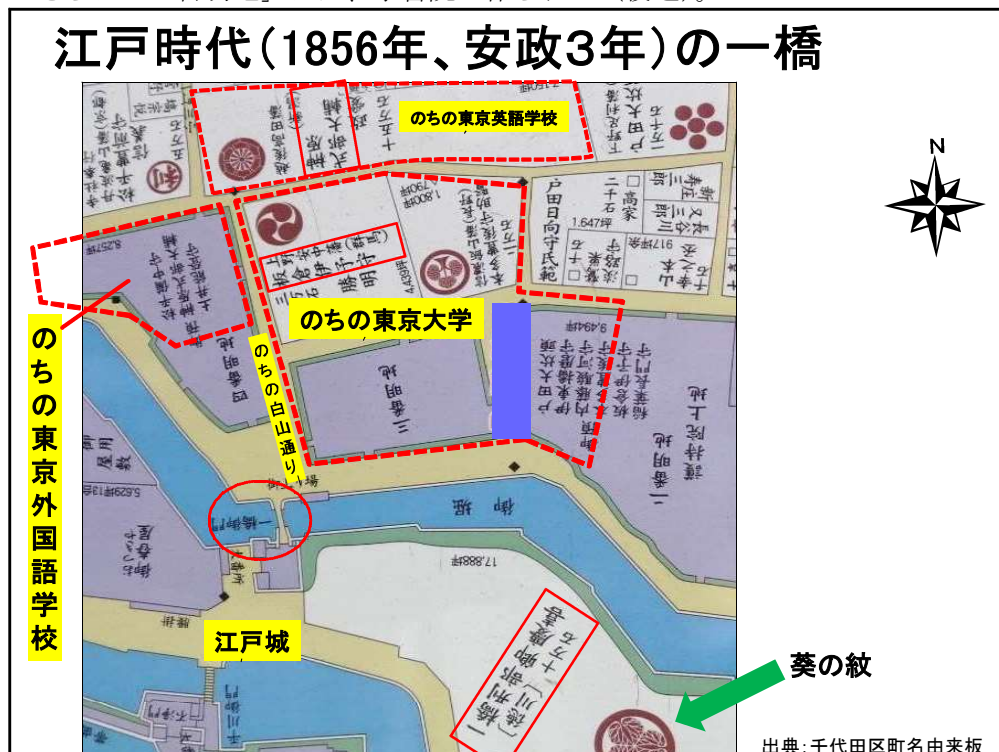
明治時代になって、大学や学校を建てる時に、この空地はとても便利だったろう。

「四番明地」には「開成所」が作られた。それが大学南校となり、さらに東京外国語学校の敷地となり、商業学校（のちの一橋大学）の敷地ともなるのである。

「三番明地」と「二番明地」の一部は、開成学校の敷地になった。開成学校は、それに加えて、地図で示された「上野安中藩（群馬）板倉伊予守」と「信濃飯山藩 本多豊後守」の屋敷も使っている。明治になって、藩邸は明治政府に接收され、学校の敷地として使われたのである。なお、この板倉家の屋敷は、同志社大学の創始者である新島襄が生まれたところでもある（後述）。

その北側に、越後高田藩（今の新潟県）の榊原式部大輔の屋敷がある。ここが東京英語学校として使われることになる。

さらに「二番明地」には、学習院が作られた（後述）。



1-3-4. 1883年の地図 東京大学と東京外国語学校

下は1883年（明治16年）の地図である。この地図は、各学校の敷地内の建物まででいねいに示してあるので、とても情報価値が高く、以下ではひんぱんに引用する。

前の1876年から7年しかたっていないが、よくみると、明治初期の社会は大きく変化していることがわかる。

まず、東京英語学校はなくなって、空地になっている。これは後述のように、「火除け地」とされたためである。

開成学校の広い敷地は、そのまま「東京大学」となった。

東京外国語学校はそのままである。北側の「東京外国語学校添地」だったところは、「体操練習場」と書かれており、「体操伝習所」の敷地である。

東京外国語学校の南にあった「開成学校病舎」は、「大学博物館」に変わっている。これは東京大学理学部博物館である。

東京大学の東には「学習院」がある。1877年（明治10年）に作られたのである。

南側の一橋慶喜邸は「陸軍軍馬病院」となっている（ちなみに、ここは今は、丸紅ビルと東京都大手町合同庁舎のビルになっている）。

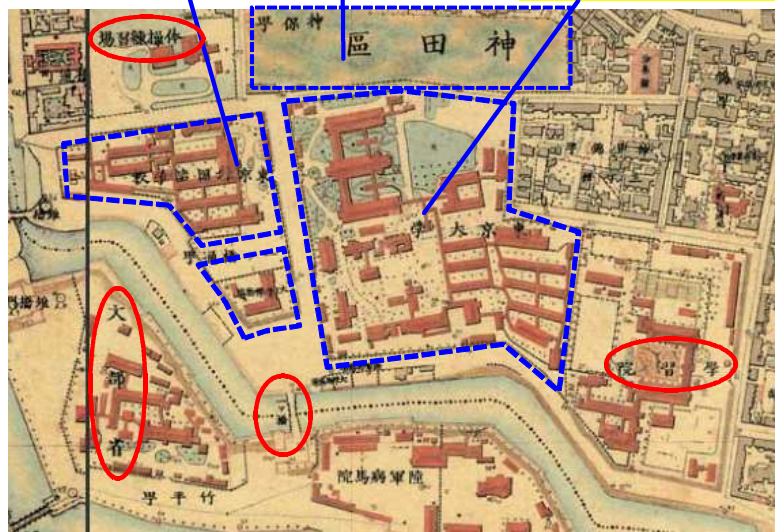
一橋の南の女学校だったところは、「大部省」と書かれている。これは「文部省」のここのようだ（ちなみに、ここは現在、毎日新聞社パレスサイドビルとなっている）。

1883年(明治16年) 開成学校・東京英語学校・東京英語学校

東京外国語学校

(東京英語学校跡)

東京大学(旧開成学校)



出典 東京大学総合博物館 デジタルミュージアム

以下では、ひとつひとつの学校について見ていこう。

①開成学校（東京大学）、②東京外国語学校、③東京英語学校、④東京大学予備門、⑤第一高等中学校の順で述べる。

なお、⑥東京外国語学校（その後）、⑦東京商業学校（一橋大学）、⑧学習院（現学習院大学）についてもふれる。

1-4. 開成学校(東京大学)

1873年（明治6年）に開成学校が作られ、すぐ東京開成学校となり、1877年に東京大学と改称された。東京大学は1884年～5年には本郷キャンパスに移ったので、開成学校と合わせても、12年しかこの地にはいなかったことになる。

1-4-1. 1873年(明治6年) 開成学校の引っ越し

開成学校は1873年（明治6年）の8月に引っ越しをした。

それまでの開成学校の校舎は、現在の白山通りの西側（現在の国立女子大学）にあった。前述のように、1862年に幕府の「開成所」としてこの地に移り、11年がたっていた。その名前は開成学校→大学南校→南校→第一大学区第一番中学とめまぐるしく変わり、1873年（明治6年）4月には開成学校に戻った。

そして、新しい洋風の学校を作る計画がおこり、1873年（明治6年）8月に落成した。場所は、現在の白山通りをはさんだ東側（現在の学士会館）であった。そこで、開成学校は向かい側の新校舎に引っ越したのである。11月には、開業式がおこなわれた（後述）。翌1874年（明治7年）5月に「東京開成学校」と改称された。

それまでの旧校舎は、東京外国語学校が使うことになった。

当時、学制が固まるまで、学校の引っ越しは日常茶飯事であったようだ。本論は「キャンパスの引っ越し」にこだわるのだが、それは、一高の歴史は「キャンパス移動の歴史」といってもよいほどだからである。キャンパス移動が校風にどんな影響を与えるかということが、本論のテーマのひとつとなる。本論は、いろいろな学校のいろいろなキャンパス移動のバリエーションを明らかにするケーススタディ集ともなるだろう。

1873年(明治6年) 開成学校の引っ越し



出典 東京大学総合博物館 デジタルミュージアム

1-4-2. 開成学校(東京開成学校・東京大学)のキャンパス

当時の開成学校のキャンパスはどのようになっていたのだろうか。

右側は、1878年（明治11年）の東京大学のキャンパス地図である。ただし、これは完成直後のものではなく、完成から5年たった状況であることに注意いただきたい。

左側は、前述の1883年（明治16年）の地図である。こちらは完成から10年たった状況である。

東は東京外国語学校に接し、北は東京英語学校、東は学習院と接している。

キャンパスは、大きく4つのエリアに分かれている。①北西の正門前の本館、②北東の運動場、③南東の寄宿舍、④南西の図書館・研究室群である。

①北西の正門前の本館

正門はキャンパスの北西側にあった。

正門の前にあるのが本館である。設計したのは、大蔵省土木寮技手の林忠恕（はやしただよし）である。上から見ると、アルファベットのEの字の形に建物が配されている。1873～74年に開成学校の教師だったクラークによると、本館の「主翼」を英語部が占め、「右翼」をドイツ部、「左翼」をフランス部が占めたという。当時は語学の国別の教員編成だったようである。「左翼」「主翼」「右翼」という呼び方は、のちにはそれぞれ「北棟」「中棟」「南棟」と変わった。

Eの字の真ん中の横棒の東側には、「物理講義室」と書かれた八角形の建物がある（この建物の外観は、後述の1888年の写真にはっきり写っている。）

また、クラークによると、本館の2階は学生の寄宿舎として使われていたという。

本館のE字の東側をふさぐように、「旧食堂」と「旧炊事場」があるが、旧食堂の2階も寄宿舎として使われていた。しかし、寄宿舎や炊事場は火を使い火事の危険があったので、のちには教室と寄宿舎を分ける方針がとられた（後述）。そこで、「旧食堂」と「旧炊事場」は壊されて、1880年には、東側に書いてある「新食堂」へと移った。たしかに、左の1883年の地図には「旧食堂」は出ていない。

正門の前は、庭園になっていて、正面には「小松植込」と書かれている。少し南側に「校旗」と書かれた校旗掲揚塔がある。

北西の隅には、門衛、人力車供待、土蔵、馬立場がある。

②北東の運動場

本館の東側は広い運動場である。左側の地図の着色から、芝生がはえていることがわかる。運動場の東側に倉庫があり、南側には寄宿舎がある。

「運動場」を学校が持ったのは東京大学がはじめてである。この運動場で、アメリカ人教師のホーレス・ウィルソンが学生に野球を教えて、「日本野球発祥の地」となったのである（後述）。

③南東の寄宿舎

キャンパスの南東部には多くの寄宿舎が並んでいる。1号～3号、4号とあり、急に9号～11号に飛ぶ。5号～8号の名前は書かれていない。

寄宿舎があった場所には、もともと外国人教師の宿舎が並んでいた。前述の1876年（明治9年）の地図をもう一度見てみよう。キャンパスの南側は、「開成学校教師館」とあり、これが外国人教師の住宅だった。明治初めには、外国人教師は優遇されていた。ところが、明治も10年を過ぎると、外国人教師は少なくなり、また、1877年に予備門が移ってくると、学生寮が必要となったので、外国人教師宅をつぶして寄宿舎がたてられた（後述）。

開成学校・予備門の時代から寄宿舎は本格的であったことがわかる。こうした学生寮の思想は、一高に受け継がれた。

また、主な建物は渡り廊下で結ばれており、学生は雨の日も濡れずに動けた。こうした配慮も、のちの一高のキャンパスにずっと受け継がれた。

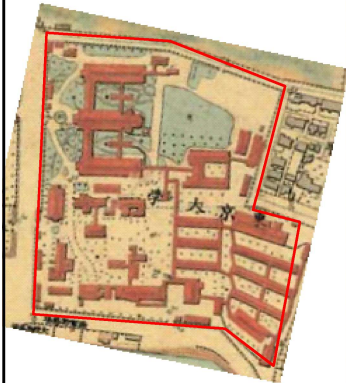
④南西の図書館・研究室群

キャンパスの南西部は、講義室と図書館（書庫と閲覧室）がある。その周りに、理系の実験室（定量分析室、元製薬室、採鋇冶金、応用化学実験室）などがバラバラと建っている。『東京大学百年史』によると、薬品精錬所は、化学の薬品を作るための施設であり、1875年に作られたが、1878年に閉鎖された。

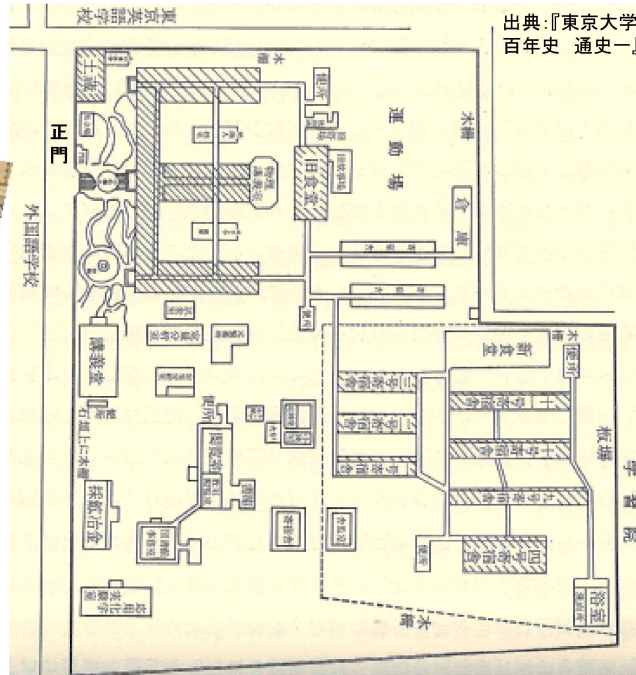
開成学校(東京大学)の配置図

1878年(明治11年)

1883年(明治16年)



出典 東京大学総合博物館
デジタルミュージアム



出典:『東京大学
百年史 通史一』

1-4-3. 開成学校の鳥瞰図

当時の学校の鳥瞰図が残っており、イメージがはっきりする。この絵は、地図に示すように、キャンパスを南西側から見たものである。

左側に正門がある。敷地の周囲には、堀が作られているのが見える。キャンパスの周りは木柵で囲まれている。

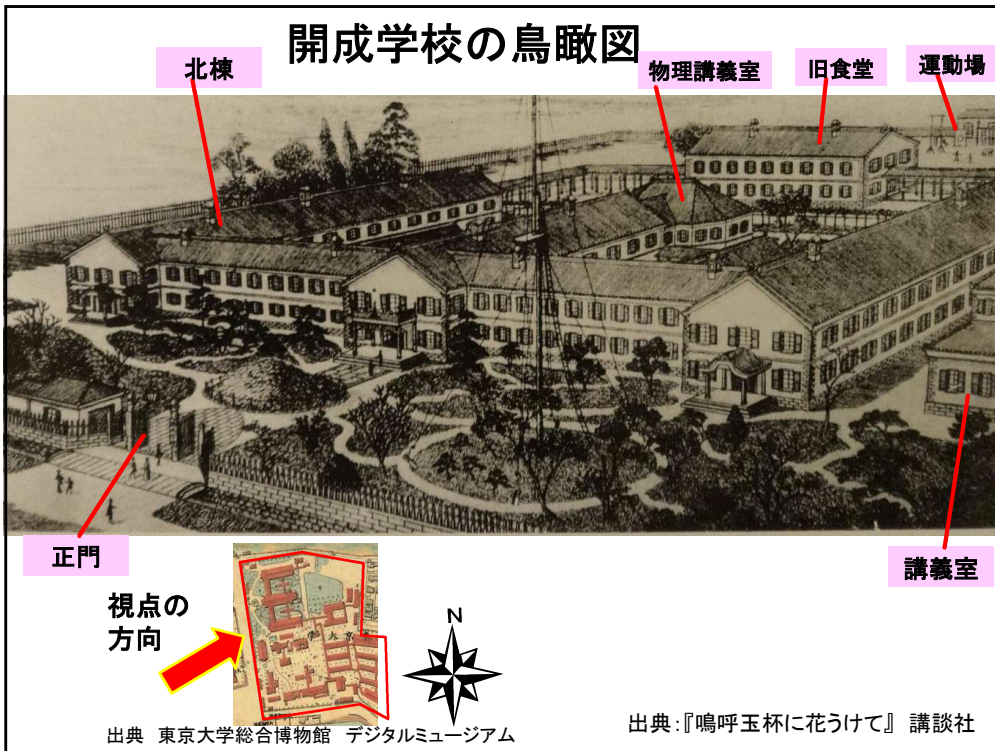
正門の左に門衛所が見える。正門を入ると、低い築山(前述の小松植込)がある。正門前は洋風庭園が広がっており、かなり高い校旗の掲揚塔が立っている。絵の上を切ってしまったが、ここには「開」のマークの校旗がはためいている。

その前にあるのが本館である。上から見てアルファベットのEの形になっている。Eの字の右側には、八角形の物理講義室と、あとで壊された「旧食堂」が描かれている。

右下には、「講義室」の一部が見えている。

建物は木造2階建て、かわら屋根である。建物の屋根には、あちこちに煙突がたっているが、これはストーブの煙突らしい。

右上には、運動場があり、ラグビーのゴールポストや弓道の的のようなものがあり、運動する学生の姿も描かれている。



1-4-4. 開成学校の開業式

右上の絵は、開成学校の開業式の様子である。

天皇を迎えて盛大な式をおこなったのである。人々は黒の燕尾服を着てシルクハットをかぶっている。式には三条実美、後藤象二郎、伊藤博文などの政府高官が参加した。政府が開成学校にかけた期待がわかる。馬車は明治天皇の馬車であろう。また、この日は学校を一般公開したので、文明開化と新しい高等教育と科学の姿を示すものとして、人々の話題となり、錦絵にも描かれたのである。

カラフルな綿絵であり、作者は歌川国輝（二代目）である。この絵は版元から売り出されて人気があった。カラーなので、建物の色がわかるのは貴重である。壁は白、屋根は黒、窓枠には緑色と赤色が塗られていた。また正面の建物のポーチは青色に塗られている。明治6年当時としては、カラフルで文明開化の象徴だったのである。

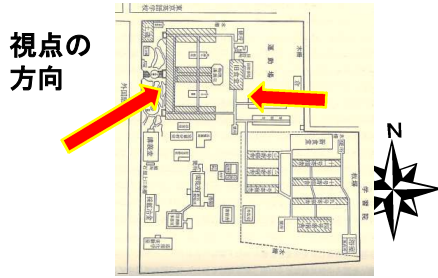
開成学校の裏側

下の写真は、開成学校を裏側からみたものである。まだ「旧食堂」があった時である。物理講義室の変わった形の屋根の一部が見えている。

開成学校の開業式



出典『東京大学本郷キャンパスの百年』



開成学校の裏側



出典: 第一高等学校六十年史

1-4-5. 開成学校の正門

この絵は、1873年頃の開成学校の正門である。この絵は、アメリカ人教師エドワード・クラークがとった写真にもとづいている（『日本滞在記』飯田宏訳、講談社、1967年）。クラークは、1873年から1年間、開成学校で理化学教師をつとめた。

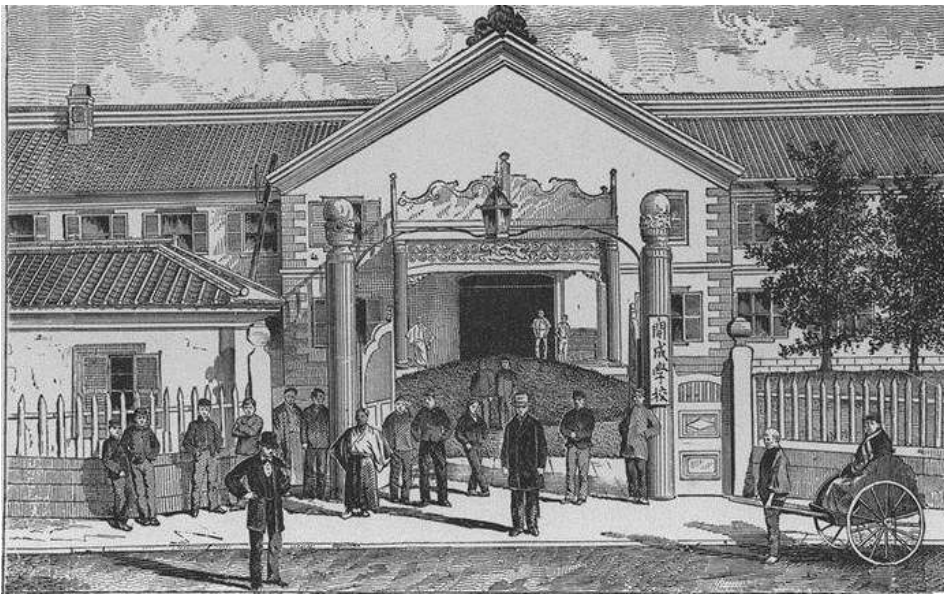
この絵をみると、正門の両脇には2本の高い柱が立っている。柱の上の方がこけしの頭のような形をしているのが印象的である。右側の柱には大きく「開成学校」という名前が書いてある。2本の柱の間は金属のアーチがかかっていて、真中にガス灯がかかっている。ガス灯のまわりに浮き彫りの模様がついている。

正門の左側に守衛所の建物が見えている。柱の両側は洋風のフェンスである。

門のまわりに人がいる。クラークによると、真ん中の外国人はアメリカ人の物理学教師ピーター・ヴィーデル（Peter Veeder）である。それを10名くらいの学生が囲んでいる。制服を着たものもいれば、和服を着ているものもいる。人力車も描かれている。

正門の前に低い築山が見える。正面は大きな三角屋根のファサードで、屋根の上にある瓦は和風である。

開成学校の正門 クラーク『日本滞在記』より



出典:国際日本文化研究センター

1-4-6. 外国人教師の屋敷

左上の絵は、クラークの東京での屋敷である（『日本滞在記』）。かなり立派な邸宅である。入口には、2名の女中がたっている。クラークはいつも人力車を利用したという。

クラークの屋敷は、開成学校に近い場所にあったが、多くの外国人は学校の敷地内に同じような立派な屋敷をもらって住んでいたという。前述の1876年（明治9年）の地図では、キャンパスの南側は、「開成学校教師館」とあるが、これが外国人教師の住宅エリアだったと考えられる。

外国人襲撃事件

外国人教師が外出する時は大学の護衛がつくなど、いろいろな制約があった。

明治初期の日本人は外国人に対して複雑な感情を持っていた。ついこの間までは、「攘夷」運動が強く、外国人への憎しみが明治維新の原動力にもなった。ところが攘夷の中心だった薩長新政府は、手のひらを返したように、洋学路線をとり、お雇い外国人を高給で雇うようになった。その金額は当時の政府の大臣クラスの額だった（『東京大学百年史通史一』）。

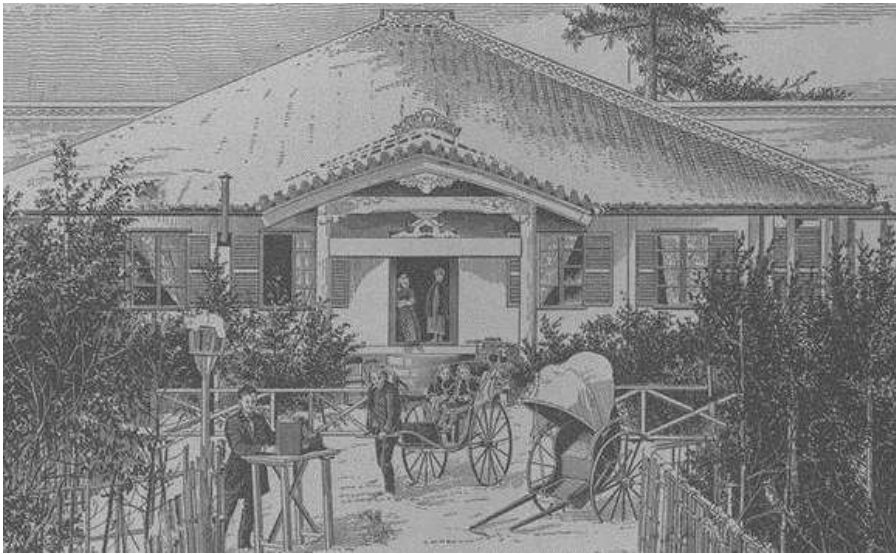
しかし、一般市民の意識はそう簡単には変わるわけではなく、神戸事件や堺事件など、外国人がテロに会うことも多かった。

大学南校においても、1871年に、イギリス人教師リングとダラスが、薩摩藩などの浪士に襲われて大ケガをするという事件がおこった。調書によると、彼らは日本人女性を妾として自宅に住まわせており、襲撃者は、日本の女性に手を出す外国人を見て、怒りを覚えて攻撃したという。3人の藩士がつかまり、うち2名は死刑となった。一方のリングとダラスも、教頭フルベッキによって大学南校を解雇されたという。

外国人教師のレベルは玉石混交だった。前述のフルベッキのように政府から信頼される教師もいたが、一方では、高給目当ての不適格者も混じっていた。本国から適任者を招くべきだったが、それだと時間と金がかかるため、政府は、手っ取り早く、横浜の居留地などにいた外国人を教師として雇うことも多く、なかには教師としての学識に劣るものも混じっていたのである。

出典：ベルテリ・ジュリオ・アントニオ「二刀を帯びた男たち--在日英国人教師ダラスとリング襲撃事件(1871)とその歴史的意義」文学・芸術・文化(近畿大学文芸学部論集), 19, 49-82,2007.

外国人教師の住宅 クラーク『日本滞在記』より



出典：国際日本文化研究センター

1-4-8. 英語中心の教育体制（外国人教師の国別人数）

下のグラフは、開成学校の外国人教師数である（『東京大学百年史通史一』）。

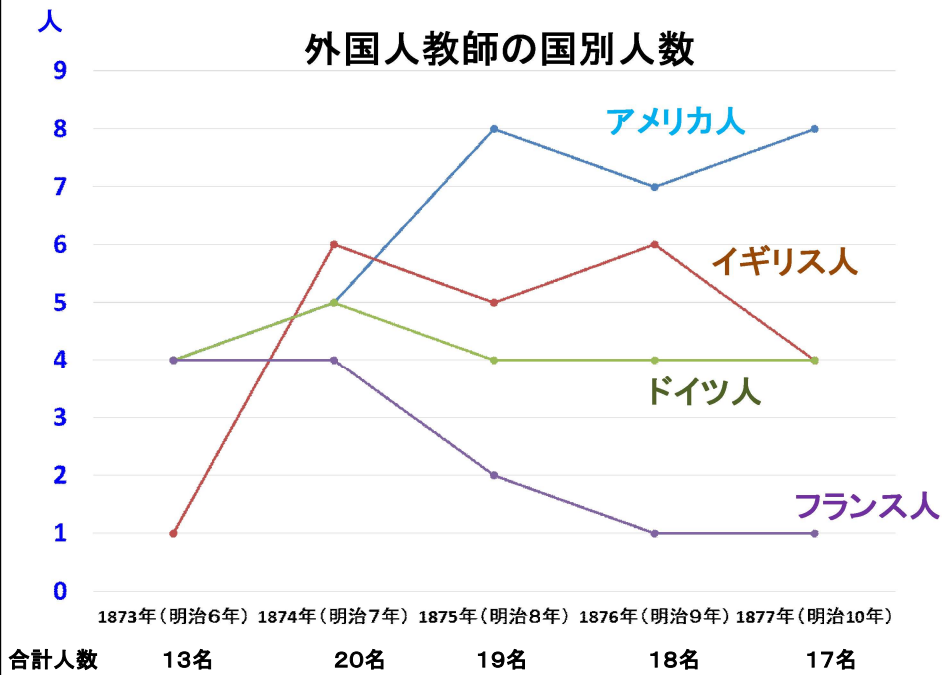
1873年（明治6年）は合計13人であったが、翌1874年（明治7年）には20人となり、その後は少しずつ減っている。このように、外国人教師の数は1874年頃にピークを迎える。しかし、それ以降はだんだん減っていくのである。前述のように、外国人教師を呼ぶのは金と労力がかかりすぎ、教師の質には当たりはずれがあり、また、留学から帰った日本人教師も増えたからである。このため、外国人教師を減らすように政策を変えたのである。

国別で見ると、アメリカ人とイギリス人は増えているが、ドイツ人は横ばい、フランス人は減っている。前述のように、当初は英語・ドイツ語・フランス語の3カ国語の勢力が競っていたが、しだいに英語が中心となった。1874～75年頃に英語中心の教育体制が確立したことを示している。のちの東京大学は英米的な大学となっていくのである。

英語中心の教育体制

出典: 東京大学百年史 通史一

外国人教師の国別人数



1-5. 東京外国語学校

当時の高等教育では、道具として外国語の能力を身につけておくのは不可欠だった。このため、1874年、全国に7つの外国語学校が作られた。東京・大阪・長崎・仙台・新潟・名古屋・広島である。

東京外国語学校は、開成学校から分かれて作られたが、さらに、文部省の「外国語学所」と外務省の「独逸学教場」などの官立の外国語教育機関を統合して作られたものである。はじめは英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語（清語）の5つの科からなっていた。

1-5-1. 東京外国語学校のキャンパス

右側は、1877年（明治10年）の東京外国語学校のキャンパスである。左側は、前述の1883年（明治16年）の地図である。

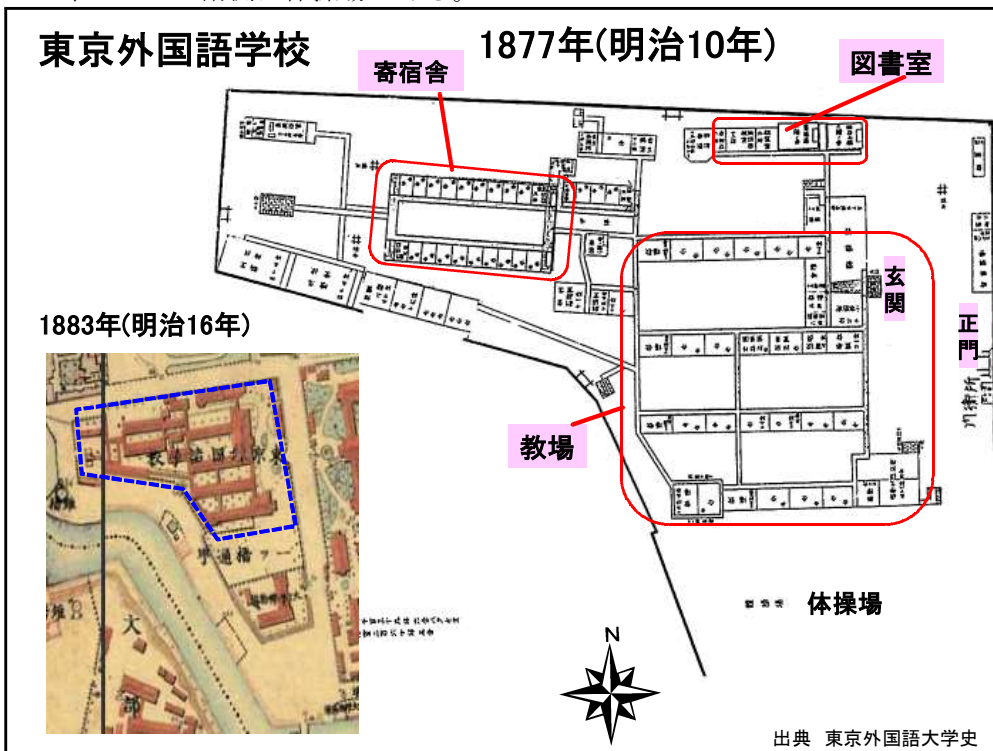
前述のように、開成学校が向かい側の新校舎に移ったのを利用して、その跡地をひきついたのである。はじめから老朽化が進んでいたため、改修しながら使ったという。

東側に正門がある。通りをはさんで開成学校の正門と向かい合っていた。

正門を入ると、教場のエリアがあり、4棟の建物が南北に並んでいた。北側には図書室がある。

キャンパスの西側には、2棟の寄宿舎がある。これは1875年に作られたものである。それまでは、北東に当たる東京英語学校の敷地に寄宿舎が置かれていたが、この建物ができて、寄宿生はこちらに移った。

キャンパスの南側は体操場である。



1-5-2. 東京外国語学校の建物

この時期の東京外国語学校の建物で、写真として残っているのは2枚ある。

上の写真は、前述の「南校の集合写真」である。1872年（明治5年）頃の南校で撮られたものであるが、正面の建物は、翌年にできた東京外国語学校の校舎としても使われたはずである。

これを見ると、建物は平屋だが、屋根はとても高い。正面に出っ張った建物の屋根は曲線をなして、中国風のような印象である。瓦屋根である。屋根の上に、何か四角の台のようなものが載っている。

下の写真は、正門である。中の建物が少し見えるが、木造の平屋であることがわかる。

東京外国語学校の建物

大学南校時代の玄関

出典 東京大学総合図書館

東京外国語学校の正門

出典 東京外国語大学ホームページ

1-5-3. 短命に終わった外国語学校

外国語学校は、1874年に全国に7つ作られた。東京・大阪・長崎・仙台・新潟・名古屋・広島である（日本地図にプロットしたがのが左図）。

これらの学校は、同年に英語学校と改称した。

この英語学校は、ほとんどが1877年に廃止されてしまう。3年ともたなかった。西南戦争による財政難が原因という。それにしても、これほど失敗した学校制度も珍しい。

存続したのは東京と大阪だけであった。他の5校は、廃止後は、地元の県に移管され、中等学校になった。

外国語学校は全国に7校作られた

	前身	1874年 外国語学校	1874年 英語学校	廃止	旧制高校とのつながり	現在
東京	蕃書調所 → 1873 開成学校 外国語学所	→ 1873 東京外国語学校		1887 廃止		(東京外国語大学)
			1874 東京英語学校		→ 1877 予備門 → 1886 第一高等中学校 → 1894 第一高等学校	→ 東京大学教養学部
大阪	1869 大阪洋学校 1869 舎密局 → 1873 開明学校	1874 → 大阪外国語学校	1874 → 大阪英語学校	1879 (廃止)	→ 1886 第三高等中学校 → 1889 (京都移転) → 1894 第三高等学校	→ 京都大学総合人間学部
長崎	1853 英語伝習所 → 1873 幸運学校	1874 → 長崎外国語学校	1874 → 長崎英語学校	1877 廃止		
仙台		1874 宮城外国語学校	1874 → 宮城英語学校	1877 廃止		
新潟		1874 新潟外国語学校	1874 → 新潟英語学校	1877 廃止		
名古屋	1870 藩校・洋学館 → 1873 成美学校	1874 → 愛知外国語学校	1874 → 愛知英語学校	1877 廃止		
広島		1874 広島外国語学校	1874 → 広島英語学校	1877 廃止		

大阪外国語学校は第三高等学校へ

大阪外国語学校は、のちに京都の第三高等学校に引き継がれた。大阪外国語学校の前身は、1869年に作られた大阪洋学校と舎密局である。1873年にこれが開明学校となり、翌1874年に大阪外国語学校となり、大阪英語学校となった。1879年に廃止されるが、大阪専門学校として受けつがれた。これが1886年に第三高等中学校となり、1889年に京都に移転し、1894年に第三高等学校となった。現在は京都大学 総合人間学部を受け継がれている。このように大阪の学校なのだが、京都の旧制高校に引き継がれたという珍しい例である。ちなみに、大阪外国語学校は、現在の大阪外国語大学とは直接の関係がない。

英語学校と旧制高校の関係

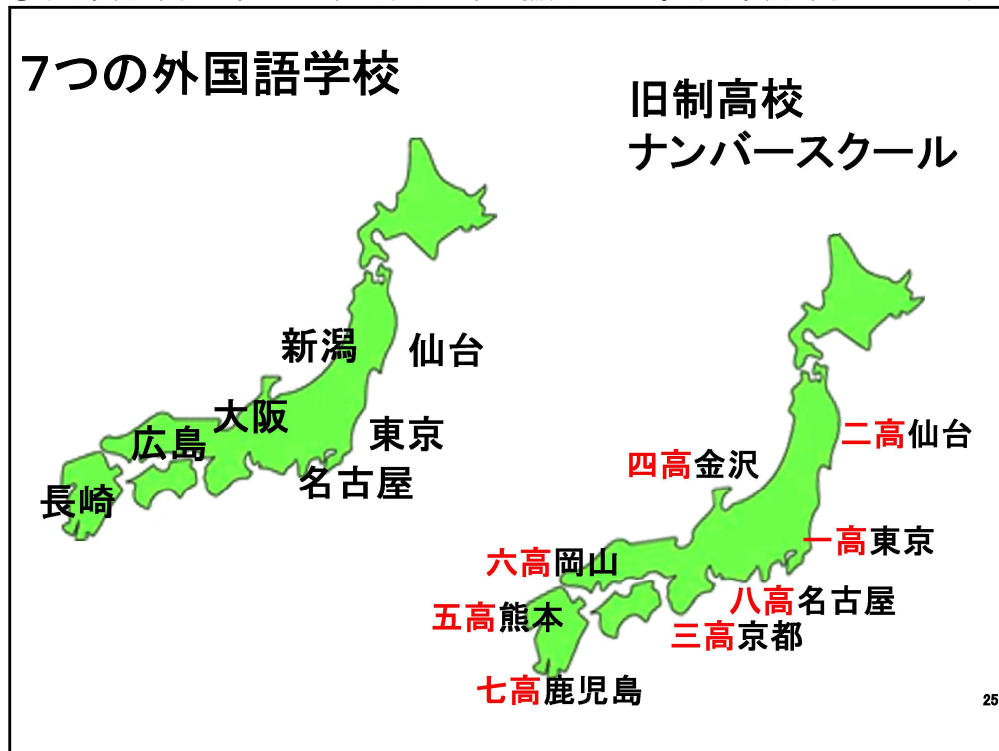
東京英語学校が第一高等学校の起源となったことから考えて、英語学校は旧制高校の原型ではないかと考えたい。天野郁夫氏は『大学の誕生（上）：帝国大学の時代』の中で、「七校の英語学校の全国的な設置は、その後の「大学予科」としての高等学校制度の先駆と見ることもできる」と述べている。

しかし、ことはそう単純ではないようだ。旧制高校のナンバーズクールを日本地図にプロットしたものが右図だが、外国語学校と重なるのは東京・仙台・名古屋だけである。しかも、仙台の宮城外国語学校は第二高等学校とは関係がないし、名古屋の愛知英語学校も第八高等学校とは関係がないのである。旧制高校の先駆となったのは東京と大阪の英語学校だけである。

東京外国語学校と東京英語学校の特別な位置

東京外国語学校を他の外国語学校と比べると、だいぶ独自の道を歩んだわけである。

- ①前身校があり、中央政府との結びつきが強かったこと。東京校は、文部省の「外国語学所」や外務省の「独逸学教場」をベースにしていた。大阪・長崎・名古屋も前身校があったが、政府との結びつきは弱かった。
- ②他の外国語学校がそのまま英語学校と改称したのに対し、東京では、新たに別の学校として英語学校が作られ、外国語学校もそのまま存続した。
- ③東京外国語学校は、1887年まで持ちこたえた。他の外国語学校より10年も遅い。しかも、外国語学校は復活して、現在の東京外国語大学に受け継がれた。他の外国語学校ではこのようなことはなかった。
- ④東京英語学校は、1877年に東京大学予備門となる。東京英語学校だけ生き延びたのである。



1-6. 東京英語学校

1874年に東京外国語学校から独立して、東京英語学校ができた。しかし、この学校は3年しか存在しなかった。

初代校長は、東京外国語学校長の肥田昭作が兼任した。肥田昭作（1842～1921年）は、退官後は銀行頭取や鉱山業などの実業家に転身した。

翌年から、校長心得として服部一三（はっとりいちぞう）が赴任した。服部一三（1851～1929年）は、この時24歳の若者であり、アメリカのラトガース大学理学部で学位を取って帰国したばかりだった。彼の写真は歴代校長のところでまとめて示す（劇団ひとりのような顔をしている）。服部は、後述のように、東京大学予備門の初代主幹となった。彼は、のちに4つの県の県知事となり、貴族院議員をつとめるなど、政治家に転身した。小泉八雲との交流でも知られている。

東京英語学校時代の校長

	氏名	在任	期間	肩書き	校長退職後
1	肥田昭作	1874年12月～1875年11月	1年	東京外国語学校長の兼任	実業家に転身
2	服部一三	1875年11月～1877年4月	1.5年	校長心得	政治家に転身

1-6-1. キャンパスと建物

開成学校の北側に東京外国語学校の寄宿舎があった。前述のように越後高田藩の榊原藩邸を改造したものである。この寄宿舎を用いて、東京英語学校が開校した。

写真は、東京英語学校の正門である。2階建てのかわら屋根である。玄関に2本の柱が立っており、右側の柱に「東京英語学校」と書いてある。屋根の上に、面白い形の塔が立っている。

よく見ると、手前には、白いハカマをはいた学生が歩いている。

細長いキャンパスのどこに学校は建っていたか

前述の1876年の地図をみると、東京英語学校のキャンパスは、東西に細長い形をしている。この細長い敷地のどこに学校はたっていたのだろうか。キャンパスの地図などは見つからなかった。3年しか続かなかった学校なので、資料が少ないのだろう。

探してみると、前述のクラークの『日本滞在記』にヒントが見つかった。この本には「駿河屋敷と開成学校」という絵があり（右下の写真）、開成学校からとなりの「駿河屋敷」が見えると書かれている。この「駿河屋敷」は、政府の役所であり、ここで大宴会が開かれ、クラークは勝海舟や大久保一翁に迎えられたという。

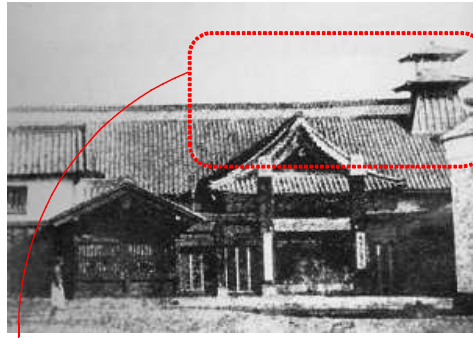
この「駿河屋敷」をよく見てみよう。何と、上の東京英語学校の正門と同じなのである。両方とも屋根の上に面白い形の塔が立っているし、左側の三角屋根の形も同じである。また、開成学校側からみると、地図に示すように、E字型の本館の前庭から北向きに見ると、クラークの写真のような風景となる。開成学校の北側の塀越しに東京英語学校が見えている。こうしたことから、東京英語学校は、長い敷地の西端にたっていたと推測できる。

幕末の古地図を調べると、榊原藩邸の東隣りには、駿河藩の内藤氏の屋敷があった。おそらく、両藩邸は1868年に政府に接収されて、駿河屋敷と呼ばれたのだろう。クラークがここにいた1873年には、政府の役所として使われていたのだろう。同じく1873年から、ここは東京外国語学校の寄宿舎としても使われ、さらに1874年には東京英語学校の校舎になったと考えられる。あるいは細長い敷地なので、西端に正門と政府の役所があり、校舎や寄宿舎はもっと東側にたてられていたのかもしれない。

東京英語学校



東京英語学校の正門

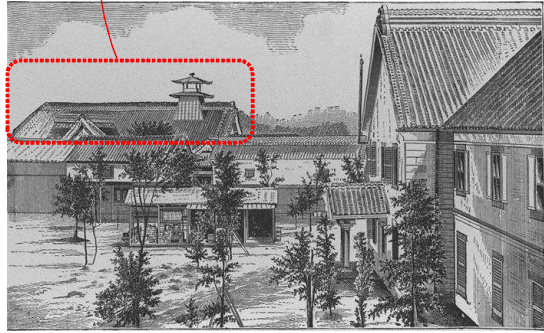


出典: 第一高等学校ホームページ



写真の方向

駿河御殿と開成学校



出典: 国際日本文化研究センター

1-6-2. 東京英語学校の跡地はいま

一高の起源となった東京英語学校があった場所は、今はどうなっているだろうか。

東京英語学校があったところは、白山通りの東側、学士会館の北側の一角にあたる。写真に示すように、この場所には東京パークタワーと三井ビルという高層ビルがたっている。学校があった面影はまったくない。

東京英語学校の跡地の変遷

この場所は、所有者がコロコロ変わったので、その歴史をまとめておこう。

この場所の住所は、東京英語学校の当時は「表神保町10番地」となっている。現在は、「神田神保町1丁目」の一部である。

表神保町10番地(現在の神田神保町1丁目の一部)の歴史

西暦	和暦		本論の参照地図
1853 頃	安政 3	越後高田藩 榊原氏藩邸	1856 年
1873 頃	明治 6	駿河屋敷 (政府の役所)	
1873 ~ 1875	明治 6 ~ 8	東京外国語学校の寄宿舍	
1873 ~ 1877	明治 6 ~ 10	東京英語学校 (1877 に東京大学内に移転)	1876 年
1878 ~ 1881	明治 11 ~ 14	東京府第一中学	
1883 頃	明治 16	火除け地	1883 年
1887 頃	明治 20	小石川植物園分園	1855 年
1907 頃	明治 40	宅地化	1907 年
現在		タワーマンション	現在地図

東京英語学校の跡地はいま



現在 神田神保町1丁目



出典: Yahoo地図

1876年



1-6-3. 東京英語学校はなぜ予備門になったか？

東京英語学校の教員は日本人 24 人、外国人 9 人（イギリス人 5 人、アメリカ人 4 人）である。校長は、東京外国語学校長の服部一三が兼ねた。学生は寄宿生 84 人、通学生 382 人だった（学生定員は 600 人）。当時としては大きい学校である。

それでは、なぜ3年後には、東京大学予備門となったのだろうか。

そもそも、東京英語学校の目的は2つあった。ひとつは、通訳者の養成である。

もうひとつは専門を学ぶための外国語予備教育であった。当時の高等教育は、外国人教師が外国語でおこなっていたので道具として外国語の能力を身につけておく必要があった。

東京外国語学校は、そもそも、①文部省の「外国語学所」や外務省の「独逸学教場」と、②開成学校という2種類の起源を持っている。前者は通訳者養成という目的を重視し、後者が外国語予備教育という目的を重視したわけである。

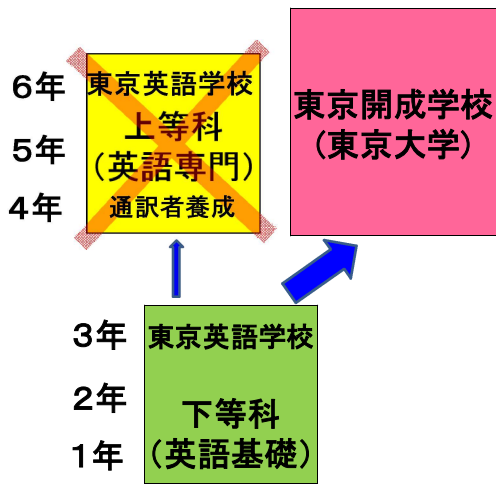
下の図に示すように、東京英語学校は、上等科3年と下等科3年に分かれていた。下等科は英語の基礎教育であり、上等科は、通訳など外国語の専門家になるための英語専門コースであった。下等科はまた、東京開成学校（のちの東京大学）の予科コースでもあった。つまり、下等科は、英語学校専門科の基礎コースと、東京開成学校の予科コースという2つの役割を果すはずだった。

ところが、ふたをあけてみると、下等科の学生はほとんど英語専門科には進まず、みんな東京開成学校へと進学した。このため、英語学校の専門科は成り立たなくなり、3年で改組されて、下等科がそのまま東京開成学校の予科（予備門）となったのである。

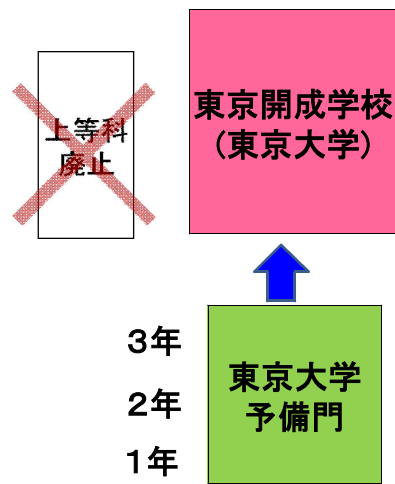
（現在の東京大学教養学部では英語の教員が非常に多いが、その発端が英語学校だったのだから当たり前かもしれない）

東京英語学校はなぜ予備門になったか

1874年(明治7年)



1877年(明治10年)



1-7. 東京大学予備門

1-7-1. 予備門への改組と引っ越し

1877年4月、東京開成学校は、東京医学校と合わせて東京大学となった。この時に、東京英語学校は、東京大学に吸収されて予備門となった。それまでの東京英語学校は文部省の直轄であったが、予備門となつてからは、東京大学の付属となった。

修業年限は、4年であったが、1881年より3年となり、1884年に4年に戻った。

予備門の教員は専任18名、大学との兼任15名、学生は418名であった。

主幹から予備門長へ

予備門は東京大学の一部となったので、予備門の長は「校長」ではなくなり、「主幹」と呼ばれることになった。前述の東京英語学校の校長心得だった服部一三が初代主幹となった。

初代主幹はもうひとり任命された。それは東京大学の法理文三学部の総理補だった浜尾新（はまお あらた）が兼務したのである。浜尾新（1849～1925年）は、のちに帝国大学（東京大学）総長となり、文部大臣や枢密院議長をつとめた。今でも本郷キャンパスの三四郎池近くに浜尾の銅像がある。

1881年には、大学の職制が改定されて、「予備門主幹」は、「予備門長」という肩書きとなった。1881年7月に東京大学法学部長となった服部一三が、最初の予備門長を兼ねた。彼はのちに政治家として活躍したことは前述のとおりである。

専任の予備門長杉浦重剛

1882年2月から、杉浦重剛（すぎうらじゅうごう、1855～1924年）が予備門長となった。兼任ではない専任の予備門長としてははじめてである。後述のように、杉浦は、文部省とケンカして予備門長をやめ、野に下った。その後、新聞や政治結社において日本主義の思想家となった。杉浦の予備門長時代は4年弱にすぎなかったが、予備門のなかでも最も充実した時期であり、杉浦は、のちの一高の歴史に大きな影響を与えた。

杉浦の退職後、文部省書記官の小林小太郎が予備門長事務取扱となったあと、1886年3月に野村彦四郎（1848～1895年）が予備門長となり、翌月に第一高等中学校の初代校長となった（後述）。

東京大学予備門の長

	氏名	主幹・予備門長在任	期間	肩書き	校長退職後
1	服部一三	1877年4月～1879年4月	2年	予備門主幹	大阪専門学校総理
1	浜尾 新	1877年4月～1880年4月	3年	東京大学法理文三学部総理補 兼予備門主幹	帝国大学総長
2	服部一三	1880年4月～1882年2月	2年	東京大学法理文三学部総理補 兼予備門主幹	
		1881年7月～1882年2月	0.5年	東京大学法学部長 兼予備門長	政治家に転身
3	杉浦重剛	1882年2月～1885年12月	4年	予備門長	思想家
4	小林小太郎	1885年12月～1886年3月	4月	予備門長事務取扱	文部官僚
5	野村彦四郎	1886年3月～4月	1月	予備門長	第一高等中学校長

東京大学内への引っ越し

予備門は1877年9月、東京大学（開成学校）の校舎へと引っ越しをした。

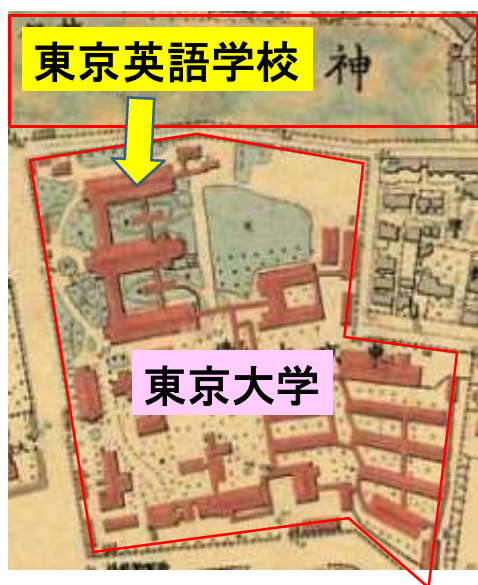
引っ越しといっても、地図に示すように、英語学校の敷地から、通りをはさんで南の校舎へ移っただけである。開成学校には北棟・中棟・南棟の3つがあるが、そのうち北棟が予備門の教室として使われた。

一高は、一橋キャンパスの時代に、すでに1回引っ越しを経験している。それは、後述のように、一橋→向丘→駒場という3回の移動の歴史の始まりであった。

予備門のキャンパスや校舎は、前述の開成学校（東京大学）と同じである。

東京大学予備門

東京大学への引っ越し



出典 東京大学総合博物館 デジタルミュージアム

1-7-2. 教室と寄宿舎の分離

東京大学にはすでに3学部があり、そこに500名近い予備門生がいきなり入ってきたわけで、どうやってスペースをやりくりしたのだろうか。少し考えても東京大学側に不満は出そうなものだが、どうだったのだろうか。『第一高等学校六十年史』などを調べてみると、この経過はなかなか面白いので、図解しながら説明しよう。

左側の図は、東京大学（東京開成学校）の校舎、右側は予備門引っ越し後の校舎である。

教室と寄宿舎が混在する不安

引っ越し前は、北棟は1・2階とも寄宿舎（学生寮）である。中棟は、2階が寄宿舎で、1階が教室（教場）である。南棟は1・2階とも教室である。このように、当時は教室と寄宿舎が混在し、学生は校舎の中に住んでいたのである。

教室と寄宿舎が近いことは、学生にしてみると便利である。

ところが、大学側してみれば、大きな問題だったのである。

第1に見苦しい。教室の窓からながめると、寄宿舎の窓から衣類やフトンなどが丸見えとなる。当時の大学は武家出身者が多いので、こうした体裁の悪さは許されないことだったろう。

第2に、寄宿舎が北棟だけでは足りないので、あちこちに散在してしまい、大学側が監督しにくかった。

第3は火事の心配である。教育用の科学機器は、海外から取り寄せた高価なものが多く、火事で焼失すると、教育へのダメージが大きかった。寄宿舎の周辺（とくに食堂や浴室）では火を使うので、火事の危険が大きくなる。実際、前述のクラークの『日本滞在記』には、1874年に開成学校で火事がおこり、校舎がほぼ全焼したと書かれている。北棟の2階の寄宿舎から火が出て、講義中だったクラークは消火にあたり、ケガをした。

こうした点から、東京大学は、教室と寄宿舎の混在を嫌い、何とかしたいと思っていたのである。

教室と寄宿舎の分離

1877年9月に予備門が引越してきてからは、北棟の1・2階をすべて予備門が使うことになり、それでも足りず、中棟の2階も教室にした。これで校舎はすべて教室にすることにした。

それでは寄宿舎はどうしたのだろうか。

引っ越し前の東京大学（東京開成学校）では、1876年の地図に見られるように、敷地の南側に広い「教師館」すなわち外国人教師の住宅があった。しかし、政府は外国人教師を減らすように政策を変えた。また、教師館の建物が古くなったので、外国人教師はここに住みながら、当時には一人しか住んでいなかった。

そこで、この教師館を寄宿舎にして、北棟・中棟にいた東京大学の学生を移した。後には、新しい寄宿舎がたくさん建てられた（前述の1878年のキャンパス図を参照）。

また、予備門の学生のためには、新たに2棟の寄宿舎をたてた。この建物は1877年12月に完成して、学

生 90 名が入った。

このように、教室と寄宿舎を分けて、それぞれのスペースを確保することによって、上の 3 つの問題点をすべて解消することができたのである。

火事対策

第 3 の火事の心配については、さらに念入りに対応している。何と、前の東京英語学校の校舎をこわして、「火除け地」とすることにしたのである。これによって、北側の民家からの類焼を防げるようになった。今から考えるとスペースの無駄のように思えるが、当時は大火災が頻繁にあったので、学校は火事を何よりも怖れたのである。跡地は、以後、空地となった（前述の東京英語学校の跡地の変遷を参照）。

また、前述の 1878 年のキャンパス図に示すように、「旧食堂」がこの位置にあったのは、本館が寄宿舎として使われていたからである。しかし、火を使う食堂が、高価な機器の多い物理講義室のとなりであったのでは、教員もハラハラしただろう。そこで、「旧食堂」が取り壊されて、校舎から離れたところに「新食堂」が作られた。これも火事対策であったと思われる。

東京大学と予備門の利害の一致

このように、東京大学にとっては、予備門を受け入れることにより、寄宿舎建設の費用を政府に出させ、教室と寄宿舎の分離というかねてからの願いをかなえることができた。引っ越しは予備門に対する不満になるどころか、不安を解消してくれるチャンスとなった。

予備門にとっても、東京大学の一部となることでプライドが満たされただろう。教室と寄宿舎の分離という方針は、後の一高の長い伝統となっていくのである。

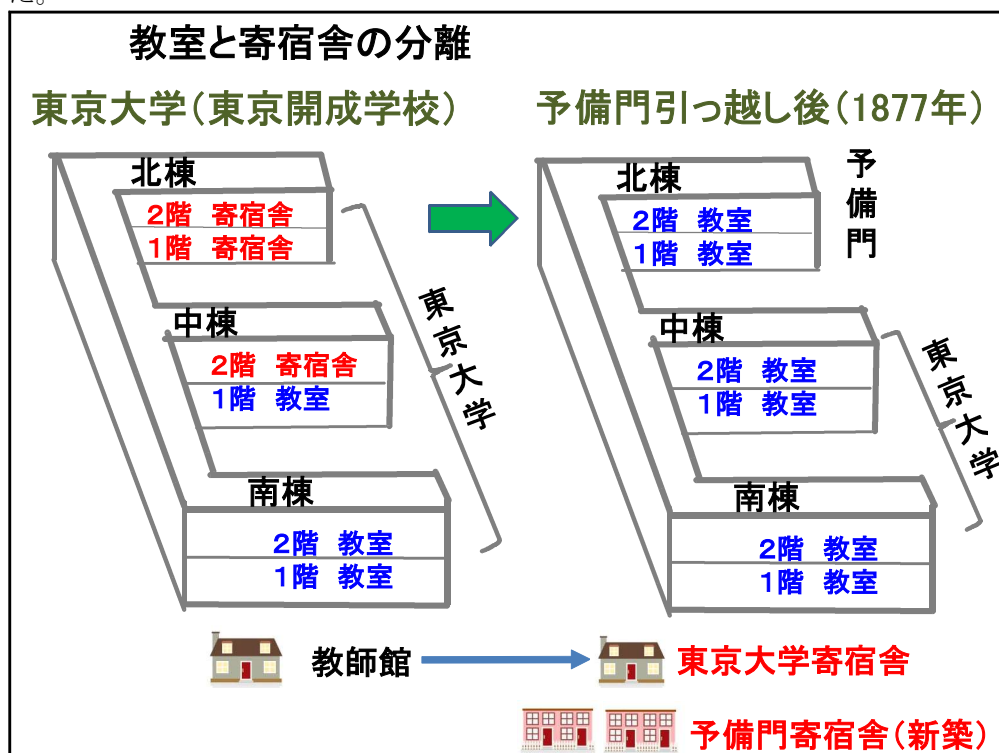
このように両者の利害は一致した。

こんなことを考えるのも、のちに 1949 年の旧制高校が新制大学に組み込まれた時や、その後の教養部と大学の不幸な関係を考える際に、この時の予備門と東京大学との関係は良い比較材料となるからである。

明治 16 年の学生暴動のきっかけとなった柵

東京大学は不安を解消したかもしれないが、学生にとっては不満が強まったかもしれない。前述の開成学校の 1878 年キャンパス図を見ると、たしかに立派な寄宿舎が何棟もたてられ、住環境はよくなったが、一方で管理は厳しくなったようだ。

キャンパス図をよく見ると、寄宿舎の回りには「木柵」がめぐらされていることがわかる。これは学生が無断で寄宿舎を抜け出したりするようになったため、風紀を守るために作られた。しかし、学生にとっては「まるで監獄にいるようだ」と、不評であり、1883 年「明治 16 年事件」のきっかけともなった。これは、政治活動取締強化に反対した東京大学生や予備門生が、学位授与式をボイコットして暴動をおこしたものである。147 名が退学処分を受けたが、うち予備門の学生は 65 名であった。退学者の多くは、のちに復学した。



1-7-3. あまりに厳しすぎる進級

予備門への入学試験はかなり厳しかった。しかし、たとえ入学できたとしても、卒業して東京大学への道が保証されていたわけではない。

厳しい選抜を示すデータがある（『東京大学百年史通史一』）。下の表は、1880年（明治13年）に入学した118名の学生の進級状況を示している。118名中、翌年に進級できたのは75名（64%）であり、残りの43名（36%）はすべて退学させられたのである。かなり厳しい。

その進学した75名のうち、翌年に進学できたのは21名であり、進級できず留年したのが42名である。残りの12名は退学となった。

その進学した21名のうち、翌年に進学できたのは12名にすぎない。

修業年限の4年で順調に卒業できたのは、たったの10名だけである。118名中8%にすぎない。

入学した118名は結局どうなったか。卒業できたのは19名であり、卒業率は16%にすぎないのである。退学したのは90名であり、退学率は実に76%にのぼる。卒業まで耐えることができた者は、きわめて少なかった。1878年から86年の予備門の歴史で、全卒業生はたったの491にとどまる（『日本近代教育百年史3』1190頁）。

それでは途中で退学していった者はどうしたのだろうか。詳しくはわからないものの、工部大学校や駒場農学校の資料を調べると、予備門経験者が在学生の4分の1ほど見られるという。つまり、退学者は他の高等専門学校へと転学していたようである（『東京大学百年史通史一』）。

年度 (西暦)	明治	脱落 退学	1年 (4級)	2年 (3級)	3年 (2級)	4年 (1級)	卒業
1880	13		118				
1881	14	43		75			
1882	15	12		42	21		
1883	16	35		5	11	12	
1884	17				?	?	10
1885	18					?	7
1886	19					?	
1887	20					?	1
1888	21						1
合計		90					19

118 → 入学した118名中、進級は75名。残る43名は退学させられた
75 → 進級した75名中、進級は21名。留年が42名。残る12名は退学
12 → 4年で卒業できたのは118名中10名
10 → 4年で卒業できたのは118名中10名
90 → 結局118名中90名は退学
19 → 結局卒業できたのは118名中19名

予備門の学生 (3人とも落第した)

夏目漱石 正岡子規 南方熊楠



出典: Wikipedia

東京大学予備門の学生として有名なのは、夏目漱石・正岡子規・南方熊楠である。3人は、同期で入学したが、3人とも落第した。予備門では進級することがきわめて難しかったので、珍しいことではなかった。3人と一高の関係をみると、下のような経過である。

● 漱石・子規・熊楠と一高

	夏目漱石	正岡子規	南方熊楠
1867 (慶応3) 年	生まれる	生まれる	生まれる
~			
84 (明治17) 年	大学予備門に入学	大学予備門に入学	大学予備門に入学
85 (明治18) 年		落第	落第し予備門を中退
86 (明治19) 年	落第		
87 (明治20) 年			
88 (明治21) 年			
89 (明治22) 年			
90 (明治23) 年	第一高等中学校卒業 帝国大学に入学	第一高等中学校卒業 帝国大学に入学	

3人とも1867 (慶応3) 年生まれの同期である。

大学予備門に入学したのも1884 (明治17) 年のことで、3人は同級生である。

翌1885 (明治18) 年には、子規と熊楠が落第した。子規は幾何学の点数が足りず、熊楠は代数学の点数が足りなかった。

子規は、後述のように、翌年は進級することができた。

しかし、熊楠は、落第すると、予備門を中退し、心機一転、アメリカに渡って勉強した。

翌1886 (明治19) 年、大学予備門は第一高等中学校と改称した。

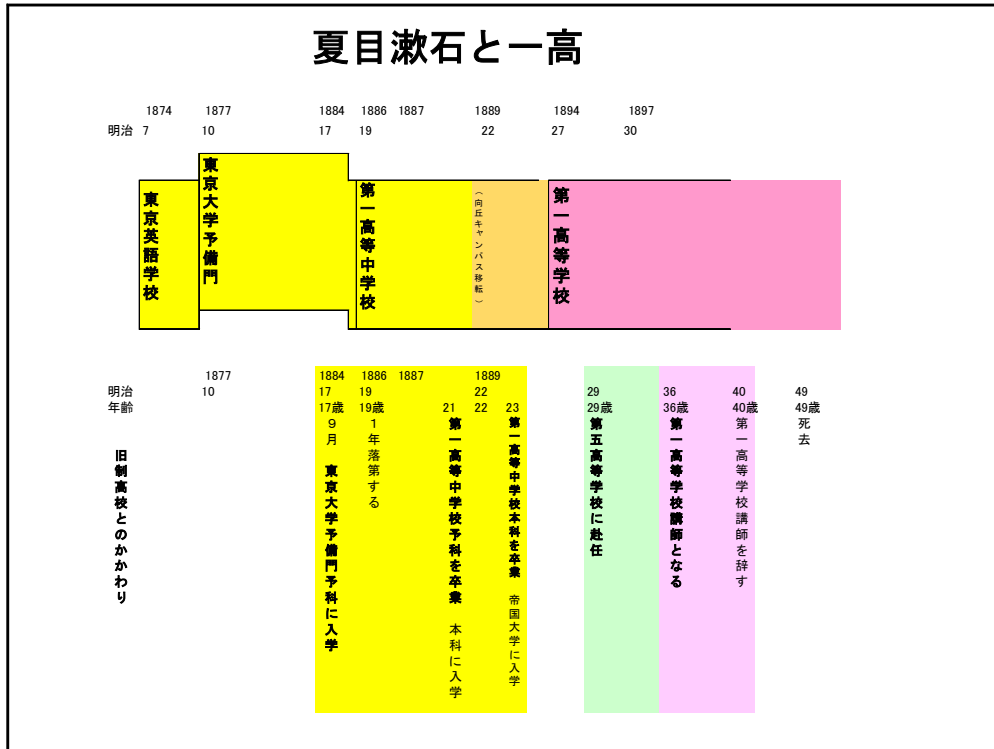
この改組のゴタゴタもあり、同年、漱石が落第した。病気で試験を欠席したが、追試を受けずにもう一度その学年を繰り返そうと決意した。翌年には進級している。

1890 (明治23) 年、漱石と子規は、第一高等中学校卒業を卒業した。5年の課程を6年かかっている。ふたりとも、すぐに帝国大学に入学した。

なお、3人のうちで最も長生きしたのは熊楠である。漱石は49歳、子規は34歳で亡くなったが、熊楠は74歳まで生きた。

以下、漱石と子規の一高時代を詳しく見ていきたい。

夏目漱石と一高



夏目漱石（1867～1916年）ほど、旧制高校と関係の深い作家はいない。一高の学生として6年、五高の教員として5年、一高の教員として4年をすごした。計15年。短すぎる49年の生涯のうち、約3分の1の時間を旧制高校とかかわって生きた。

○一高の学生としての漱石 6年間

1884（明治17）年、17歳の漱石（当時は塩原金之助）は、東京大学予備門に入学した。当時の大学予備門は、5年制で、前半3年を予科、後半2年を本科と呼んでいた。

1886（明治19）年、東京大学予備門は「第一高等中学校」と改称された。この改組によるゴタゴタがきっかけで、漱石は落第することになった。1889年（明治22年）、一橋キャンパスから本郷の向丘キャンパスへと移転した。漱石もこの移転を体験した。

1890（明治23）年、漱石は、第一高等中学校を卒業した。

卒業後は、帝国大学に入学し、1893（明治26）年、卒業した。

1895（明治28）年、愛媛県松山の中学校に赴任した。『坊ちゃん』の舞台である。

○五高の教員としての漱石 5年間

1898（明治29）年、29歳の漱石は、第五高等学校の講師として、熊本に赴任した。7月には教授となった。五高の教師としては、嘉納治五郎、ラフカディオ・ハーンらが有名。

1900（明治33）年、33歳の漱石は、五高教授のまま、文部省の命でロンドンに留学した。

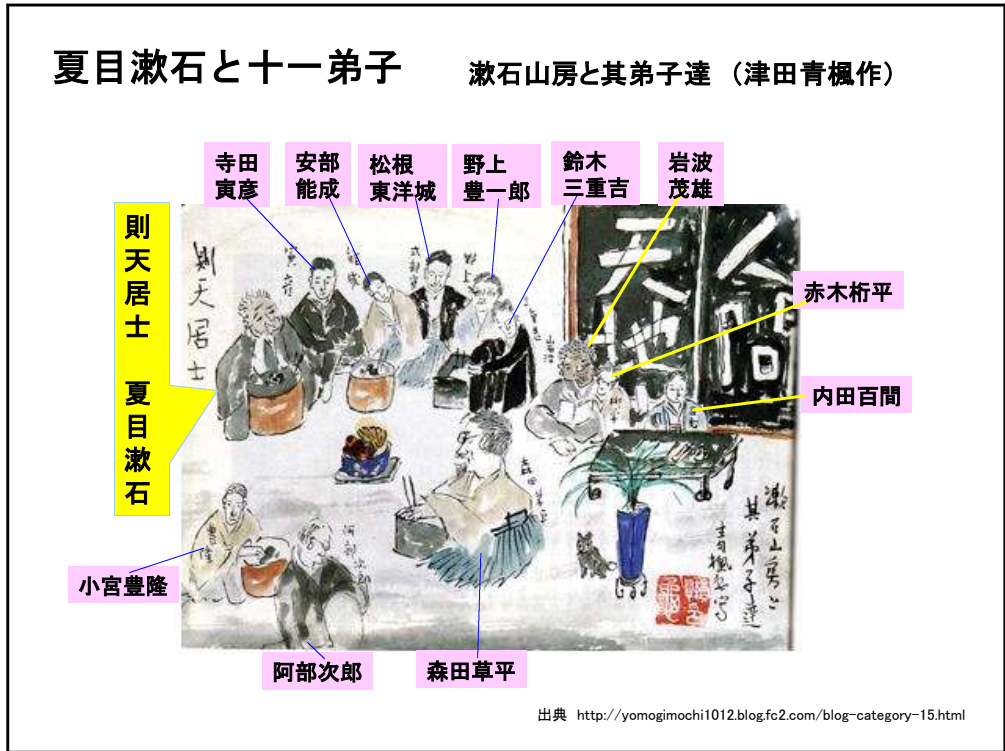
○一高の教員としての漱石 4年間

1903（明治36）年、ロンドンから帰国した漱石は、五高を辞し、第一高等学校の講師に就任した。同時に、東京帝国大学文科大学英文科の講師を兼任し、『文学論』の著作と講義に専念した。

同年、一高生の藤村操が華厳の滝に身を投じた。遺書として「巖頭の感」を残し、全国の旧制高校生に衝撃を与えた。事件の前、講師だった漱石が英語の授業で、学生の藤村にテキストの訳読を命じたが、予習していなかったということが続き、漱石は「勉強する気がないならもう出てこなくてよい」と藤村に言った。その2日後に藤村は自殺した。漱石の言葉と自殺に関連があるかは不明だが、漱石は後々までこのことが胸から離れなかったという（秦郁彦『旧制高校物語』）。

1907（明治40）年、40歳の漱石は、第一高等学校と東京帝国大学の講師をやめた。同時に、朝日新聞社の社員となり、作家として創作に専念した。漱石の言葉「大学を辞して朝日新聞に入ったら、あう人がみな驚いた顔をしている。新聞が商売であるなら、大学も商売である」。そして、『虞美人草』から未完の『明暗』まで、10本の長編小説を発表した。1916（大正5）年、胃潰瘍による出血で亡くなった。享年49。

夏目漱石が旧制高校にあたえた影響



もうひとつ、漱石が旧制高校に与えた影響として重要なのは、彼の交友関係と思想である。

木曜会

漱石の自宅には、大学や高校の教え子などが集まり、「木曜会」というサロンが作られた。木曜会の中心となったのは、小宮豊隆、鈴木三重吉、森田草平、安部能成であり、「四天王」と呼ばれた。

木曜会の中心メンバーは、「漱石山房と其弟子達」（津田青楓作）というマンガに描かれている。ここには、四天王を含めて11人が描かれている。

ほかに木曜会に参加したのは、和辻哲郎・滝田樗陰などの学者、中勘助・芥川龍之介・久米正雄などの小説家であった。こうした人脈は「漱石山脈」と呼ばれた。

十一弟子の旧制高校人脈

下の表は、「漱石山房と其弟子達」に描かれた漱石の十一弟子について、その並び順に経歴をまとめたものである。

表に示すように、多くは地方出身者であった。寺田寅彦と松根東洋城は、生まれは東京であるが、すぐに高知と松山に引っ越しているの、地方出身といってもよいだろう。

出身高校は一高が多い。小宮豊隆、安倍能成、岩波茂雄は一高の同期である。

出身大学はほとんどが東京帝国大学である。一高か東大で漱石の教え子だった者が多い。

職業はさまざまである。多くは大学の教員をつとめた教育者・文学者や小説家である。宮内省役人で俳人の松根東洋城や、岩波書店創業者の岩波茂雄のような人もいる。

漱石の十一弟子の経歴

「漱石山房と其弟子達」の並び順

		生まれ	高校	大学	教員歴	職業
1	寺田寅彦	東京	五高	東京帝国大学	東京帝国大学教授	物理学者・随筆家
2	安部能成	愛媛	一高	東京帝国大学	一高校長、学習院長	文部大臣など
3	松根東洋城	東京	一高	京都帝国大学		宮内省式部官、俳人
4	野上豊一郎	大分	一高	東京帝国大学	法政大学総長	英文学者
5	鈴木三重吉	広島	三高	東京帝国大学		童話作家
6	岩波茂雄	長野	一高			岩波書店創業者
7	赤木桁平	岡山	六高	東京帝国大学		文芸評論家、衆議院議員
8	内田百閒	岡山	六高	東京帝国大学	法政大学教授	小説家
9	森田草平	岐阜	一高	東京帝国大学	法政大学教授	小説家
10	阿部次郎	山形	一高	東京帝国大学	東北帝国大学教授	哲学者
11	小宮豊隆	福岡	一高	東京帝国大学	東北帝国大学教授	独文学者

1. 寺田寅彦

寺田寅彦（てらだとらひこ）は、東京生まれで、3歳で高知に移り、熊本の第五高等学校に入った。五高では、教員をしていた夏目漱石に英語を教わり、以後、漱石の門下となる。38歳で東京帝国大の物理学の教授となった。

寅彦は科学の随筆で有名であるが、「庭の追憶」や「団栗」といった小品を読むと、日常生活から書き出して亡き妻や家族の追憶に至る叙情的作品であり、むしろ小説と呼んでよいだろう。志賀直哉の心境小説とも似たような趣があり、寅彦には小説家としての資質があった。

寅彦も旧制高校と縁のある人である。高知で寺田寅彦が住んだ場所は、旧制高知高校（現在の高知大学附属小学校・中学校）のすぐそばである。父の死により、寅彦が土地を相続したが、ほとんど売り払った。旧制高知高校となる用地も売り、それにより寅彦は21,536円を得た。高知高校の設立資金は、100万円であるから、そのうちの2パーセントは寅彦が得たことになる。その金で、寅彦は東京板橋区の志村に別荘を買ったようだ。

これについては、私の「旧制高知高校を歩いてみよう」で紹介している。

<http://tannoy.sakura.ne.jp/Kochi%20koukou%20Campus.pdf>

寅彦は3回結婚した。最初の妻は坂井夏子という女性で、14歳の時に、20歳の寅彦と結婚した。しかし、夏子は19歳で病死してしまう。寅彦の後輩にあたる阿部能成の初恋の人がこの夏子であると主張する人もいる。2人目の妻寛子も病死し、三人目の女性紳子と結婚した。寅彦と3人の妻は、高知市内にある墓地に並んで眠っている。

2. 安部能成

四天王のひとり安倍能成（あべよししげ）は、愛媛生まれで、漱石が教えた松山中学校に入学したが、その時、漱石はすでに五高に移っていた。東京帝国大学で漱石の影響を受けた。一高時代の安部と同級だったのが藤村操である。前述のように、藤村は華厳の滝に飛びこんで自殺し、旧制高校生に衝撃を与えた。教師だった漱石は、自殺の2日前に藤村に説教をしたので、漱石はこのことを気にしていた。藤村の妹の恭子と結婚したのが安部能成である。

1940（昭和15）年に、安部は一高の校長となった。歴代校長の中で安部ほど生徒全般から尊敬された校長はいなかったと言われる。その後、文部大臣や学習院長をつとめた。

3. 松根東洋城

松根東洋城（まつねとうようじょう）は、東京生まれで、裁判官の父について各地を転々とし、松山中学に入り、そこで漱石から英語を学んだり俳句の教えを受け、漱石を終生の師と仰いだ。一高・東京帝国大学と進んだが、京都帝国大学に移りそこを卒業した。宮内省に入り式部官となった。上の「漱石山房と其弟子達」図に「式部官」と書かれているのはそういうわけである。子規の後を継いだ高浜虚子と対立した。

4. 野上豊一郎

野上豊一郎（のがみとよいちろう）は、大分生まれで、大学時代に漱石門下となった。英文学者として法政大学教授となり、漱石門下（森田草平や内田百間）を法政大学に呼んだ。ところが、その森田草平が野上を批判して対立し、野上と支持者を大学から追放した（法政騒動）。その後、森田も大学を追われ、野上は大学に復職した。終戦後の1946年には法政大学総長に選ばれた。能楽の研究でも知られる。野上の妻は小説家の野上弥生子である。

5. 鈴木三重吉

四天王のひとり鈴木三重吉は、広島生まれで、京都の第三高等学校を出て、東京帝国大学に入学。大学時代に漱石の講義を受け、自作の小説を漱石の推薦で発表し、それ以後漱石門下として活動をした。のちに『赤い鳥』などの童話作家として知られるようになった。

6. 岩波茂雄

岩波茂雄（いわなみしげお）は長野生まれで、上の「漱石山房と其弟子達」図では、森田草平と同じく、坊主頭の豪傑のように描かれている。一高卒業後、東京帝国大学の選科に入った。岩波茂雄が1913年に創業した岩波書店は、後述のように、漱石文化という教養主義を後押しするメディアとなった。

7. 赤木桁平

赤木桁平（あかぎこうへい）は、岡山生まれで、岡山の第六高等学校を出て、東京帝国大学に入学。東大在学中に鈴木三重吉の紹介で漱石門下となった。初めて夏目漱石の伝記を書いた人である。文芸評論家として成功し、のちに衆議院議員をつとめた。

8. 内田百間

作家の内田百間（うちだひゃっけん）は、岡山生まれで、岡山の第六高等学校を出て、東京帝国大学に入学。のちに、法政大学教授となり、学生たちから慕われた。しかし、漱石門下の草野心平がおこした法政騒

動で大学を退職し、作家として専念した。内田百閒の怪異談は、カフカのような趣のある傑作である。百閒の名作『サラサーテの盤』に着想をえたのが、鈴木清順の傑作映画『ツィゴイネルワイゼン』である。

百閒が 60 歳になる頃から、法政大学時代の教え子たちが、摩阿陀会（まあだかい）という誕生パーティを開くようになった。これは「先生は還暦過ぎてまだ死なないのかい」というユーモアである。教師冥利に尽きることだろう。黒澤明の映画『まあだだよ』はこうした内田百閒がモデルである。私が学者論を本格的に書きたいと思ったのはこの映画を見てである。

9. 森田草平

四天王のひとり森田草平は、岐阜生まれの小説家である。上の「漱石山房と其弟子達」図でも、とりわけ大きく豪傑のように描かれており、中央に堂々とあぐらをかいて、漱石と対峙している。しかし、数々のトラブルをおこした問題児である。森田の「塩原事件」は当時有名になった。森田は平塚らいてうと不倫関係となり、那須塩原の温泉で心中未遂事件をおこした。新聞にも報じられるスキャンダルとなり、漱石は、森田を自宅にかくまうなど、後始末に奔走した。

1920 年（大正 9 年）に同じ漱石門下の野上豊一郎の紹介で法政大学教授となった。ところが、1933 年には、野上を批判して、野上と支持者を大学から追放した（法政騒動）。追放された教員には、内田百閒もいた。しかし、その後、森田自身も法政大学を去ることになる。

10. 阿部次郎

山形生まれで、のちに東北帝国大学教授となった哲学者である。小宮豊隆の紹介で漱石のもとに出入りした。1914（大正 3）年に発表した『三太郎の日記』は、旧制高校生の教養主義のバイブルとなった。

阿部は 1922（大正 11）年からドイツなどに留学した。この時のことについては、私の「ハイデルベルク大学を歩いてみよう」で紹介している。 <http://tannoy.sakura.ne.jp/heidelberg.pdf>

ハイデルベルクでは、城の近くに下宿したが、ほとんど大学には行かず、下宿でカントやゲーテを読んでいたという。夏目漱石のロンドン留学と同じような留生活タイプである。リッケルトの講義を 1 回聞いたらしいが、「引締った、落付いた、痩せた人だらうと想像していたのは反対に、豊頬の皮が弛んで肉の付いているやうな、少しくブカブカな感じのする老人である。・・・その思想を深く人心に刻み込むための、多きに過ぎず少なきにすぎぬ力を欠くといはなければならぬ」（『滞欧雑記・独逸の巻』）と酷評している。

後に漱石門下の和辻哲郎と絶交したことも有名である。和辻哲郎は『風土』『古寺巡礼』などで知られる哲学者であるが、同じ漱石門下として、阿部次郎や小宮豊隆らと雑誌「思想」を編集していた。和辻哲郎が留学している間に、妻の照（てる）に言い寄ったのが、阿部次郎である。

和辻が留学している間に、妻の照（てる）に言い寄ったのが、和辻の親友で哲学者の阿部二郎です（末永航『イタリア、旅する心』）。阿部はかねてから照に特別な感情を抱いていたことを伝えて言い寄りました。阿部は『三太郎の日記』の中に、照への思いを匿名で書いています。帰国した和辻はそのことを知り、阿部と絶交しました。40 年後、和辻と阿部が亡くなってから、照がこのことを雑誌で発表しました。

丹野義彦『イタリア アカデミックな歩き方』有斐閣、111 頁

11. 小宮豊隆

四天王のひとり小宮豊隆（こみやとよたか）は、福岡生まれで、のちに東北帝国大学教授や、東京音楽学校（現在の東京藝術大学）の校長をつとめたドイツ文学者である。漱石の伝記『夏目漱石』でよく知られている。小宮は漱石の『三四郎』のモデルとなったと言われている。

漱石の一高人脈

漱石は、一高の教員との交友も広く、このような人脈を通じて一高生に影響を与えた。

漱石門下の四天王のひとりである安倍能成（1883～1966 年）は、前述のように、1940（昭和 15）年に、一高の校長となった。歴代校長の中で安部ほど生徒全般から尊敬された校長はいなかったと言われる。

また、一高の校長の狩野亨吉（かのうりょうきち）は、漱石の大学時代の友人である。漱石がロンドン留学後に第一高等学校の講師となったのは、狩野の推薦だったという。狩野は、漱石の『それから』の主人公「代助」のモデルと言われる。

一高の教授で教頭をつとめた歴史学者の斎藤阿具（さいとうあぐ）は、漱石の一高時代の同期である。斎藤が留学中に本郷にあった家を漱石に貸し、漱石はここで『吾輩は猫である』を書いた。この旧居は明治村に移築・保存されている。

また、東京大学駒場キャンパスの 1 号館の前には、橄欖（かんらん、オリーブのこと）の木があるが、これは斎藤阿具がヨーロッパから持ち帰った木である。木の前の解説板には次のように書かれている。

「斎藤阿具（明治元年・1868～昭和 17・1942）は、第一高等学校の教授で教頭を勤め、退職後も講師として死去するまで同校で教鞭をとった。彼自身も一高の卒業生（明治 23・1890）で、夏目漱石と同期である。一高教授に着任前の第二高等学校在任中に、ドイツ、オランダに留学し、帰国時にオリーブの苗木を持ち帰

った。この苗木は、千駄木の自宅に植えられた後本郷の一高本館の右手に植えられたが、一高の駒場移転に際し、現在の場所に移植されたものである。碑の表面の『橄欖』と裏面の「昭和八年教授齋藤阿具寄贈」文字は、齋藤の自筆である。」

ほかにも、杉浦重剛、新渡戸稲造といった歴代校長とも関係があった（後述）。

漱石文化と教養主義

漱石は日本の文化全体にも影響を及ぼした。漱石門下の思想は「教養主義」であり、「漱石文化」などと呼ばれ、大正・昭和初期の知識人に影響を与えた。教養主義は、旧制高校の学生たちの基本的な価値観となった。また、漱石門下には、文部大臣をつとめた安部能成や多くの大学教授がいて、日本の教育政策にかかわった。

また、岩波茂雄が 1913 年に創業した岩波書店は、教養主義を代表するメディアとなった。漱石の最初の全集を出版したのも岩波書店である。岩波書店は、大正デモクラシーの自由主義的な時流に乗って、「岩波文化」という教養主義のイメージづくりに成功した。漱石門下は、大正デモクラシーを後押しし、それが旧制高校の学生たちに影響を与えた。

夏目漱石の一高時代



以下では、夏目漱石の一高時代を詳しく辿ってみたい。

■文献

- 江藤淳『漱石とその時代 第一部』新潮社、1970。
 秦郁彦『旧制高校物語』文春新書、2003。
 夏目漱石『落第』1906（明治39）年、青空文庫。
 夏目漱石『私の経過した学生時代』1909（明治42）年、青空文庫。
 夏目漱石『硝子戸の中』1915（大正4）年、青空文庫。
 夏目漱石『処女作追懐談』1908（明治41）年、青空文庫。
 夏目漱石『満韓ところどころ』1909（明治42）年、青空文庫。
 夏目漱石『模倣と独立』1913（大正2）年、青空文庫。
 夏目漱石『正岡子規』1908（明治41）年、青空文庫。
 正岡子規『墨汁一滴』1901（明治34）年、青空文庫。
 末永航『イタリア、旅する心 大正教養世代がみた都市と美術』青弓社。
 竹田篤司『明治人の教養』文春文庫

複雑な家庭に育った漱石

漱石・夏目金之助は複雑な家庭に生まれた。漱石の子ども時代は不幸なことだらけである。これほど複雑で衝撃的な子ども時代を送った人物が、非行や反社会的行動に走ることなく、勉強に励み、大学教員となり、世紀の大作家になったということは、後から考えると、奇跡のように思われる。

金之助が通った学校は8つある。

夏目漱石が通った学校

	学校名	通学時期	特徴	住所
1	戸田小学校	7～8歳	小学校	浅草 寿町11
2	市谷小学校	8～11歳	小学校	市ケ谷 柳町
3	錦華小学校	11～12歳	尋常小学校	神田 猿樂町
4	東京府第一中学校	12～14歳	中学校	神田 一橋
5	二松学舎	14歳	漢学私塾	麴町
		(空白の2年)		
6	成立学舎	16～17歳	英学私塾	神田駿河台鈴木町
7	大学予備門	17～23歳	大学予備門	神田 一橋

	卒業時は第一高等中学校		高等中学校	本郷 向ヶ丘
8	帝国大学	23～26歳	大学	本郷

この表で気がつくことは、3つの小学校に通ったこと、東京府第一中学校を2年で退学し、漢学私塾の二松学舎に入ったが1年でやめたこと、その後14～16歳は学校に通わない「空白の2年」があること、である。これらについては後述する。

カンニングで大学予備門に入学

1884年（明治17年）、17歳の漱石（当時は塩原金之助）は、大学予備門に合格した。

面白いのは、大学予備門の受験で、漱石がカンニングをしたことを公言していることである。入学試験中に、友人の橋本左五郎に数学の答えを教えてもらった。そのおかげで漱石は合格したが、教えた橋本は落ちてしまったという（『私の経過した学生時代』）。これほど大胆に入学試験の不正を公言しているのも面白い。

ちなみに、橋本は、追試験で予備門に合格したが、「何だ下らない」と言って東京大学には進まずに、札幌農学校へと進んで、農学者となった。後に、漱石は1909年に満州・韓国旅行に行ったが、そこでたまたま蒙古の畜産事状を調査に来ていた橋本と20年ぶりに再会した（『満韓とところどころ』）。

馬鹿のわんぱく

入学当時は、漱石は勉強に熱心ではなかった。友人の中村是公（のちの南満州鉄道の副総裁）といっしょに、神田猿樂町にある末富屋に下宿した。成立学舎で同じ釜のメシを食べた橋本や太田たちと「十人会」を作り、牛肉を食べたりして遊んでいた。ポートルースなどの運動を好んだ。勉強している級友をバカにして、遊んでいたのも、成績は悪かった。「みんなそろいもそろった馬鹿のわんぱくで、勉強を軽蔑するのが自己の天職であるかのごとくに心得ていた」と追想している（『満韓とところどころ』）。漱石にもこのようなわんぱくなガキの時代があったというから、面白い。

下駄論者 杉浦重剛校長

わんぱくだったのは生徒ばかりではない。当時の大学予備門の校長は、28歳の若き杉浦重剛であった。漱石は、杉浦校長のことを覚えている（『模倣と独立』）。それは、若き杉浦校長と当時の文部省の関係を示すエピソードでもある。

当時、「学校の中を下駄をはいて歩いてはいけない」という貼り紙が出された。生徒達は、みんな下駄をはいて校内を歩いていた。ある日、午後3時頃に、漱石が下駄をはいて歩いていると、廊下を曲ったとたんに、杉浦校長とバッタリ出会った。漱石は驚いて、下駄を脱いで、それを握って逃げ出した。結局、捕まえられることもなく、叱られもせずすんだ。

30年近く経って、漱石が杉浦重剛と会う機会があり、このことを覚えているかと杉浦に問うたことがあった。そしたら、

杉浦「それは逆だ。私は下駄をはいて学校を歩くことは大賛成である。はいてはならんという貼出しが出たのは、あれは文部省が悪い。とかく文部省はやかましい事を言ってきたからだ。私はむしろ下駄論者だった」

漱石は驚いて、「杉浦先生が下駄論者だと仰おっしゃるのはどういう訳ですか」と聞いた。杉浦「そもそも下駄は歯が二本しかない。それでいくら学校の中を下駄で歩いたところで、床に印する足跡というものは二本の歯の底だけである。しかるに靴は、かかとから爪先まで足の裏一面が着くじゃないか。もしこれが両方とも同じ程度に汚すのであるならば、学校の床を汚す面積は靴の方が下駄より遥かに大きい。だから私は、下駄をはいてもよいと、しきりに主張した。しかし、文部省の当局は納得しない。それで、やむをえずああいふ貼出しをした」

漱石が思うに、当時の杉浦は28歳の若さだったので、暴論を吐いて文部省を困らせたのだろう。下駄の方がよいというわけではない。

漱石は次のように杉浦に言って、笑い合った。「それじゃ、あのとき、私は逃げる必要はなかったのですね。むしろ、大いにほめられてしかるべきだったのですね。惜しい事をした」と。

夏目漱石『模倣と独立』1913（大正2年）年、青空文庫。

落第 心機一転

1886年（明治19年）、19歳の金之助は腹膜炎にかかったため進級試験を受けられず、落第してしまう。ちょうど、大学予備門は第一高等中学と名前を変えた時期であり、その事務のゴタゴタもあった。この落第は、漱石の学生生活に大きな変化をもたらした。

僕は大きに考えたのである。学課の方はちっともできないし、教務係の人が追試験を受けさせてくれないのも、忙しいためであろうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立ったところで何事もできないから、まず人の信用を得なければならぬ。信用を得るにはどうしても勉強する必要がある。こう考えたので、自分から落第して再び二級を繰返すことにしたのである。

人間というものは考え直すと妙なもので、真面目になって勉強すれば、今まで少しもわらなかつたものも瞭然とわかるようになる。前にはできなかった数学なども非常にできるようになって・・・

こんなふうに、落第を機としていろんな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとってこの落第は非

常に薬になったように思われる。もしその時落第せず、ただごまかしてばかり通ってきたら、今ころはどんな者になっていたかもしれないと思う。

夏目漱石『落第』1906（明治39）年、青空文庫。

落第してみると誰も同じこと、さすがによい気持はせぬ。真面目に勉強し、学校に出ても真面目に教師のことを注意して聞くようにすれば、そうやたらに苦しまなくとも、普通ならやってゆかれることと思う。

夏目漱石『私の経過した学生時代』1909（明治42）年、青空文庫。

落第後は心機一転して勉強し、進級した。

最初の教師体験

このころ、金之助は、江東義塾という私塾の教師のバイトを始めた。1日2時間教えて月給5円だった。これは、その後20年に及ぶ教員という職業の最初であった。しかも、漱石はこの塾の寄宿舎に住むようになった。しかし、急性トラホームにかかったため、塾を辞めて自宅に戻った。

落第後心機一転して勉強したこともあって、その後、漱石は一高では卒業まで主席を続けたという。ガキの金之助が大人の漱石になるのはこの頃からである。

21歳で、第一高等中学校（もとの大学予備門）の予科を卒業し、本科に入学した。英文学を専攻することを決意した。

しかし、「A：小説家としての漱石」と「B：英文学者・教師としての漱石」の振り子でいうと、ここであまりにBの学者・教師側に触れすぎた。あまりに模範生となりすぎてしまい、Aの小説家としての自由な漱石は抑圧されてしまった。このような抑圧が大きくなりすぎると、小説家漱石が顔を出して、教師としての生活が急につまらなく感じられてしまう。

正岡子規との出会い 益友・漱石



1889（明治 22 年）1 月、漱石は、正岡子規と知り合った。同年齢のふたりは生涯の友となった。子規は漱石について、「余は始めて一益友を得たり。その喜知るべきなり」と書いている。「益友」とは、「交わってためになる友人」のことである。

子規は漱石の文学人生に底知れない影響を与えた。もし子規と出会わなかったら、小説家としての漱石は存在しなかったかもしれない。以下、これについて述べたい。

以下の立論では、江藤（1970）を参考にした。

子規もカンニングで大学予備門に入学

正岡子規（1867～1902 年）は、愛媛県の士族に生まれ、自由民権運動に共鳴して政治家になろうとして、松山中学を中退して上京した。1884（明治 17）年、大学予備門に入学した。

大学予備門の入学試験では、漱石と同じようにカンニングをした。正岡子規『墨汁一滴』によると、子規は、共立学校という私塾で勉強していたが、その同級生たちと組んで、カンニングする約束をした。試験会場では、みんな片隅の机に並んで座っていた。とくに英語が難しく、「judicature」という単語の意味がわからなかった。そこで、打ち合わせどおり、となりの席の仲間に聞いたところ、「ほうかん」と言われた。これは「法官」のことだったが、子規は「幫間」だと思って答案に書いてしまった。あきらめていたが、結果が発表されると、子規は合格していて、「試験は屁のごとし」と思った。しかし、となりで教えてくれた同級生は不合格だったので、子規は「気の毒でたまらなかつた」という。

答案を見たほうが合格し、答案を見せた方が不合格となったのは、前述の夏目漱石のカンニング事件と同じである。当時、こうした入試の不正は当たり前のことだったようだ。

その頃、試験の際にズルをやる者はずいぶんたくさんあつた。ズルとは、試験の時に先生の眼をぬすんで手控を見たり、隣の人に聞いたりすることである。余も入学試験の時に始めてその味を知ってから後は、ズルをやる事を何とも思はなんだが、入学後二年目位にふと気がついて考へてみると、ズルといふことは人の力を借りて試験に応ずるのであるから、不正なうえにきわめて卑劣なことであると始めて感じた。それ以後は、いかなる場合にもズルはやらなかつた。

正岡子規『墨汁一滴』1901（明治 34）年、青空文庫。

子規も落第 心機一転

漱石と同じく、子規も落第を経験している。正岡子規『墨汁一滴』によると、もともと英語は苦手で、勉強もしなかつた。また、隈本有尚という教師が担当した幾何学は、英語で授業をおこなったという。そのため、1885（明治 18）年の学年試験で、幾何学の点数が足りず、落第した。「余が落第したのは、幾何学に落第したといふよりも、むしろ英語に落第したという方が適当であらう」という。落第後に、幾何学をもう一度学習したので、幾何学がわかるようになった。「数学は、試験さえなければ、理論を聞くのは面白い」と

書いている。翌年には進級した。落第後に反省してまじめになったというのも漱石と同じである。

ちなみに、子規は大学進学後も落第をして、友人の漱石は、子規の落第を阻止するために、大学の教員に頼んで歩いたというエピソードがある。

このように似た点の多かった漱石と子規だが、ふたりの本当の共通点は、そんな外面的なことだけではなかった。

結核によって夢を絶たれた子規

漱石と子規が知り合ったのは、1889（明治 22 年）1 月であるが、その年の 5 月に、子規は咯血して、肺結核と診断された。子規はのちに俳人・歌人として知られるようになったが、もともとは政治家志望で、海外に出ることも考えていた熱血漢であった。また、子規は野球に熱中したスポーツマンであった。上に示すように、野球のユニフォーム姿の写真が残っている。

ところが、結核によって政治家や洋行といった夢は断たれてしまった。当時は、結核にかかると、死を待つだけであり、すべての野心も理想も断念しなければならなかった。子規というペンネームも、結核からきている。つまり、子規とはホトトギスのことで、ホトトギスが血を吐くまで鳴くと言われるところからつけたものである。

漱石は、病気の子規に同情して、ふたりの親交が深まる。漱石の長兄の大助は結核で早死にしていたし、次兄の栄之助も結核を患っており、結核の恐ろしさを知っていた。

子規の『七草集』 はじめての漱石

ふたりを結びつけたのは「漢詩」である。

結核によって人生が制限されていく中、子規は文学にのめり込んでいく。1888（明治 21）年から、子規は『七草集』（しちそうしゅう）という和漢詩文集を作って、友人に回覧した。

漱石は、子規の漢詩を読んで、ライバル心に火がついた。漱石も漢詩には自信があったが、子規の漢詩をみて、「子規の方が上だ。負けた」と思った。そこで、漱石は、子規に対抗するため、『七草集』の評文に、自作の漢詩を書いた。これによって漱石の文学熱に火がついた。というより、「空白の 2 年間」以来、漱石の心にくすぶっていた文学熱が呼び覚まされた。ライバル心から、子規に向けて、「おまえの文学はなっていない。小説には思想が必要だ。もっと本を読め」と残酷な檄文を送ったりしている。子規の残された時間には、本を読む暇はないのに。

しかも、この『七草集』への評文において、彼は初めて「漱石」という号を使ったのである。つまり、「漱石」の文学人生は、文字通りここから始まることになる。江藤（1970）によると、「漱石」という号は、子規が使っていた 5 つの号のひとつという。この点も、子規が作家漱石の誕生にかかわっていたことを象徴的に示している。

漱石の『木屑録』

漱石は子規によって文学熱が呼び覚まされた。漱石は、1889（明治 22）年の夏休みに、大学予備門の友人 4 人と房総旅行をした。その時の紀行文を漢文で書き、『木屑録』（ぼくせつろく）としてまとめた。これの子規に見せたところ、子規から高く評価された。子規は、漱石の漢詩を読んで驚歎した。そこには「唐調」と呼べるような調子があり、精にして雅であり、支那の古文でも読むような風趣があるとほめた。当時をふりかえって、漱石はこのように書いている。

僕が房州に行った時の紀行文を漢文で書いて其中に下らない詩などを入れて置いた、それを見せた事がある。ところが大将頼みもしないのに跋を書いてよこした。何でも其中に、英書を読む者は漢籍ができず、漢籍のできるものは英書は読めん、我兄の如きは千万人中の一人なりとか何とか書いておった。ところがその大将の漢文たるやはなはだまずいもので、新聞の論説の仮名を抜いたようなものであった。けれども詩になると彼は僕よりも沢山たくさん作っており、平仄もたくさん知っている。僕のは整わんが、彼のは整っている。漢文は僕の方に自信があったが、詩は彼の方がうまかった。・・・彼は僕などより早熟で、いやに哲学などを振りまわすものだから、僕などは恐れをなしていた。

夏目漱石『正岡子規』1908（明治 41）年、青空文庫。

英語ができるは漢学ができないものであり、漢学に長じる人は英語ができないものだ。ただひとり、漱石だけは、両方に長じている。漱石は千万人に一人の天才だ、といった調子である。千万人に一人の天才とおだてられれば、誰だって舞い上がる。

自分の漢詩や文学趣味をきちんと理解して、評価してくれる友人がいたのである。

これと対照的なのは、漱石といっしょに房総旅行をした同級生である。彼らは文学など理解できない。

4 人の同級生の中で、文学趣味があるのは金之助ただひとりだけで、彼が、「こんなにのんびりしては時間が無駄だな。ちと本でも持って来ればよかった」とぼやくと、仲間たちは、「こいつは遊びに来たくせに勉強がしたいといっている。変わったやつだな」とひやかした。金之助は俗人は度しがたしという顔付で超然としていた。

約一ヶ月房州に滞在しているあいだ、金之助は友人たちが将棋をさしたり花札をとったりしているのを尻目にかけて、ひとり漢詩を苦吟した。

江藤淳『漱石とその時代 第一部』新潮社、1970。

当時のエリート学生たちの感覚に対する漱石の違和感があらわれている。後年、漱石が東京帝国大学講師をやめた理由が、このエピソードからも感じられる。

こうしたエリートたちの間で、子規だけが漱石の漢詩を高く評価してくれたのである。ふたりは文学に対する根本的な志向を共有することができた。それまで、漱石は、文学に対する志向を持ちつつも、英文学・英語という学者・教師としての職業人生を選びつつあった。文学に対する志向は抑圧してきた。しかし、子規がその抑圧を解いた。

漱石の文学的才能を開花させた漢詩

「漢詩」であったことがポイントである。漱石の心を解放したのは「漢詩」だからである。漱石にとって、漢詩は文学の原点である。これはいろいろなところで漱石が言っていることである。漱石は、一時は英語から逃れ、二松学舎に通ってまで漢文を勉強しようとした。そして、模索の「空白の2年」をへて、成立学舎で英語に打ち込むために、すべての漢籍を売り払った。漢文学への関心を一時抑圧したのである。

漱石の文学人生は、漢文学と英文学の間を揺れ動く。漢文学は実感であり、英文学は理念である。子規の『七草集』の漢詩をみて、自分よりうまい漢詩を書く友によって、ライバル意識に火がついた。漢詩を創作する心的システムが作動し始める。忘れていた漢詩の面白さが蘇る。この充実感を思い出したに違いない。さらには『木屑録』の漢詩が子規から大いにほめられた。こうした過程によって、漱石の漢詩の才能が開花した。『木屑録』という小冊子は、漱石の文学人生の中でも大きな位置を占めていると言える。

その後、帝国大学に進んだふたりは関西旅行をした。また、漱石は、子規の実家のある松山に旅行し、高浜虚子と出会うなど、文学に浸った。

人生構造が共鳴したふたり

漱石の人生にとって、子規との出会いは大きな意味を持っている。単に同じ趣味の友達ができただけというのではない。同じ人生構造を持つ2人が出会って、互いに自信を深めたということだ。

漱石の職業アイデンティティの模索は、下の図のようなプロセスをへた。(1)好きな漢文学を職業としたいと思ったが、兄大助に「文学は職業にゃならない、アコンプリッジメント(道楽)に過ぎない」と反対された。こうして、(2)医師・建築家をめざし、さらには(3)英文学という文明開化に役に立つ学者・教師をめざした。しかし、文学を捨てることができず、葛藤が強まり、ついには学者・教師を捨てて、(1)小説家となった。

夏目漱石の人生構造

	A：アコンプリッジメント (世の役立たないもの)	B：世の中に欠くべからざる仕事
文学領域	(1) 漢文学や小説	(3) 英語や英文学
他領域		(2) 医学や建築学

子規も、漱石と似たようなプロセスを辿って、文学に辿り着いた。それを下図に示す。

正岡子規の人生構造

	A：アコンプリッジメント (世の役立たないもの)	B：世の中に欠くべからざる仕事
文学領域	(1) 文学(俳句・短歌)	(3) 哲学
他領域		(2) 政治家

子規はもともと(1)文学が好きだったが、しかし、文学は士族である自分が一生を賭けるような仕事ではないと思っていた。士族であるからには、国事にかかわる政治や法律を学ばなければならない。こうして(2)政治家をめざした。これは、漱石の兄大助の「文学は職業にゃならない」と同じことである。

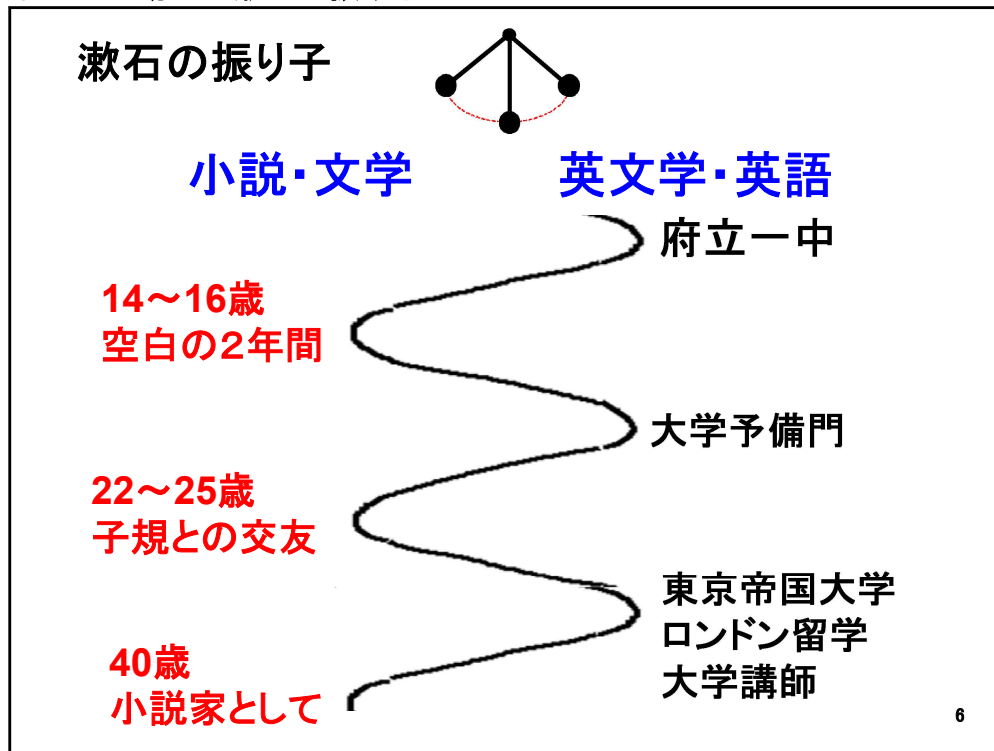
子規は、大学予備門に入り、(3)哲学に出会う。「哲学」とはスペンサーの進化論である。これは、士族の自分が一生を賭けるに足るものであり、政治家になるのと同じ価値がある。こう考えた子規は、政治家志望から哲学志望に変えたのである。そして、帝国大学文科大学の哲学科に入学した。

しかし、大学生になると、哲学にも関心を失った。「ブツセ先生の哲学総論であつたが、余にはその哲学が少しもわからない。哲学といふものは、こんなにわからぬものなら、余は哲学なんかやりたくないと思ふた(正岡子規『墨汁一滴』)。

そして、結核によって野心や理想を断念しなければならなくなり、(1) 文学の道に進んだ。影響を受けたのは、坪内逍遙の『当世書生気質』に代表される新文学であった。こうして翌年には、哲学科から国文科に転科した。ここから子規は、俳句や短歌といった「文学」に進んでいくことになる。もし結核にかからなかったならば、子規は政治家か実業家になっていたかもしれず、漱石と深く関わることはなかっただろう。さらには、漱石がのちに小説家としてたつこともなかったかもしれない。

子規と漱石の人生は同じ構造をしている。ふたりとも文学を仕事にしようと始めは思ったが、周囲から容れられず、実学をめざすことになる。しかし、文学に対する志向を捨てきれず、文学に戻って一生を終えた。2人が共鳴したのは当然である。

ふたたび動いた漱石の振り子



漱石の人生には「振り子」があり、右に振れている間は、英文学者・教育者としての規則正しい地味な生活が続く。しかし、時に左に振れると「文学」にのめりこみ、学者・教育者としての人生を否定してしまう。

振り子が左に振れた第1回目は、14～16歳の「空白の2年間」である。この時に、初めて漢文学をしたいと自覚した。英語の勉強をあきらめて府立一中を退学し、二松学舎で漢学を勉強することにした。

そのうちに、振り子は右に揺れて、同じ文学である英文学をしたいと思うようになり、成立学舎で英語を勉強し、大学予備門に合格できた。漱石は、漢籍をすべて売り払って、漢文学から英文学に志望を変えた。それは、同時に、「道楽としての文学」から、「世の中に欠くべからざる仕事」、つまり学者・教育者への転向でもあった。そして、大学予備門で首席を続け、エリートコースを進んだ。それは文学への志向を抑圧することであった。

22歳～25歳の漱石の子規との出会いは、振り子が左に振れた第2回目であった。漢詩について子規とやりとりすることで、漱石の文学熱を呼び覚ますことになった。『木屑録』をまとめ、「漱石」という雅号を決めた。

振り子はまた右に揺れて、帝国大学のエリートコースを進み、松山中学・第五高等学校の教師となり、学者・教師の道を進んだ。しかし、振り子が右に振れた時は、漱石は、学者・教育者としての生活がつまらなくなり、抑うつ状態に陥ってしまう。

漱石の振り子が左に振れた第3回目は東京帝国大学講師をやめて、小説家として創作に専念した時である。

こう考えると、子規との出会いは、漱石のその後の人生に大きく食い込んだことになる。子規が漱石の人生をすぐに変えたというわけではないが、漱石の文学熱を呼び覚まし、内面の力動を変化させ、それが小説家漱石の誕生を促した。もし子規と出会っていなかったら、漱石は、文学に目覚めることもなかっただろう。極端に言えば、のちに漱石が小説家になるということもなかったかもしれない。その場合、夏目金之助は、英文学者・東京帝国大学教授としての人生を全うしただけであろう。

正岡子規は25歳で大学を中退して新聞社に勤め、2人はしばらく別の道を歩くことになる。34歳で子規は結核のため亡くなった。その時、漱石はロンドンに留学中で、葬式に出ることもできなかった。

1-7-5. 独自の発展と本郷移転 そして予備門が残った

予備門の普通学校化

予備門となってからは、この学校は独自の発展をとげた。

①和漢の科目

そのひとつは、和漢の科目を加えたことである。それまで英語や洋学に偏りすぎていたことを反省し、1879年に、日本語の作文の科目を加えた。

②修身学

また、1881年には修身学を加え、知育偏重を改め、徳育にも配慮した。

③日本歴史

さらに、1882年には、歴史の中に日本歴史の科目を加えた。

④体育

もうひとつは、体操科目が加わったことである。文部省は1878年に体育振興のために「体操伝習所」を作り、体育の教員を養成しようとした。伝習所は一橋に作られた。前述の1883年の地図で東京外国語学校の北側に「体操練習場」という場所があるが、これである。予備門は、学生の健康を保つために、この体操伝習所に頼んで学生の運動をおこなわせた。いわば体育授業の外注である。これは、学校教育に体操科を加えた最も早い試みのひとつといえる。1883年には、東大3学部と予備門合同の運動会が運動場で行われた。指導したのは、外国人教師ストレンジ（後述）であった。

（現在の東京大学教養学部で体育の教員が多いのは、この時代からの伝統のようである）

当時は、大学というのは東京大学以外なかったのので、この大学予備門は、9年間、日本で唯一の進化をとげたことになる。

以上のように、予備門は、単なる英語を勉強するだけの学校ではなくなり、普通教育の学校へと変わっていった。こうした普通学校化の動きは、杉浦重剛が予備門長をつとめた時期ともかさなり、こうした自身から杉浦の東京大学からの独立の建白書（後述）が生まれてくるのである。

こうした予備門の動きは、当時の明治政府の方針転換とも合っている。1881年（明治14年）ころから、朝鮮半島進出や日清戦争を前にして、明治政府の教育政策は、それまでの洋学中心主義からふたたび転換した。つまり開明主義から儒教主義へ、知育中心から徳育重視へと変わりつつあった。小学校・中学校では修身科が重視された。

東京大学の本郷移転 そして予備門が残った

東京大学は本郷キャンパスへの移動を決めた。そして1884年（明治17年）には、法学部と文学部が夏休みを利用して本郷に移った。翌1885年夏には、理学部が移った。

こうして一橋キャンパスには、予備門だけが残った。以後、1889年まで、「一橋」といえば、東京大学予備門（または第一高等中学校）のことをさすようになったのである。



1-8. 第一高等学校

1886年(明治19年)、東京大学予備門は、東京大学から独立して「第一高等学校」となった。1889年に向丘キャンパスへ移転するまで、8年間ここにいた。

1-8-1. なぜ予備門は高等学校になったか？ ①杉浦重剛の構想

東京大学予備門が第一高等学校となる過程には、2つの段階があった。第1段階は、杉浦重剛による建白書であり、第2段階は森有礼による「学校令」である。杉浦構想と森構想という2つが組み合わさって、高等学校ができたのである。

杉浦予備門長の3年間

杉浦重剛が予備門長を任せられたのは実は27歳の時であった。彼はイギリスに留学して帰国して文部省につとめていた。杉浦の写真を下に示すが、これは晩年の白ヒゲのじいさんになってからのものであって、当時の杉浦は、27歳の血気盛んな若者であることに注意いただきたい。明治維新とはこういうことである。

杉浦の予備門長時代(1882年2月～1885年12月)は予備門9年の歴史のなかでも最も充実した時期であった。彼は、在任中、7ヶ条からなる生徒心得を作った。

- 第一 智徳を淬励し、立身報告の基を建つべきこと
- 第二 衣食起居を慎み、身体の健全を計るべきこと
- 第三 信義を重んじ、志操を固くし、言行一致を期すべきこと
- 第四 修学の序を履み、切間近思を務むべきこと
- 第五 校則を遵守し、師長に恭順すべきこと
- 第六 校舎の整備を旨とし、粗暴の挙動あるまじきこと
- 第七 校外にある時といえども、生徒たる体面を汚す所為あるまじきこと

これらは明らかに西欧的なモラルではなく、伝統的・武士的なモラルであり、杉浦の「日本主義」が貫いている。単なる語学的訓練ではなく、伝統主義的な教養道徳をエリートに求めようとする。

杉浦の思想は、のちの一高に大きな影響を与えた。一高の日本主義の伝統は、杉浦重剛・森有礼・木村広次の3人の思想にもとづいている(後述)。

しかし、このような思想は、当時の開成学校(東京大学)や英語学校の英米中心主義の中ではとうてい理解されなかっただろう。彼はこのような思想を実現できる学校を作ろうとして、予備門を東京大学から独立させようとした。

杉浦重剛の建白書

杉浦予備門長は、1885年3月、文部省に建白書を出した。予備門を東京大学から独立させて、予備教育だけを行う学校を作れというものである。彼の主張は以下の5点である。

①東京大学に付属していた予備門を独立させる

予備門が今、東京大学の付属機関となっているのは、設立時の都合による暫定的なものでしかない。予備門は、東京大学が勝手に作った変則的な機関であり、学校制度上の法的な裏づけがない。今の予備門は、東京大学が人材を独占するような形となってしまうので、他の高等教育機関に進学できない。そこで、東京大学から独立させて、東京大学以外の高等教育機関にも人材を供給するようにすべきである。

②中学校でも大学でもない予備教育を行う学校を作る

これまでの中等教育(尋常中学校)はレベルが低すぎて、これを卒業しても、高等教育(大学)についていけない。そのために予備門や予科という教育機関が必要となったのである。だから学校制度上の法的な裏づけがない。明治政府の「教育令」には、中学校と大学はあっても、予備門や予科という学校はない。つまり、現代の進学予備校のようなもので、正式の学校ではないのである。そこで、正式に予備教育の学校をつくり、きちんと学校制度の中に位置づけるべきである。

③新学校の名前は、予備門ではなく、「東京中学校」ないし「東京普通学校」とする

今の予備門は、すでに単なる英語学校や予備校ではなくなり、前述のように、修身学などの徳育や体育をも重視して、「普通教育の学校」となっている。ほとんど「模範中学校」といってもよいくらいである。だから、新しい学校の名前は、予備門とか予科学校ではなく、「東京普通学校」ないし「東京中学校」がふさわしい。予備門という発想ではなく、新しい学校を作ると考えるべきである。

なお、「東京中学校」という名前は、「大阪中学校」(のちの第三高等学校)を意識したもので、このころから一高と三高のライバル関係はできつつあったようである。

④地方の中学校卒業生を大学へ入れるようにする

今の予備門は、東京大学が人材を独占するような形となってしまうので、他の中等学校から東京大学に進学することができない。予備門は、東京大学の付属機関なので、地方の中学校のことなどは眼中にない。しかし、杉浦は、これからは、地方の中学校卒業生を、高等教育機関に入れる必要があると考えた。東

京以外の地方からの人材を集めなければならない。

⑤東京大学以外の官立専門学校の予科を引き受ける

下の図に示すように、予備門は、1887年発足当時は、東京大学の法・理・文3学部だけの予科コースとして出発した。一方、東京大学の医学部は、独自の「予科」コースを持っていた。しかし、東京大学は4学部の統合体なので、予科も統合したほうが効率的なので、1882年、杉浦予備門長は、4学部すべての予科教育を予備門がおこなうことにしたのである。はじめは、法理文3学部の予備門を「本鬘（ほんこう）」、医学部の予備門を「分鬘（ぶんこう）」と呼んで区別したが、1884年にはこの区別を廃止した。

これで東京大学の予科は統合されたが、図に示すように、その他に、工部省の工部大学校、司法省の東京法学校、内務省の駒場農学校などの高等専門学校があり、それぞれ予科コースを持っていた。また、東京外国語学校のフランス語科とドイツ語科も予科として機能していた。これらの文部省以外の学校の予科や、東京外国語学校がバラバラに運営されているのは効率的でない。

そこで、これらの予科と予備門とを合わせて、大きなひとつの予科学校を作って集中させればよい。そうすれば、予科の教育水準も上がるだろうし、何よりムダもなくしてお金を節約できる。

ただし、今の予備門が、すぐに他の高等専門学校の予科を引き受けるのは難しいけれども、近いうちにこれらの学校は「帝国大学」に統一されて文部省の管轄になる動きもあるので、今から準備しておいたほうがよい。

予備門が東京大学から独立

文部省はこのうち⑤に飛びついた。当時は「帝国大学」の構想が進んでいた（後述）、それらの予科をまとめればお金を節約できるという発想は願ってもないことだった。こうして文部省は、①の予備門の独立を認めた。1885年（明治18年）に、予備門は東京大学から独立した。東京大学付属の地位から、文部省の直轄へと戻った。こうして、東京大学4学部だけでなく工部大学校・東京法学校・駒場農学校の予科をすべて予備門が引き受けることになった。

杉浦はなぜ予備門長をやめたか

予備門が東京大学から独立したのは、一見すると、杉浦の主張が通ったように見える。

ところが、杉浦は真に望んだのは、⑤ではなく③である。新しい発想で新しい学校を作るために東京大学から独立したかった。当時30歳で、のちに日本主義の論客となる青年予備門長は、新しい学校を作る理想に燃えていたに違いない。勉強だけのつまらない予備校ではなくて、日本の人材を育てる普通学校を作りたい。

このようにみると、⑤は文部省を説得するための方便にしかすぎなかつたろう。

予備門が東京大学から独立したのは、主張が通ったように見えるが、しかし、③の学校の名称変更は認められなかつたし、④の地方中学校との接続も実現しなかつた。⑤のような、杉浦にとって瑣末のことが実現したにすぎない。文部省は、大切な③は認めず、①と⑤だけを認めて、杉浦の建白書を財政節約に利用しただけだったようだ。

杉浦と文部省の間の意見の隔たりは大きかつたのだろう。杉浦にしてみれば、フタをあげたら、新しい学校などはできず、⑤のような予科統合の話ばかりがふくれて、学生数ばかり増えて、仕事の負担が大きくなっただけだった。

杉浦は文部省とケンカして、1885年12月には、予備門長をやめて、退職してしまうのである。あるいは読みの甘さと計算違いに嫌気がさしてしまったかもしれない。その後予備門は学生数が倍増し、その責任をとらずにやめてしまったのは、敵前逃亡といわれても仕方がないかもしれない。

杉浦は理想の実現をめざして、1885年、新たに私立の「東京英語学校」をみずから創設した（これはこれまで述べてきた東京英語学校とは関係がなく、のちに日本中学校と改称された）。このことから杉浦の建白書の真意が読みとれる。

杉浦の③や⑤の構想が実現するのは、次の森有礼の高等中学校構想によってであった。

東京外国語学校独仏学科の移管：父親殺しのドラマ

1885年には、東京外国語学校からフランス語学科とドイツ語学科が予備門に移動した。

前述のように、東京外国語学校の英語科が東京英語学校として独立したが、それは大学の予科として機能し、英語の専門家の養成には結びつかなかつた。フランス語学科とドイツ語学科も同じであり、大学の予科としての機能が大きかつた。例えば、東京医学校（のちの東京大学医学部）は、ドイツ語による予科コースを、外国語学校のドイツ語科に委託した時期もあつたほどである。つまり、東京外国語学校のフランス語学科とドイツ語学科は予科としての機能が強く、フランス語とドイツ語の専門家の養成には結びつかなかつた。

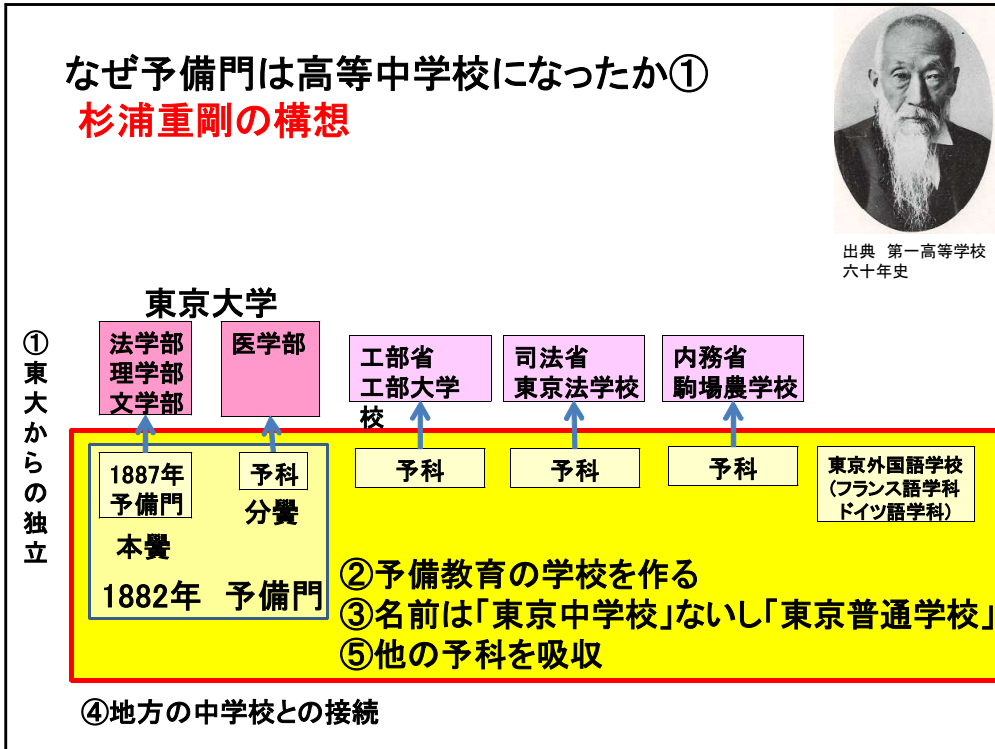
このため政府は、東京外国語学校のフランス語学科とドイツ語学科を、東京大学予備門に吸収した。これにより、学生175名（外国語学校の学生の66%）と教員15名が移った（『東京外国語学校史』）。予備門は、英・仏・独の三カ国語の基礎を固めることできた。

（現在の東京大学教養学部ではフランス語とドイツ語の教員が多いが、これは予備門時代からの伝統なのだろう）

しかし、東京外国語学校は、もともとあつた5学科のうち3つを予備門に取られて、骨抜きになつてしま

った。こうして東京外国語学校は東京商業学校に吸収されて、閉鎖を余儀なくされる。

前述のように、父親である東京外国語学校から、東京英語学校（のちの予備門）が生まれたわけであるが、父と子の間に熾烈な戦いがあったのである。それによって東京外国語学校をつぶしたのだから、ある意味では、東京英語学校は「父親殺し」のドラマを演じたといえるだろう。



1-8-2. なぜ予備門は高等中学校になったか？ ②森有礼による学校令

第2段階は、森有礼の「学校令」である。杉浦重剛は退職してしまったが、その考え方を受けついでのが文部大臣 森有礼である。

森有礼は、図に示すような初等教育、中等教育、高等教育という3つの段階を考え、1886年（明治19年）、それぞれ「小学校令」、「中学校令」、「帝国大学令」という3つを出した。

小学校は小学校（4年）と高等小学校（2年）に分け、中学校は尋常中学校（5年）と高等中学校（2年）に分けた。これに帝国大学（3年）を合わせて、16年のすっきりした制度ができあがった。森有礼は、それまで確立されていなかった中学校制度をきちんと整備することをめざしたのだった。

中学校について、「尋常中学校」は1府県に1校作り、その費用は各府県が支出した。

一方、「高等中学校」は、全国に5つの学区に分けて、計5校作り、その費用は国と府県の両方が支出した（のちにすべてを国が支出するようになった）。

森が杉浦の構想を実現した

第一高等中学校について、森有礼は、新しい学校を作るのではなく、東京大学予備門を改造することにした。

杉浦が東京大学と予備門についてしたローカルな議論を、森の構想は全国レベルに拡大したものである。

「高等中学校」とは、杉浦の5つの主張をすべて実現したものである。

①東京大学に付属していた予備門を独立させる

これはすでに実現した。

②中学校でも大学でもない予備教育を行う学校を作る

それまでの法律には中学校と大学はあっても、予備門や予科はなかった。現代の進学予備校のようなものである。高等中学校は、そうした予備教育の学校を学校制度の中にきちんと位置づけたものである。それまでの予備門は、尋常中学校との接続などを考えずに、東京大学が勝手にトップダウンで作ったものであった。これに対して、高等中学校を予備教育の場とすることで、尋常中学校と大学はつながった。法的な整備ができた。小学校・尋常中学校・高等中学校・東京大学というボトムアップの積み上げによって、これらの諸学校がつながったのである。

③名前は、予備門ではなく、「東京中学校」ないし「東京普通学校」とする

高等中学校は、大学の予備学校という位置づけとともに、実はもうひとつ、完成した普通学校という位置づけも与えられた。高等中学校に医学部や法学部などの分科が作られた。高等中学校の卒業ルートは、帝国

大学への進学とともに、就職というルートもあった。いわばミニ帝国大学という位置づけもされた。これは、杉浦重剛の考え方を反映したものだ。杉浦の「東京中学校」ないし「東京普通学校」という名前が、「高等中学校」となった。

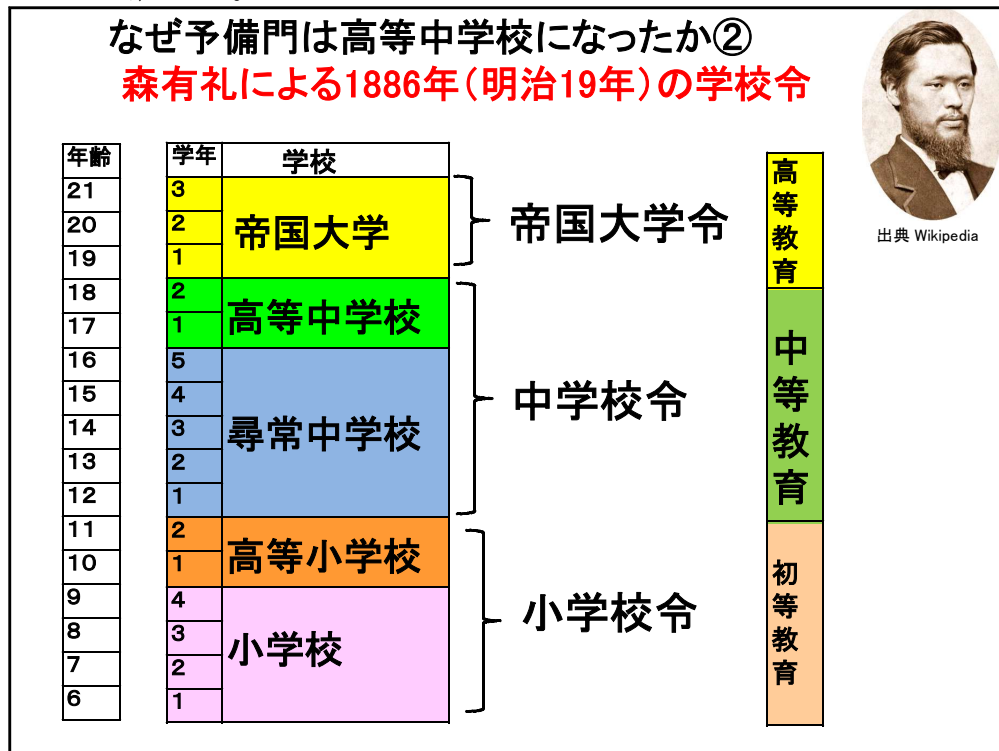
④地方の中学校卒業生を大学へ入れるようにする

高等中学校が全国に7つできたことで、どの地方においても、尋常中学校→高等中学校→帝国大学というルートが確保された。これによって日本全国から人材が集まるようになった。ある意味では、高等中学校は全国的な人材吸収網として機能するようになった。

⑤東京大学以外の官立専門学校の予科を引き受ける

これもすでに実現したし、官立専門学校以外のあらゆる高等機関の予科教育を高等中学校が引き受けることができるようになった。しかも、東京大学予備門だけでなく、全国の高等中学校がそれを引き受けることができるようになった。

このようにみると、森構想がいかに杉浦構想を引き継いでいるかがわかる。そして、杉浦構想が東京大学予備門だけのローカルな改革にすぎなかったに対し、森構想は、日本の学校全体を考えた制度改革であったことも理解できる。



1-8-3. 高等中学校は全国に7校作られた

高等中学校を学区内のどこに作るかについて、他の4つの学区では、激しい誘致合戦がおきたという。すったもんだの末に決まったのが、第1（東京）、第2（仙台）、第3（京都）、第4（金沢）、第5（熊本）のナンバースクールである。

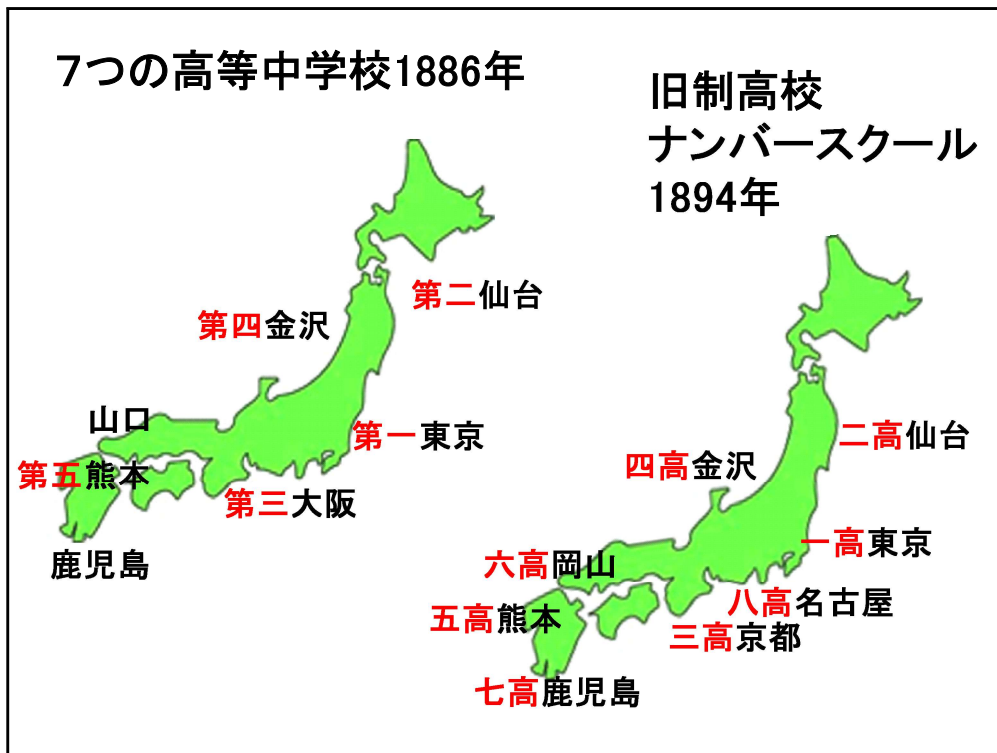
その他に、例外として、番号をつけない鹿児島と山口の2校も加わった。こうした例外ができたということは、誘致において政治力（薩摩藩と長州藩）がいかに強かったかを示すものであろう。藩閥政治はこれほど強かった。

成功した高等中学校

その後の歴史をみると、高等中学校が全国に作られたため、国民の中等教育と高等教育への関心を高めることになり、結果的には成功したと言われる。明治6年の外国語学校・英語学校の試みは失敗に終わったが、明治も20年たったこの改革は成功して、中等教育が日本に定着したのである。

そして、8年後の1893年には高等学校令が出されて、「高等中学校」は中等教育から切り離され、晴れて高等教育に戻り、「高等学校」となったのである。高等中学校は、「上級の中学校」でもあり、「大学の下」であり、ちょうど境界線であった。これを高等教育として位置づけたのが高等学校である。

1～5の高等中学校のナンバースクールは、そのまま高校のナンバースクールへと移行した。



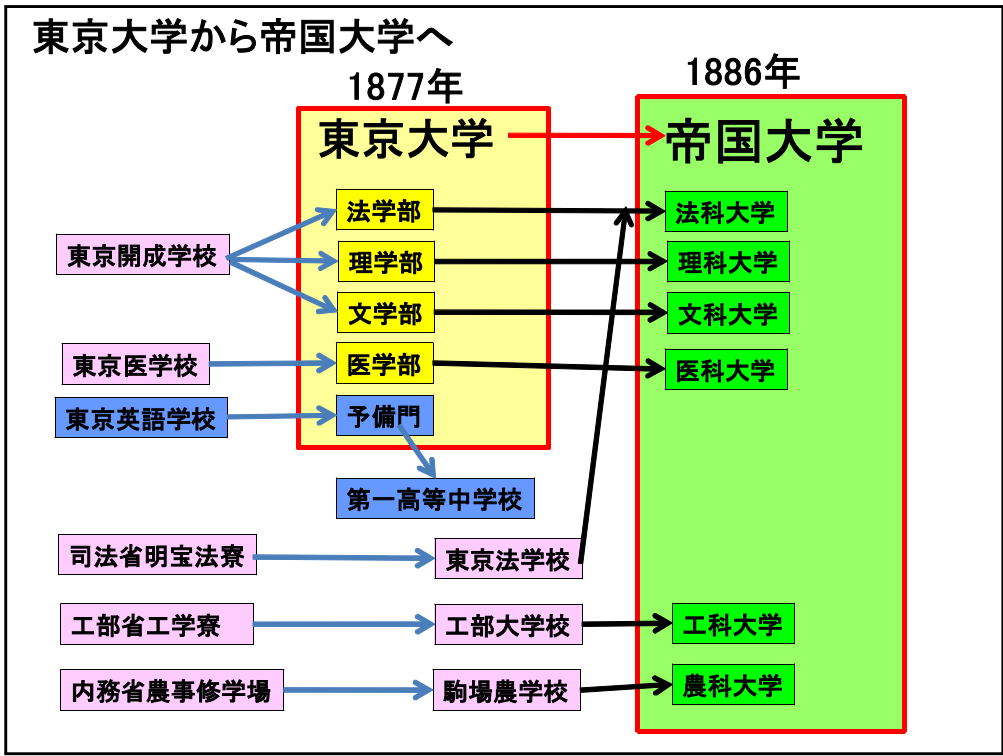
1-8-4. 東京大学から帝国大学へ

森有礼の学校令のひとつとして、1886年（明治19年）、「帝国大学令」が出され、帝国大学ができた。それまでの東京大学は4学部（法理文医）と予備門からなっていたが、さらに工部大学校と東京法学校を吸収合併した。その際に「学部」という名前を使わずに、「分科大学」という名前にした。こうして法・医・工・文・理の5つの「分科大学」からなる「帝国大学」を作ったのである。ここから日本の大学制度はやっと固まっていくことになる。のちに東京農学校を吸収して、農科大学を含めた6分科大学となる。

分科大学に合わせた5つの学科

新しくできた高等中学校は、5つの学科に分けられた。1号は法学、2号は医学、3号は工学、4号は文学、5号は理科である。これは帝国大学の5つの分科大学に合わせたものである。当時、日本には帝国大学はひとつしかなかったので、上の5つの学科構成は、帝国大学と第一高等中学校の結びつきを強めたことを示す。東京大学から独立したとはいえ、内的な結びつきはかえって強まったとも言える。

（余談だが、今の東大では、学部を呼ぶ順番は、法・医・工・文・理・農・経・教養・育・薬という順である。このうち法・医・工・文・理の序列は、1886年（明治19年）の帝国大学当時のものということになる。この序列は、一見すると各学部・分科大学の創設時期の順番のように見えるが、必ずしもそうではない。例えば、文学部と理学部は早くできていたのに4・5番であるし、工学部は後から入ってきたのに3番目に入っている。この序列がどのように作られたかは不明である。江戸時代の土農工商という序列とも矛盾しない）



1-8-5. 学生数の増加

予備門は4つの学部の子科だけだったのに、1885年に多くの学校の子科を引き受けたので、学生数は増えた。

下の図と表に示すように、1877年の予備門発足時と、いろいろな学校の子科を引き受けた1885年とを比べると、教員数で1.6倍、学生数で2.3倍となっている。

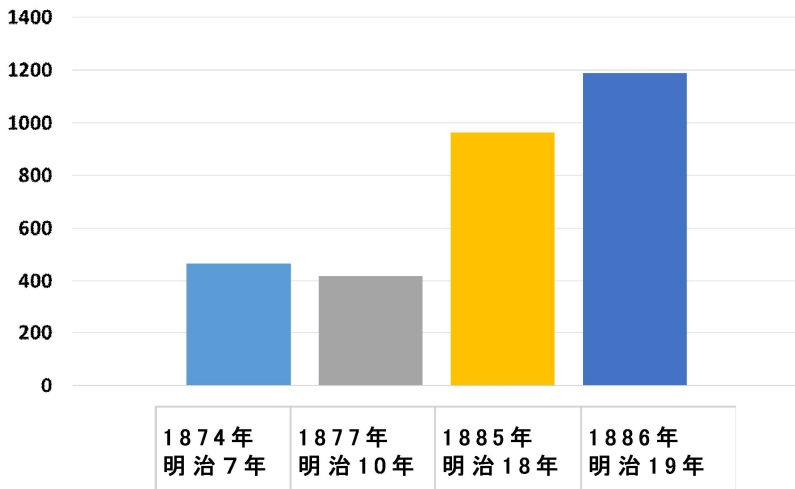
また、1877年の予備門発足時と、1886年の第一高等中学校発足時とを比べると、教員数で2.0倍、学生数で2.8倍にふくれあがっている。この間は11年しかないのである。

各段階の教員数と学生数の推移

年	学校の名称	教員数	学生数	『第一高等学校六十年史』出典
1874年 明治7年	東京英語学校 発足	33名 (日本人24、外国人9)	466名 (寄宿生84、通学生382)	14ページ
1877年 明治10年	予備門発足	33名 (専任18、大学との兼任15)	418名	31ページ
1885年 明治18年	予備門最後の 年	53名	964名	90ページ
1886年 明治19年	第一高等中 学校発足	65名	1189名 (本科413、予科776)	142ページ

学生数の増加 予備門から高等中学校へ

学生数



出典:『第一高等学校六十年史』

1-8-6. キャンパスと建物

さて、キャンパスについてみてみよう。第一高等中学校は、東京大学のキャンパスをそのまま使った。

下の写真は第一高等中学校の正門である。よく見ると、前述の東京開成学校の正門と同じである。こけしの頭のような2本の柱や、柱を跨ぐアーチ型の装飾、ガス灯も全く同じである。中には築山もみえるし、正面の建物も全く同じである。ヤドカリのように、予備門（第一高等中学校）は、東京大学のキャンパスの抜け殻をそのまま利用した。

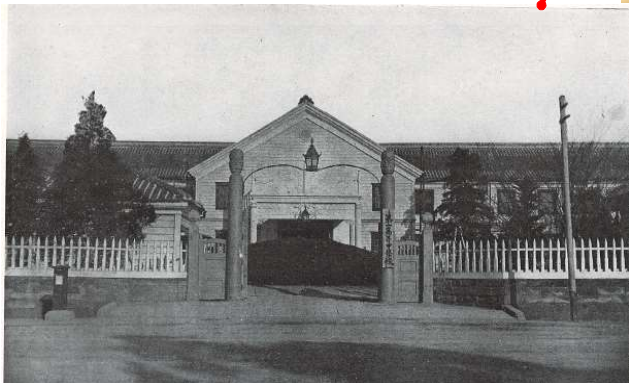
ただし、「開成学校」という表札は「第一高等中学校」と掛けかえられた。この看板は「東京開成学校」→「東京大学」→「東京大学予備門」→「第一高等中学校」と、4回掛けかえられたはずである。

細かくみると、正門の左側に郵便ポストのようなものがあるが、これは東京大学の時代にはなかったものである。

第一高等中学校



第一高等中学校の正門



出典 東京大学総合博物館
デジタルミュージアム

出典:『第一高等学校六十年史』

1-8-7. 1887年（明治20年）の一橋キャンパス ニコライ堂からの写真

第一高等中学校当時の写真は少ないが、1887年（明治20年）撮影のものがある。これは、お茶の水のニコライ堂の屋根から、360度を俯瞰した有名なパノラマ写真の一枚である。ここに当時の一橋キャンパスがはっきりと写っている。右下の地図に示すように、北東にあるニコライ堂から一橋キャンパスを見たものである。

真ん中にあるのが第一高等中学校である。

六角形の物理講義室の形がはっきり見える。その左右が前述のE字型の本館である。旧食堂は取り払われている。

その右側が広い運動場である。当時これだけ広い運動場を持つ学校はほとんどなかった。

その奥に三本の長い屋根が見えるが、これが寄宿舍である。前述の開成学校配置図における第一号～第三号寄宿舍であろう。

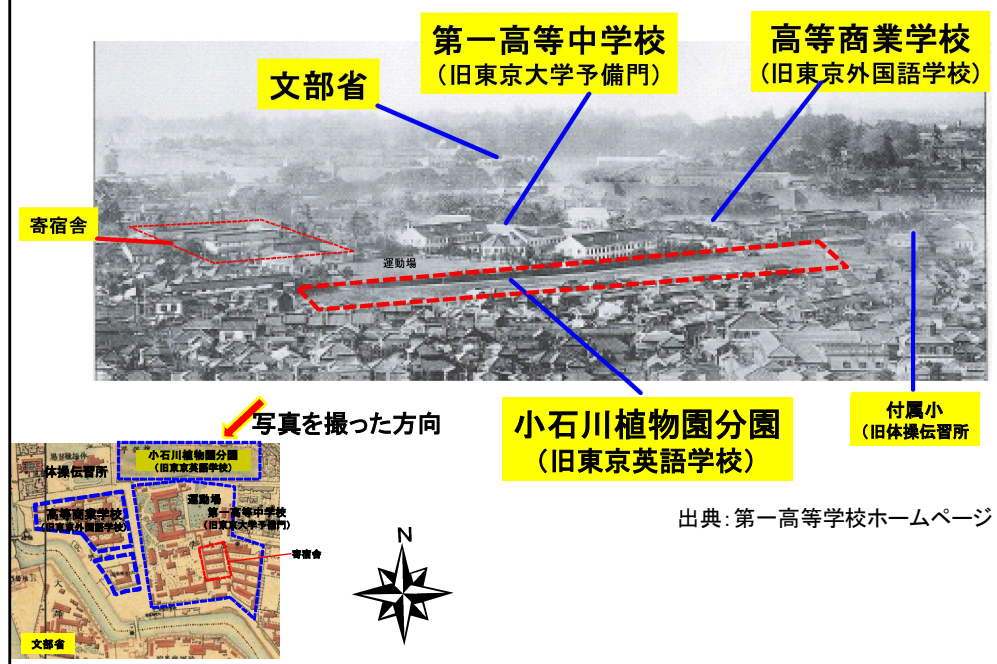
その前の細長い空地のようなものが小石川植物園分園であり、ここにかつて東京英語学校があったが取り壊されたのである。

右側にあるのが高等商業学校である。これが東京外国語学校を吸収した。後の一橋大学である。

また、「体操伝習所」だったところは「付属小学校」となっている。

左奥に見えるのは文部省である。文部省は、1877（明治10年）から1931年（昭和6年）までここにあった。

1887年(明治20年) 第一高等中学校の遠景



1-8-8. 校風の形成期

予備門長だった野村彦四郎がそのまま第一高等中学校の初代校長となった。野村は、のちに体操伝習所長や第五高等中学校長をつとめた。

第2代校長は古荘嘉門（ふるしょうかもん）である。古荘嘉門（1840～1915年）は、のちに衆議院議員や群馬県知事をつとめた。

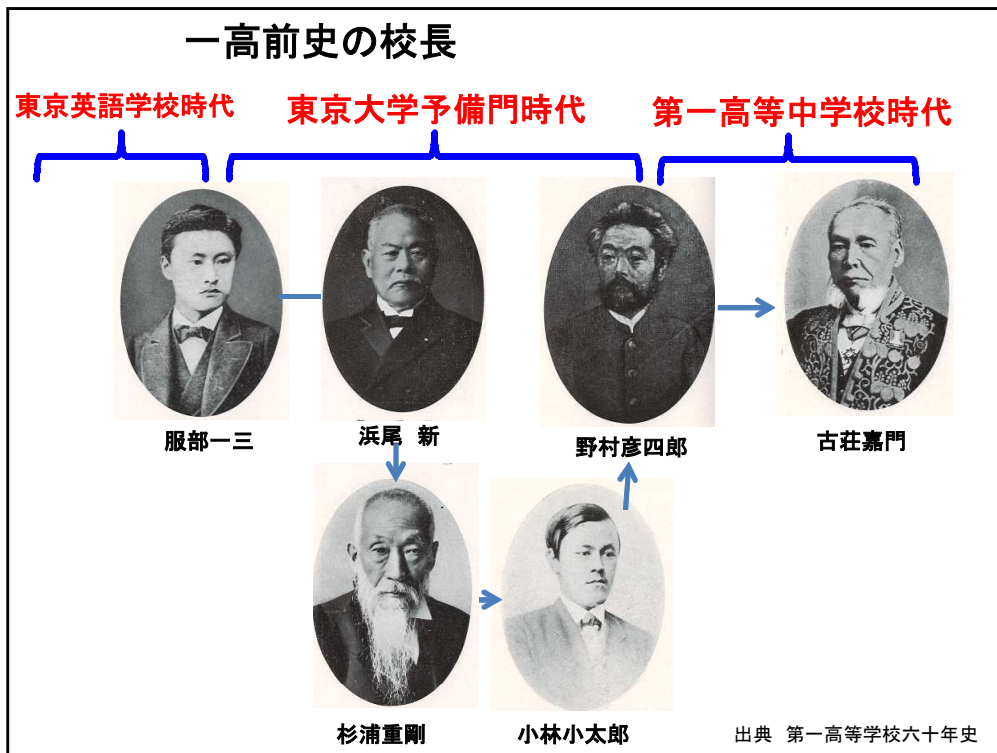
第一高等中学校校長

	氏名	校長在任	期間	校長退職後
1	野村彦四郎	1886年4月～1887年6月	1年	第五高等中学校長
2	古荘嘉門	1887年6月～1889年5月	2年	衆議院議員、群馬県知事

校風の形成期

第一高等中学校時代は、予備門時代の流れも吸収して、内部が充実し、独自の文化を創り出していった。『第一高等学校六十年史』は、「一高時代の制度は、高等中学校時代に確立された」と位置づけている。

また、『旧制高校物語』68頁は、高等中学校の時期を「校風の形成期」と呼んでいる。格下げされた雌伏の時代ではあったが、活躍の時代を準備した積極的な意義も大きかった。



1-8-9. 第一高等中学校生の人間像

金色夜叉 一高生はもてたのか？

第一高等中学校（ここでは一高と略す）の学生を主人公とするのが『金色夜叉』であり、この作品は一高論としても面白い。

作者の尾崎紅葉は、東京大学予備門から第一高等中学校に入り、帝国大学法科に進んだ。学生時代からの硯友社を作って文芸活動を続けた。

有名な熱海の「貫一お宮の碑」は、一高生の貫一がお宮を蹴り飛ばすシーンである。親の都合で金持ちに嫁ぐお宮が貫一を追いかけて許しを乞い、それを貫一が蹴り飛ばす。エリートである一高生が女の金権主義を拒否するといったカッコいいイメージである。

しかし、原文を読んでみると、全く逆である。お宮は、自分の美貌に自信があり、「学士風情」を夫にするよりは、美貌を生かして金持ちと結婚したほうがよいと思っている。お宮の価値のモノサシの上では、一高生よりも金持ちの方が上である。一高生は金持ちにはかなわない。

貫一は、一高に通う自分をエリートだと思っている、美貌のお宮を妻にするのが当然と思っている。一高の同級生から「あんな美しい妻をめとるのは幸せだ。もし貫一がお宮と結婚できなかったら第一高等中学校の名折れになる」と言われたことを報告して、お宮を白けさせる。

結局、お宮は金持ちと結婚し、貫一はふられてしまう。貫一は泣いて復縁を迫る。あんな金持ちの嫁になっても幸福にはなれない。自分のような一高生のエリートと結婚した方が幸せになれる、などとくどく。

お宮の気持ちが変わらないと知ると、一転して、今度は「宮、おのれ姦婦」「腹の腐った女」とののしり、お宮をけとばし、ケガをさせてしまう。有名なシーンは、実は貫一のめめしさが際立つシーンである。心理的には、すがりついているのは貫一のほうであり、蹴り飛ばしているのはお宮のほうなのである。

その後、貫一は、お宮への復讐のために一高をやめ、高利貸しになってしまう。一高のエリート人生などは、かくも簡単に棄てられるようなちっぽけなものである。

一高生の両極性

貫一の両極性は、当時の一高生の心をうまく表しているのかもしれない。

- ①女性に対する純情と拒否の両極端な感情。
- ②栄華の巷を低くみるエリート主義と、暴力的で野蛮なバンカラの併存。
- ③プライドの高さと、ふみにじられた時の怒りの強さ。

ちなみに、貫一は 25 歳である。当時の高等中学校生は今の大学院生くらいの年齢だった。また、貫一は自宅から通っており、当時の高等中学校は全寮制でなかったことがわかる。

『金色夜叉』



出典:熱海市ホームページ

金色夜叉

上
尾崎紅葉作



録 14-1
岩波文庫

1-8-10. 第一高等中学校の向丘移転

向丘キャンパス移転の約束のナゾ

1886年9月、文部大臣 森有礼は、第一高等中学校に対して、帝国大学のとなりの向丘キャンパスを与えることを約束した。1886年9月には、文部大臣森有礼の名前で「其校を本郷帝国大学隣地に建築す」という通達が出されている。

この文書には、いろいろと不思議な点がある。

- ①時期が早すぎる。予備門から高等中学校になるかならないかのうちに、第一高等中学校を移すという文書が出ていること。予備門は十分な広さのキャンパスを持っていて、とくに広いキャンパスを望んでいたわけではない。
- ②当時は農科大学が帝国大学に加わる話も出ていたはずで、農科大学も向丘キャンパスを狙っていたはずである(後述)。それなのに、第一高等中学校に向丘を与えたのはなぜなのだろうか。農科大学よりも第一高等中学校を優先させなければならない理由を森有礼は持っていたのではなかろうか。(第一高等中学校に向丘を取られたことで、のちに農科大学は大きな代償を払うことになるのである)
- ③この文書では、「帝国大学隣地」と表現しているが、なぜ「向丘」という地名を用いていないのだろうか。

「独立派」vs「東大残留派」?

以下は、根拠のない私の推測である。

予備門の中に、高等中学校への転換を拒否する人たちが多く、意見が割れていた。予備門を東京大学から独立させるといふ杉浦の「独立派」に対して、そのまま東京大学予備門に残るといふ「東大残留派」も強かったに違いない。杉浦の独立説は唐突すぎて、当時の予備門内では少数派ではなかったか。「東大残留派」にしてみれば、「杉浦は日本主義の理想から新しい学校を作ろうというが、それはあまりに唐突で強引だ。これまでの英米中心の開明的な教育からみると、いかにも偏っており、時代錯誤の古い思想だ。それに、今まで東京大学(高等教育)に属していたのに、急に中学校(中等教育)に格下げされるのはプライドが傷つく。われわれは教諭ではなく教授である。高等中学校になると、学生数が増えて、教育の負担が多くなり、教育の効果も低くなるという心配がある。このまま東京大学の予備門を続けるべきであって、高等中学校への転換は断固として拒否する」となるだろう。

杉浦の予備門長辞任はあまりに突然すぎるが、その理由は、文部省とのケンカというよりは、予備門内の意見対立に嫌気がさしてしまったからではなかろうか。

「東大残留派」の意見は強く、森有礼文部大臣や新しい予備門長は、彼らをなだめなければならなかったはずである。森有礼にしてみれば、今回の教育改革がうまくいくかどうかは、お膝元の第一高等中学校がうまくいくかにかかっている。何とか「東大残留派」の反対意見を封じ込めないと、教育改革全体が挫折する危険があった。今は農科大学よりも高等中学校を優先させなければならない。

1886年9月という高等中学校ができたばかりの段階でこの文書が出ていることは、森有礼と予備門との間で取引が成立し、東大の隣りに引っ越すことを条件として、高等中学校への移行を飲むことになったのではないだろうか。

そのために、「向丘」ではなく「帝国大学隣地」という言葉を使うことが重要だった私は推測する。中学に格下げはするものの、実質的には、「第一高等中学校と帝国大学は切っても切れない兄弟だ」と文部大臣が認めたわけである。「東大残留派」のプライドも守られ、安心しただろう。

そのほかにも、森文部大臣は、当時はいろいろな変更を認めている。高等中学校の教員の呼び方を「教諭」から「教授」にしており、また、高等中学校の財政について、国と地方の両方が負担するはずだったのをすべて国の負担とした。これらは高等中学校の待遇改善である。また前述のように、高等中学校を5つの学科（法・医・工・文・理）に分けて、帝国大学と第一高等中学校の結びつきを強めた。これらはすべて「東大残留派」への説得工作と考えられないこともない。

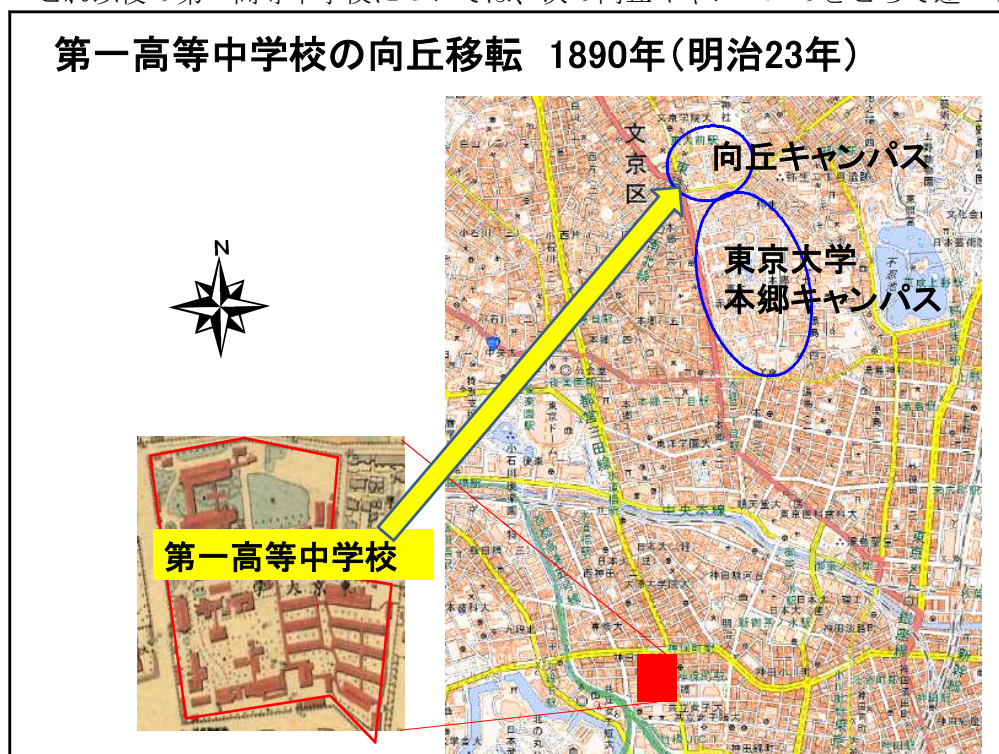
ここで私が向丘キャンパス移転の不自然さにこだわるのは、のちの駒場キャンパス移転と比べたいからである。一橋から向丘への移転はみんな喜んだのである。これに対して、向丘から駒場への移転はみんな反対したのである。私は前からこのことが不思議だったのだが、森有礼の通達文書の時期と文面を知って、そのナゾが解けた気がした。ポイントは東京大学との距離である。東大に愛されてそばへ近づくのはみんな喜び、東大から見捨てられて遠ざかるのはみんな反対するということである。東大に近づきたいと思う分だけ、東大からの見捨てられ不安が強い。

一高の歴史をみても、東京大学とのつながりを守る方向が多数派を占めるのであり、杉浦のような東京大学から独立を唱える人はつねに少数派である。杉浦は多数派から総スキャンを食らったのではなかろうか。戦後の教養学部時代にも同じ構図の議論はえんえんと続いた。専門基礎教育 vs 教養教育、教養部解体論 vs 教養部独立論……。予備門から高等中学校への流れは、一高の根底に流れる感情を表しているように思える。

そして第一高等中学校もいなくなった

この約束から3年後、1889年に、向丘キャンパスが完成し、第一高等中学校は移転した。こうして1862年の開成所以来27年続いた東京大学・一高の一橋キャンパスは幕を閉じることになった。

これ以後の第一高等中学校については、次の向丘キャンパスのところで述べる。



1-8-11. 今に残る開成学校・東京大学・一高の跡

現在のこの場所を歩いて、東京大学や一高の跡を探してみよう。

敷地の変遷

まず、開成学校・東京大学・第一高等中学校があった場所の歴史をまとめておこう。

この場所の住所は、当時は、神田錦町3丁目1番地である。のちに神田錦町3丁目13番地と呼ばれたが、現在は、神田錦町3丁目の一部となっている。

神田錦町3丁目1番地(現在の「神田錦町3丁目」の一部)の歴史

西暦	和暦		参照地図
1856 頃	安政 3	安中藩板倉氏の藩邸 (南側は、護持院原→三番明地)	1856 年
1873.8 ~ 1885	明治 6 ~ 18	開成学校→東京開成学校→東京大学	1876 年
1877 ~ 1889	明治 10 ~ 22	東京大学予備門→第一高等中学校	1883 年、1878 年
1889 ~ ?	明治 22 ~ ?	東京大学付属地	
1903 ~ 1913	明治 36 ~ 大 正 2	東京外国語学校の本校舎 (南側は学士会) (1913 火事で焼失)	1907 年
1913 ~ 1921	大正 2 ~ 10	東京外国語学校の仮校舎 (1921 麹町に移転)	
1928 ~	昭和 3 ~	学士会館ビル	
現在		学士会館ビル	現在地図

学士会館ビル

開成学校・東京大学の跡地には、現在、学士会館ビルがたっている(右下の写真)。

学士会とは、1886 年(明治 19 年)に作られた東京大学の同窓会であり、のちに旧帝国大学卒業生に枠を広げた。1907 年の地図に示されるように、この地に学士会としての敷地を持っていたようだ。1913(大正 2)年には、2 階建ての会館を作ったが、大火事によって焼失した。その再建準備も 1923 年の関東大震災にあって延期され、やっと 1928(昭和 3)年に、現在の学士会館ビルが作られた。このビルは、文化庁の登録有形文化財となっているが、結婚式場やホテル、レストランとしても使われている。

「東京大学発祥の地」碑

学士会館の南西の入口の脇に、「東京大学発祥の地」碑がある(左上の写真)。

その横に「わが国の大学発祥の地」の説明板がある(左下の写真)。そこには次のように書かれている。

我が国の大学発祥地 (東京大学発祥の地)

当学士会館の現在の所在地は 我が国の大学発祥地である。

すなわち、明治 10 年(1877)4 月 12 日に 神田錦町 3 丁目に在った東京開成学校と神田和泉町から本郷元富士町に移転していた東京医学校が合併し、東京大学が創立された。

創立当所は法学部・理学部・文学部・医学部の 4 学部を以て編成され、法学部・理学部・文学部の校舎は 神田錦町 3 丁目の当地に設けられていた。

明治 18 年(1885) 法学部には文学部中の政治学及び理財学科が移され法政学部と改称され、また理学部の一部を分割した工芸学部が置かれた。このようにして東京大学は徐々に充実され明治 18 年までに本郷への移転を完了した。

したがって、この地が我が国の大学発祥地すなわち東京大学発祥の地ということになる。

明治 19 年 3 月 東京大学は帝国大学と改称され、その時、それまで独立していた工部大学校と工芸学部が合併され工科大学となり、その後 東京農林学校が農科大学として加えられ、法・医・工・文・理・農の 6 分科大学と大学院よりなる総合大学が生まれ 帝国大学と名づけられた。

更に、明治 30 年(1897)には京都帝国大学の設立に伴い、東京帝国大学と改称された。

爾後 明治 40 年に東北帝国大学、明治 44 年に九州帝国大学、大正 7 年に北海道帝国大学、昭和 6 年に大阪帝国大学、昭和 14 年に名古屋帝国大学が設立された他、戦後なくなったが大正 13 年に 京城帝国大学、昭和 3 年に 台北帝国大学がそれぞれ設立された。

昭和 22 年(1947)に至って、右の 7 帝国大学はそれぞれ東京大学、京都大学、東北大学、九州大学、北海道大学、大阪大学、名古屋大学と呼称が変更された。

明治 19 年 7 月創立の学士会は以上の 9 大学の卒業生等を以て組織され、その事業の一つとして、当学士会館を建設し、その経営に当たっている。

平成 3 年(1991 年)11 月

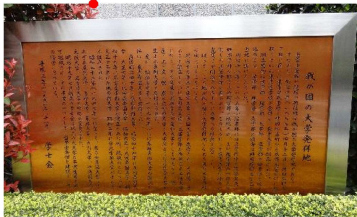
学士会

今に残る開成学校・東京大学の跡

「東京大学発祥の地」碑



「わが国の大学発祥地」



学士会館ビル



1-8-12. 開成学校・一高 同じアングルで昔と今を比べる

当時の姿をイメージしやすいように、昔と今の同じアングルの写真を比べてみよう。

左下の写真は、前述の開成学校の鳥瞰図（1873年当時）である。この校舎は、東京大学・予備門・第一高等中学校と代々使われた。

今、同じ場所には学士会館がたっており、背後は高層ビル群である。写真は、学士会館の屋上緑化工事のものである（東洋水研株式会社ホームページより引用）。地上からみるとよくわからないが、少し高いところから俯瞰すると、150年前の建物の配置が、それほど変わっていないことがわかって面白い。

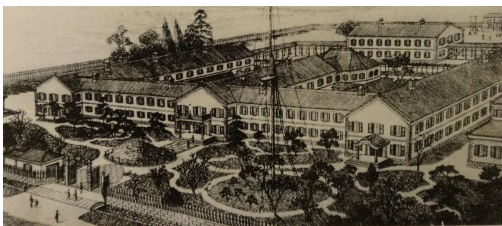
開成学校・一高 同じアングルで昔と今を比べる

1883年



写真の方向

1873年頃 開成学校(後の一高)



現在



写真の方向

現在 学士会館



はず向かいの学術総合センター11階より撮影

1-8-13. 新島襄の生誕地

開成学校は、安中藩板倉氏の藩邸跡に作られたが、この藩邸で、同志社大学の創立者新島襄が生まれた。学会館の南側の植え込みに、「新島襄先生 生誕地記念の碑」と「新島襄先生生誕之地」碑が立つ（左上の写真）。

そこから150メートルほど東に行くと、「錦三・七五三太公園」がある（左下の写真）。説明板には次のように書いてある（右下の写真）。新島襄の幼名は「新島七五三太（にいじま しめた）」という。彼の誕生日は旧暦の1月14日だが、その日は「しめ飾り」を外す日だった為「七五三太（しめた）」と名づけられたととう。あるいは、新島家にはすでに四人の娘がいて、七五三太は待望の男児だったため、祖父の新島弁治が「しめた！」と喜んだころから、「七五三太（しめた）」と名づけた、とも伝わっている。

近くには、再建された博報堂の旧本館がある。



1-8-14. 開成学校・一高 「日本野球発祥地」の碑

学会館の北側に「日本野球発祥地」の碑がある（左上の写真）。この地域で「東京英語学校・予備門・第一高等学校」という字が残るのは、この碑だけである。

日本における野球の始まりは、開成学校のアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンが生徒たちに野球の指導をしたことだという。このウィルソンが野球殿堂入りしたことを記念して、碑が建てられた。

脇には、高さ2.4メートルのボールを握る右手の像があって、目立っている。ボール上には世界地図が描かれており、日本と米国を縫い目によって結ぶことで野球の国際化をあらわしているという（左下の写真）。英語の説明板もある。説明板には次のようにある。

日本野球発祥の地

この地には、もと東京大学およびその前身の開成学校があった。1872(明治5)年学制施行当初、第一大学区第一番中学と呼ばれた同校で アメリカ人教師ホーレス・ウィルソン氏(1843 ~ 1927)が学課の傍ら 生徒達に野球を教えた。この野球は翌73年に新校舎とともに 立派な運動場が整備されると、本格的な試合ができるまでに成長した。これが「日本の野球の始まり」といわれている。76年初夏に京浜在住のアメリカ人チームと国際試合をした記録も残っている。

ウィルソン氏はアメリカ合衆国メイン州ゴースト出身、志願して南北戦争に従軍した後、71年9月にサンフランシスコで日本政府と契約し、来日、77年7月東京大学が発足した後に満期解約、帰国した。

同氏が教えた野球は、開成学校から 同校の予科だった東京英語学校(後に大学予備門、第一高等学校)その他の学校へ伝わり、やがて全国的に広まっていった。

2003年、同氏は野球伝来の功労者として野球殿堂入りした。

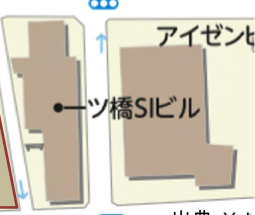
まさにこの地は「日本野球発祥の地」である。

2003年12月 (財)野球体育博物館

開成学校・一高 「日本野球発祥地」の碑



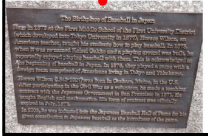
白山通り
学士会館



出典: Yahoo地図



日本と米国を縫い目で結ぶ



1-9. 東京外国語学校(その後)

東京外国語学校の初期の歴史とキャンパスについては前述のとおりである。この学校は岡倉天心や内村鑑三など多彩な人材を出したが、その後、不幸な歴史をたどることになる。前に出した歴史の流れ図を、もう一度出しておこう。

1-9-1. 東京外国語学校の不幸な歴史

前述のように、1887年には、東京外国語学校のフランス語科とドイツ語科が東京大学予備門に引き抜かれて、骨抜きになってしまう。

そして残った学科(ロシア語科、漢語科、朝鮮語科)も、高等商業学校に吸収されてしまう。こうして東京外国語学校は1887年に廃止となる。当時の外国語学校の学生たちは、士族出身者が過半数を占め、欧米との不平等条約のもとで日本の貿易が外国商人に独占されている現状にあきたらず、卒業後は公使や領事となって海外に雄飛しようという野心をもっており、たえず議論をしていた(『一橋大学百二十年史』27頁)。多くの学生は憤慨して学校を去った。その中には二葉亭四迷もいた。

10年のブランクをはさんで、1897年に高等商業学校から、ふたたび「附属外国語学校」が独立する。そして、2年後に東京外国語学校が復活した。1903年には、神田錦町三丁目13番地(開成学校・第一高等中学校跡地)に本校舎ができた。

こんな不幸な学校は見たことがない

この学校は、キャンパスについても不運な歴史がある。

独立してたてた新校舎だったが、1913年には、大火によって焼失してしまうのである。

長い仮住まいのあと、1921年に麹町区元衛町に本校舎を建てたが、その2年後の1923年には関東大震災がおこり、倒壊してしまう。

ふたたび長い仮住まいのあと、1944年に西ヶ原キャンパスに移転するが、翌年には空襲で焼失してしまう。

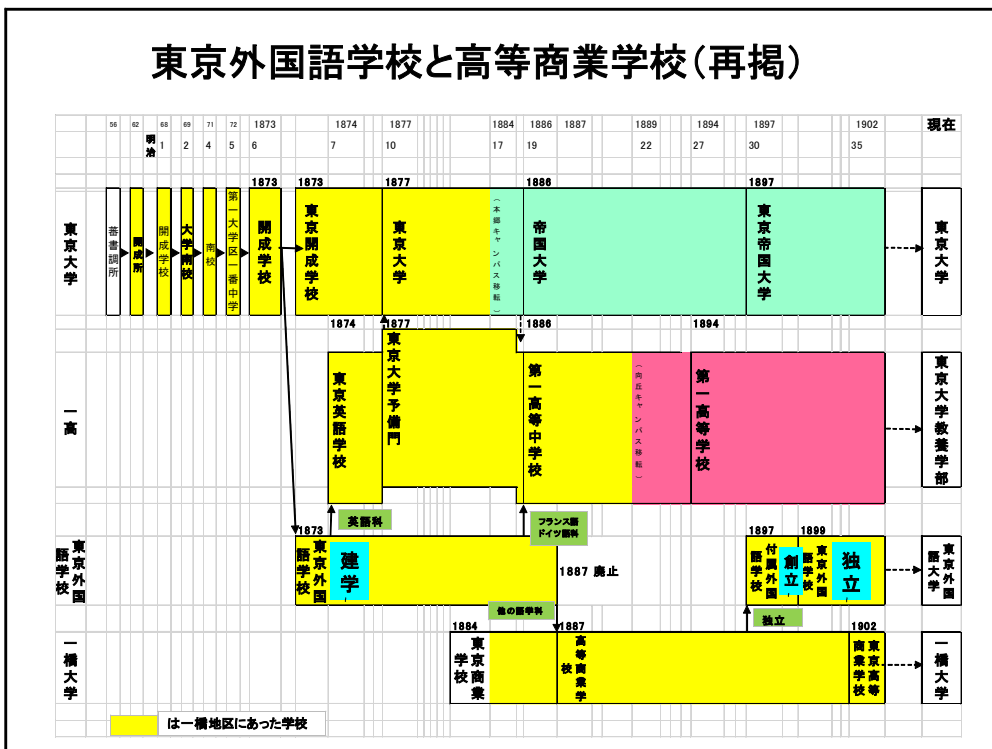
せっかく校舎ができてはすぐ焼失してしまうのである。しかもそれが3回も続くのは不幸である。

東京外国語大学の3つの起源

1949年には、東京外国語大学として出発し、2000年から府中キャンパスに移転した。

図に示すように、東京外国語大学は、大学の起源を3つあげている。

- ①建学の年：第1は1873年(明治6年)の最初の東京外国語学校であり、大学はこの年を「建学の年」と呼んでいる。
- ②創立の年：第2は1897年(明治30年)の附属外国語学校であり、この年は「創立の年」と呼ばれる。
- ③独立の年：第3は1899年(明治32年)の東京外国学校であり、この年は「独立の年」と呼ばれる。



1-9-2. 1907年(明治40年)の東京外国語学校

1903 ~ 1913 年に東京外国語学校の校舎がたてられたのは、前に開成学校（東京大学）のあった場所である。このことを示すのは、下の1907年(明治40年)の地図である。

東京外国語学校の校舎の場所がわかる。この校舎は、1913年に大火で消失してしまう。

その西には、東京高等商業学校がある。東京外国語学校はここから独立し、校舎の一部はこちらにもあった。

東京外国語学校の南には、「学士会」の敷地がある。これについては前述のとおりである。

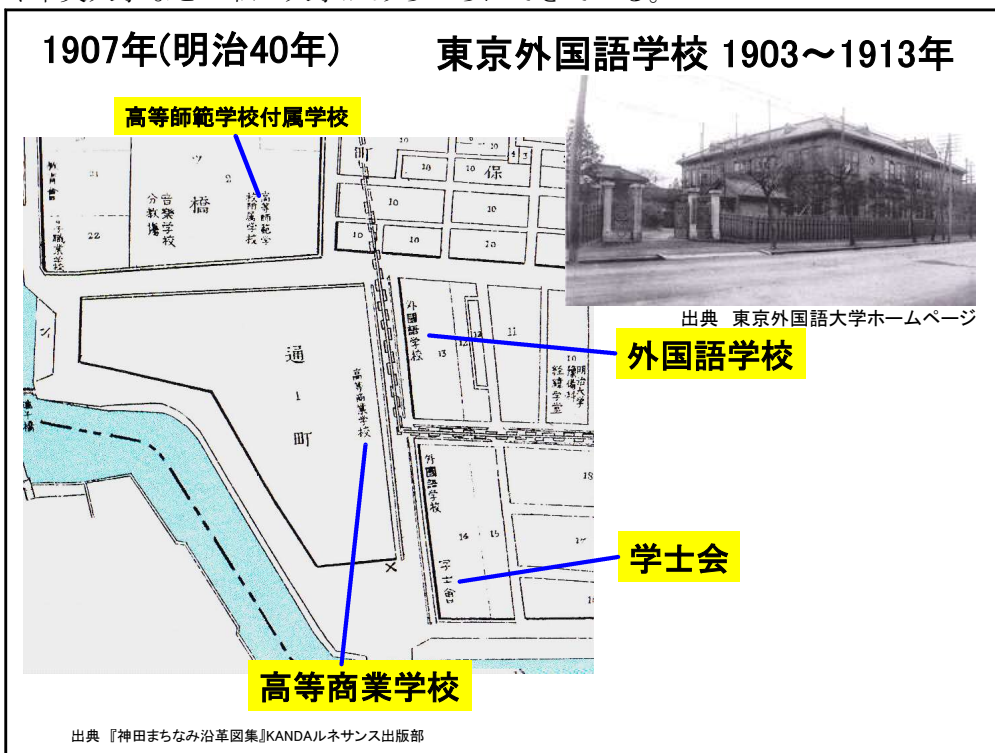
その北には、高等師範学校付属学校、音楽学校分教場、教育会がある。

また、「女子職業学校」という敷地が見えるが、これは1886年(明治19年)に創立された「共立女子職業学校」が1887年にここに移転したものである。

当時は北隣の狭い土地だったが、のちに南側の広い敷地(元の東京外国語学校の敷地)を獲得する。その年代は不明だが、1956年(昭和31年)の地図には、現在と同じ敷地になっている。これが共立女子学園であり、ここには共立女子大学と共立女子高等学校がある。

なお、共立女子職業学校の創立者のひとり鳩山春子は、のちに息子の鳩山一郎が一高に入学する際、全寮制の例外として自宅通学を認めるように5代校長狩野亨吉に迫り、ひんしゅくを買う(後述)。

また、地図の東には、明治大学 予備科 経緯学堂がある。地図には出ていないが、周辺には東京物理学校や中央大学などの私立大学があちこちにできている。



1-9-3. 今に残る東京外国語学校の跡

現在のこの場所を歩いて、東京外国語学校の跡を探してみよう。

敷地の変遷

まず、大学南校・東京外国語学校があった場所の歴史をまとめておこう。

住所は、当時は一橋通町1番地であった。現在は、一橋2丁目の一部となっている。

一橋通町1番地(現在の「一橋2丁目」の一部)の歴史

西暦	和暦		参照地図
1856頃	安政3	護持院原→四番明地	1856年
1862 ~ 1873.8	文久6 ~ 明治6	開成所→大学南校→南校→第一大学区一番中学校 (1873 開成学校は向かい側に移転)	1862年
1873 ~ 1887	明治6 ~ 20	東京外国語学校 (1887に閉鎖)	1876.1877,1883年
1884 ~ 1927	明治17 ~ 昭和2	東京商業学校→東京高等商業学校 (関東大震災後は仮校舎。1927 国立に移転)	1907年

1956 頃 現在	昭和 31	共立女子学園 共立女子学園 (共立女子大学、共立女子高等学校)	1956 年 現在地図
--------------	-------	------------------------------------	----------------

「東京外国語学校発祥の地」碑

学術総合センターの東側の植え込みに、赤い「東京外国語学校発祥の地」碑がある (左中の写真)。

東京外国語学校発祥の地

東京外国語大学の起源は 安政 1 (1857) 年に創設された 蕃書調所まで遡るが、直接の前身である東京外国語学校が開校されたのは、明治 6 (1873) 年 11 月 1 日、この地 (当時の 東京府神田区一ツ橋通町一番地) においてであった。

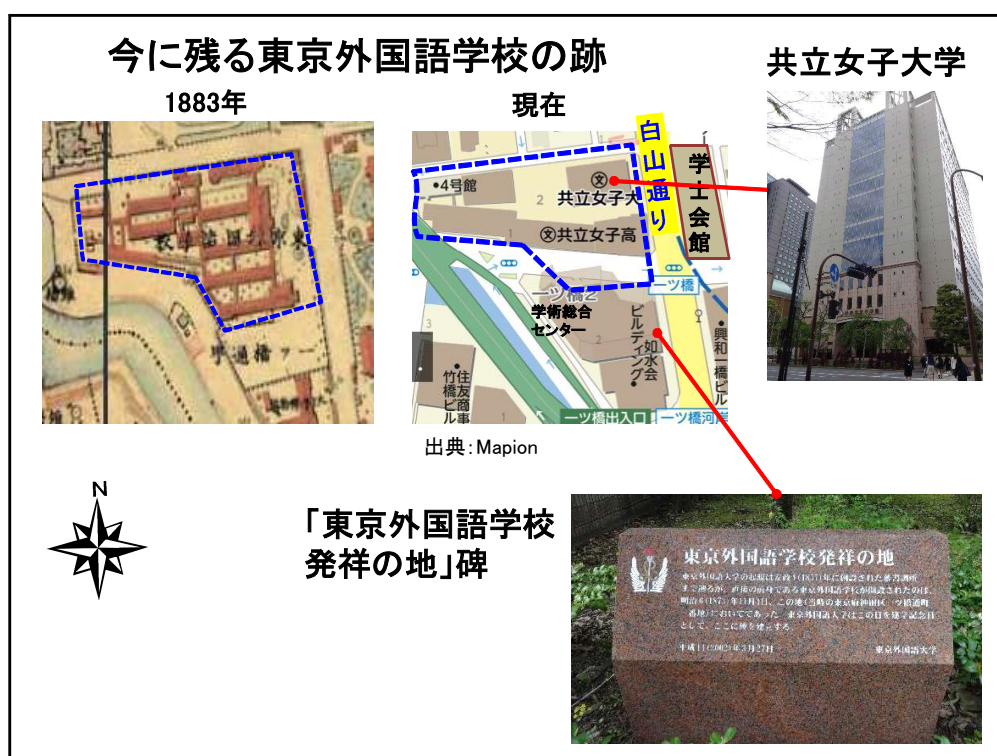
東京外国語大学は この日を建学記念日として、ここに碑を建立する。

平成 14 (2002) 年 3 月 27 日

東京外国語大学

共立女子大学、共立女子高等学校

東京外国語学校があったところは、今は、共立女子学園 (共立女子大学、共立女子高等学校) の敷地になっている。白山通りに面して共立講堂がある。



1-9-4. 大学南校・東京外国語学校 同じアングルから昔と今の写真を比べる

当時の姿をイメージしやすいように、昔と今の同じアングルの写真を比べてみよう。

左下の写真は、前述の「大学南校」(1869 年当時) である。

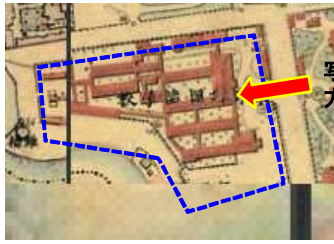
中下の写真は、前述の東京外国語学校の正門 (1873 年当時) である。これらは、ほぼ同じアングルで同じ場所を撮ったものと考えられる。

それから 150 年後、同じ場所で同じ方角から撮ってみると、右下のようになる。共立講堂であり、背後には共立女子学園の高層の校舎がたっている。タイムワープして、当時の学生の視点から、この場所をイメージしてみよう。

大学南校・東京外国語学校

同じアングルで昔と今を比べる

1883年



写真の
方向

現在



写真の
方向

出典: Mapion



1869年 大学南校



1873年 東京外国語学校正門



現在 共立講堂



1-10. 東京商業学校(一橋大学)

前述のように、一橋大学は、東京大学や一高と同じ起源を持っている。

一橋大学のルーツは、1884年に猿樂町に作られた東京商業学校にある。1884年頃から、一橋に移ってくる。1887年には高等商業学校となり、この時、東京外国語学校を吸収してしまう。もともとは、外国語学校の一部として商業学校ができたのだが、力関係は逆転して、母屋を乗っ取ってしまうのである。

この地に40年ほどキャンパスを持っていたが、1923年の関東大震災で校舎が倒壊し、国立市と小平市に新しいキャンパスを作り、1927年に移転した。第2次大戦後に、一橋大学として出発した。

国立キャンパスに移ってから、一橋大学は、この地と関係しており、この地には、一橋講堂や如水会館が建っている(右下の写真)。「如水会」は、一橋大学を後援する団体で、その名前は、渋沢栄一がつけたものである。館の前には、「戦没者学生の碑」がある(左下の写真)。

北側には、学術総合センターが建っている(右上の写真)。

東京商業学校跡と一橋大学



出典: Mapion

戦没学友の碑



学術総合センター



如水会館

如水会館



1-11. 学習院

1-11-1. 学習院のキャンパス

学習院もこの地にあった。

前述の1883年(明治16年)の地図で、東京大学の東隣りに学習院がある(左側の地図)。

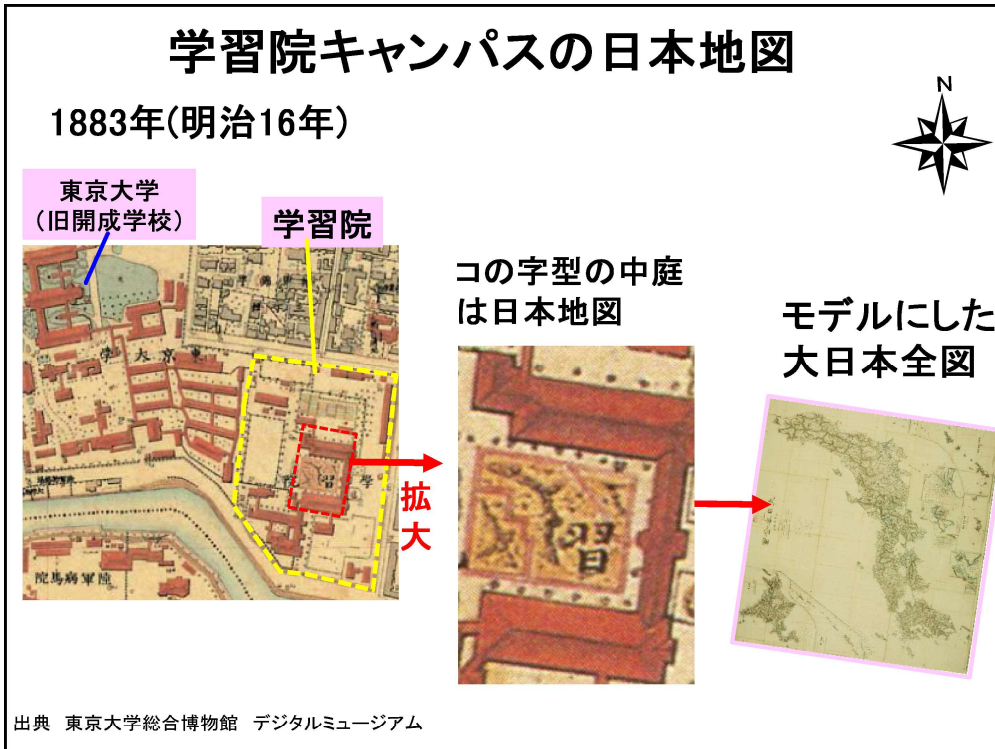
この場所は、江戸時代は護持院の伽藍があったところで、1856年の地図では「二番明地」となっている。のちに陸軍の土地となり(1876年の地図)、1877年(明治10年)に、華族学校「学習院」が作られた。「華族」とは、1884年の「華族令」で規定された称号で、公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の五段階の爵位があった。この校舎は、1886年に火事で焼けてしまい、1888年には、虎ノ門にあった工部大学校跡に移転したので、この地には11年ほどいたことになる。その後、学習院は目白へ移転し、1949年(昭和24年)に学習院大学となった。

地図の中の日本地図

1883年(明治16年)の地図を見ると、建物の配置もわかる。キャンパスの真ん中に「コ」の字型に建物が作られ、内側は中庭になっている。拡大すると、中庭の花壇が巨大な「日本地図」になっていることがわかる(真ん中の図)。地図でもわかるほど巨大な地図だったのである。

中西隆紀氏によれば、よくみると、北海道は地図の左上にあり、沖縄が右下にある。これは当時発行された「大日本全図」の配置にならったものだという(右側の写真)。いかにも教育的な配慮で花壇を作っており、明治時代らしくて、面白い。

出典：中西隆紀『謎解き「五千分一東京図」——明治期神田最後の遺産 「学習院」鉄門と庭園の謎』



1-11-2. 現在の学習院跡地

当時の学習院キャンパスは、今では神田錦町2丁目～3丁目である。正則学園高などの学校があるものの、ふつうの住宅地になっており、当時の広大なキャンパスを想像することはできない(真ん中の地図)。

当時の敷地に建っていた正門は、今は目白の学習院女子大学に移されて、現存している(右下の写真)。

学習院(華族学校)開校の地碑

現在、神田錦町郵便局の向かい側に、「学習院(華族学校)開校の地」碑がたっている(右上の写真)。住所は、東京都千代田区神田錦町1丁目。碑には次のように書かれている。

学習院(華族学校)開校の地

弘化4年(1847)京都御所の日御門前に公家の学習所として設立された「学習院」は、明治10年(1877)華族学校「学習院」としてこの地に創立されました。

同年10月17日に明治天皇、皇后両陛下をお迎えして開業式がおこなわれました。

現在 学習院は、豊島区目白に大学、高等科、中等科、幼稚園、新宿区戸山に女子大学、女子高等科、女子中等科、新宿

区若葉(四谷)に初等科の各学校を設置しております。

この碑は、学習院創立 125 周年記念事業として、学習院の同窓会である桜友会の寄贈により建立したものです。

平成 14 年 10 月

学校法人 学習院 第 24 代学習院長 田島義博

学習院跡地の現在

1883年(明治16年)



出典 東京大学総合博物館
デジタルミュージアム

現在の神田錦町



学習院の鉄門

(現在は学習院女子大学の正門へ移築)



第 2 編 駒場キャンパス編に続く

●元に戻る

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>